
イーストタンプ

☆リノさん☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イーストタンプ

【Nコード】

N0776X

【作者名】

☆リノさん☆

【あらすじ】

ここはどこだろうか。なぜここに来てしまったのだろうか。それすらもわからず、優衣はひたすらに逃げる。とあるコンクリートの街の中を走る。体力の限界も近づいてきた頃、なぜか瞬間移動をしてしまった。「へえ。ここってやっぱり異世界なんだ」

毒舌家の騎士・二重人格の隣国王子・それぞれの秘書・お茶目な色魔狂、などなど……。個性豊かな美形たちが次々と現れる、一種の逆ハーものでございます。

◆◆残酷・流血シーンが出てきます。それに複雑な逆ハーですの

で◆◆◆初投稿である作者◆◆◆お心の広い読者様をお待ちしております。

***登場人物* (前書き)**

登場人物

飛佐木

優衣

15歳

趣味

特に無し

身長

156センチ

特技

国語の成績の低さと数学の成績の高さ

容姿

先生によく指摘される天然のくり色の髪
(本人はあまり好きではない) 赤茶の大きめ

瞳

その他

動物好き

血液型

A型

作者から

「……うーん。特には無いけど(↑無いん

かい!)、

まあわたしとキャラが似ているかな。

国語と数学の成績は真逆だけど」

ルカ

24歳

趣味

読書

身長

182センチ

特技

剣技と頭脳戦

容姿

黒に近い濃い茶髪 蠱惑的な蒼の双眸
整った顔立ちをしているが、本人は嫌っ

ている

その他

いろいろと訳あり

血液型

O型

作者から
ーンです。

「毒舌とこの性格はわたしのストライクゾ

あと今後のストーリーに大きく関わるので
今後を期待しましょう。うん。(↑お前は誰だ)」

ユマキスカル・マユ・フムル・バイトン

21歳

趣味
訓練&散歩

身長
159センチ

特技
身体能力

容姿
蜂蜜色の髪と瞳を持っている

その他
身長が低いため子どもに見間違われるこ

とが多々
本人はあまり負い目に感じていない
騎士団長五位

血液型
B型

作者から
「女の騎士団長とか超懂れます。
このお話の最後にはこの子を使って
物語を面白くさせようと思ってますね」

ユエ・サヴァンナ

19歳

趣味	料理
身長	179センチ
特技	真面目さ
容姿	黒銀に光るくせのない髪に空のような水色
色の瞳	
その他	ヴィアム王国の伯爵家所属 無意識だが実はというと口調は荒め よく熱弁をする
腹黒い	オウリの教師役&秘書
血液型	A B型
作者から い”で	「そうですねー。はっきり言うと、”可愛 終わりますね。ツンデレにしなかったのは 理由があるんですけど、 このギャップは最高です。（作者はギャ ップ萌えです）」

ルーク・アヴァン

20歳

趣味

実験(?) & 読書&紅茶

身長

178センチ

特技

解剖

容姿

肩の前に出し 軽く結った銀髪
(結ばなければ背中より長いくらい)
色々な色の混じった翡翠の瞳

その他

公爵家当主&コウリの秘書
超甘党

血液型

A型

作者から

「書いていて飽きないのが
ルカ君とこの人！って感じです。
個人的に銀髪っていうのがすこぶる
好きなので、
ルカ君の次に伏線が多いのが特徴」

オウリ・赤眼

コウリ・青眼

9歳

趣味

オウリ・落書きや悪戯
コウリ・「えっ？ 趣味？ ユイと

一緒に何でも」

身長

172センチ

特技

オウリ・狙撃
コウリ・双六すころく

容姿

流れるような金髪に、オウリは鮮や

かな赤、

コウリは海のような深い青の瞳

その他

二つの人格、性格の違い

オウリはユエに「クソ餓鬼」と呼ば

れ、

コウリは「変態」か「変態妄想狂」と
固有名詞で呼ばれている

（ユエは気分次第で「殿下」と「様」

が抜ける）

コウリは対人恐怖症&人間不信

血液型

O型

にバトルで。

ね。

態か。」

作者から

「バンバン活躍させたいキャラ。特

その他では、やっぱギャップです

主人公の前では甘ったれなのに、
いざシリアスになると……。

（うわぁあギャップ萌え！）↑変

バイアム・ダ・ジェスワ

27歳

趣味

お酒と女

身長

193センチ

特技

？

容姿

猫科肉食獣の顔立ちと金色の目
赤褐色の髪

その他

バロン王国の第一王子であるが
街を徘徊するひねくれ者

血液型

O型

ど、

作者から

「俺系ってあんまり出さないんだけ

女好きといえは「俺」です。

やっぱこの人もギャップですね。

女好きなのに、

いざ20人の女の人に囲まれると

狼だけど吠える犬、みたいな」

負ける。

***登場人物* (後書き)**

ギャップ萌え精神はどうしても抑えられません。
（↑謝罪&土下座しろ）

舞台設定

？？———＋§＋§アレシユワンド大陸§＋§
 十—————？？

大陸の東端・バロン王国 山脈に囲まれ、
 大陸のなかで一番小さな国
 である。

大陸の中央・ヴィアム王国 大陸一の面積と富を誇る巨
 国。
 時代設定・21世紀イタリア

大陸の西端・西ヴィアム すべてが砂漠で、
 唯一のオアシスに巨大な都
 を作っている。

大陸の最南・フムユスト^{こしうこく}皇国 すべてが謎に包まれ
 ている国。
 われている。
 存在しないとも言

—— バロン王国、ヴィアム王国、西ヴィアムに存在
しないもの——

G P S。 (前提に宇宙が存在していない)

火山。石炭石油。自動車。

T V。

警察。 (警察のようなモノは存在有)

日本の常識。高層ビル。

ビニール袋。クラブ………など、その他もろもろ。

序章

「いったい……何なのよ。あいつら……」

はあはあと肩で息をしながら、優衣はコンクリートの壁に手をついた。

肩にかかる程度のクセのあるくり色の髪。チェック柄ブレザーの制服。赤茶の瞳というごく普通の顔立ちをした優衣は、なぜか見慣れないコンクリートの街並みの中を逃げていた。

昼のはずなのにコンクリートの家から子どもが出てくることはなく、街は静まり返っている。

ただ、赤い制服を羽織った集団が、自分を追いかけているということだけ。

体力には少しばかり自信がある優衣でも、集団の男たちに追いかけられるというのはさすがにキツかった。

（しかも……、ここにくる前の記憶が全く無いって、どういうこと……？）

「——いたぞっ！ 必ず『空の城』^{ユスリム}へ連れ戻せ！」

（はっ？ もう見つかった？）

外人のような顔立ちをする男たちの声に、優衣は痛む足を気にせ

ず走り出す。

コンクリートの家の角から出てきた、赤い制服の男たち。兵士のような甲冑をしていない代わりに、その手には様々な武器が握られていた。一人は大剣、一人は斧、一人は鬼の金棒と、まるでどこぞかの小説の世界に入ってしまったようだ。

「傷は付けるな。我が主君が殺すより先に価値があると仰られてい
る」

（————どう考えても味方って雰囲気じゃないわよ）

追いかける男たち。逃げる自分。

国語の成績よりは体力の方が自信はあっても、地理に関して無知な優衣の方がどう考えても不利だ。

前の角から五人の男たちが見える。これでは完全にサンドイッチ状態だ。

『————抵抗すると思うので眠らせてください』

大剣を持った男にそんな通信が入る。男は少し考えた末、主君の考えには逆らえないとばかりに大剣を構えるのを止める。

（な………、に……）

大剣を持った男の行動に、何も知らない優衣は疑問を覚えずにはいられない。思わず身を硬くすると、けたたましい音とともに視界が赤色に染まった。

？緊急避難警報！ 緊急避難警報！ 『第6 赤蜘蛛』、第三区域から南西に進行中！ 第五区域のみなさまは、ただちに指定の地下シヤッターへ避難してください？

（―――――っ！？）

その瞬間、幾何学模様の光の帯が、優衣の周りをぐるぐると回る。メビウスの輪のように八の字を描いてまわる紫の光に、すいこまれるように優衣は意識を手放した。



「―――なっ……！ 消えた……っ！？」

まだ耳元で、機械音声が人民のいない第五区域に警報を伝えるなか。

大剣を持った男は、驚きのあまり目を剥いた。
その場にいる誰もが、さきほど娘がいた場所を見て、瞠目する。

「瞬間移動を、したというのか………！？ まさか、ありえない………！」

自尊心の高い男が、悲痛な叫びを上げた瞬間だ。

序章（後書き）

初心者です。これからよろしく願います。

(――――っ)

空中に浮いたような感覚がして、優衣はとっさに身を丸めた。一瞬の間もないほどの間で絨毯に肩が当たり、少しのあいだ痛みに耐える。

しばらくしてから、立ち上がりうとして手を突いた瞬間、優衣の目にそれが映った。

(……いつのまにこんなものが)

右手薬指にピッタリと嵌る、ひんやりとした赤と黒の指輪。二色の指輪を交錯させたように嵌められるそれは、見るからにすべすべそうで独特の光沢を放っている。

真紅のような赤い指輪には、規則的な方陣が連なるように彫られ。闇のような漆黒の指輪には、筆記体のように流麗な文字が刻み込まれていた。

しばし見入っていると、ふと目の前に人がいたのに気がつく。

「……え……………っ」

一人用のソファに腰をかけ、足を組んであまつさえ頬杖をする青年。

黒に近い濃い茶髪。長い睫毛からは蠱惑的な蒼の双眸が覗き、右耳につけた紫のピアスがそれを際立たせる。

長身というほどではないものの、立てば180はある体躯は男性にしては細身。

黒い騎士服と黒い手袋という、黒に尽くされた茶髪の青年は、切れ長の瞳で優衣を見下ろしていた。

「だ、だれですか……………?」

深くて、長い沈黙のあと、呆れため息が青年から発せられた。

「貴様の頭には、警戒するという文字はないのか? 私の記憶からでは、普通なら泣き叫ぶが良いところだ」

「いやいや、さすがに初対面で泣き叫ぶは失礼だって……………っ」

言いながら、思わず優衣は床に正座した。

茶髪の青年は頬杖を止めて、しげしげと優衣を上から下まで眺める。

「床に座る習慣。見慣れぬ服装。……やはりか——」

冷たさを宿した深みのある声が、抑揚も無く発せられた。

そのことに疑問を覚え、優衣は「やっぱりって?」と問い返す。

「……好奇心旺盛なのは、あまり良くないことだ」

「っ!」

冷たい声が、優衣の耳を打つ。

「とりあえず名前がないのは不具合だろう。私はルカ。バロン王国
王城護衛騎士団に所属している、——」

優衣は、ゆっくりと頭を降下させた。

（そうだもんね。ここは、わたしの知らない場所なんだから……、
わたしを警戒しないはずが無い……。職業柄、というのもそうだろう
し……）

まして戦争をしない日本など、相手を異常に警戒することはない。
せいぜい、怪しい、変質者、程度に警戒するのが妥当だ。
自分が警戒したことはあるが、警戒されたことは一度も無い。

（そうか……やっぱり一人なんだ…）

一人は慣れっこだ。いや、一人の方が自分にとって楽だった。

他人と合わせるのは得意。でも嫌い。

他人に恨まれるのはいい。でも傷つくのは嫌。

他人と一緒に居るのは不得意。でもアレ以外ならば嫌いじゃない。

「……………」

優衣はすっと立ち上がった。それを見た茶髪の青年が、眉を寄せ
る。

自分が大きな両扉に向かって歩き出したのを見て、彼も立ち上
がった。

「どこへ行くんだ」

「……………あなただって尋ねてるじゃない。それって理不尽って言うのよ。……………そんなことどうだっていいでしょ。とりあえずここから出て行くの」

「ふうん」と、あまり興味無さそうにルカが言ってくれる。

そのまま両扉を引こうとした、その時――――

「！」

「まあ待てよ。そう急ぐことはないだろう？」

黒い手が、両扉を元の場所に押し戻した。優衣は、彼を横目で睨みつける。

「なに？ 何か用？」

性格上、優衣は男っぽい喋り方をすることがある。いまは特に冷めているため、目も据わっていた。

「一つ教えてやる」と、ルカは唇を美しく歪ませる。

「この世界は貴様の常識が通じないことが多々ある。貴様をこの屋敷に連れてきたのは、この私だ」

「へえ。それで？」

わざとらしく挑戦的な笑みを刻んでおく。我ながら良い演技だ。

「貴様は、どうしたい？」

整った顔が、優衣に近づく。

「どうって、ただ一人で静かに暮らしたい」

「ほう……？」

それは確かに純粋な考えだった。

一人で、静かに暮らしたいと、いつも願う。

「だが、一人暮らしは無理だな——」

しかしこの男は、あっさりとそれを玉砕してみせた。「どういふこと」と、優衣は絶えずルカを睨む。

「成人するまで、親または後見の許可無しに独立を認めず。生活状況に至っては例外である。また貴様は身元不明の娘。何かに巻き込まれたとしても、騎士団は貴様を見捨てるだろう」

「……………」

優衣は思わず押し黙った。切れ長い蒼の双眸が、試すように自分を射抜く。

「……やってみなきゃ、わかんないでしょ……」

優衣のつぶやきに、ルカは眉根を寄せた。

「……仕事やって……。だから、やってみなきゃわからないでしょ。わたしはもう15歳。子どもといえる年齢じゃない……」

「私にとっては、まだ15歳だが」

「この世界でも、15歳で働く人だっているでしょ。それと同じよ。安全な場所でぬくぬくと育ってるほど、わたしの家は裕福じゃない」

対照的に、さほど貧乏な家でもなかった。旅行にも行けるほど余裕はある。

「だから、わたしも仕事をして、一人で――――」

「――――現実には、そう甘くじゃない」

「……！ ……わかってる！ わたしだって現実を知ってる！」

「何を知ってるって言うのさ」

「他人とは違う現実よ！ 他人には当たり前前にあって、わたしには当たり前じゃない現実！！」

ルカが、一瞬だけ目を見開いた。

「それは……、自分自身の理論的現実だろ……――？」

「そうよ。自分だけの理論的現実よっ。そんなことより、何か仕事を――――」

「―――なら」

ひどく挑発的な表情でありながら、冷めた言葉を発している彼が。

「親のいない現実を、私が教えてやる―――」

冷徹にまでも、優衣に言っただけ。優衣は、ただ「ええ」と、力強く頷くだけ。



自尊心の高い大剣使いが、青年の目の前で申し訳無さそうに頭を垂れた。

「申し訳ございません。目標を見失いました。……………こたびの罰は、重じんで受け入れさせていただきます…」

部屋は薄暗いため、大剣使いの主君の表情を窺う事は出来ない。当たり前だ。この部屋は主君の研究室でもあり、それに主君の顔を直接見ることは決して叶わない。

「頭を上げてください。私は貴方よりは上の立場ですが、貴方の主君ではありません。本来忠誠を尽くすのは、この国唯一の皇太子殿下だけですよ」

自ら主君ではないと否定する青年は、同性でもうっとりとするような美声で尋ねる。

「それよりも、私の自作したクリームたっぷりのケーキ。いつのまにか半分が無くなっていたのですが、貴方知りませんか？」

……大剣使いから嫌な汗が噴出したのは言うまでも無い。

確固たる決心を持って、大剣使いはおずおずと口を開く。

「申し訳ございません。止めるまもなく、サイル皇太子殿下が味見をなされ……ただ今療養中でございます……」

「……。つまりは「つまみ食い」をしたと？」

青年が「療養中」という言葉に反応しなかったのは、あれを食べたらどうなるか知っていたからだ。

……しかし国のトップたるお方がケーキをつまみ食いし、挙句療養中とは笑えない話だ。

「効果は抜群だったようですね。実はというと、まだお会いしたことが無いエフエム殿に食べてもらいたかったのですが………」

残念です」

残念じゃねえ！ という言葉が喉元まで出かけたが、男は自制心と神経を使ってそれを飲み込んだ。

「疲れたあ」

仕事と言うものの、ほとんどが荷物運びという雑用であった。優衣は腰を伸ばしつつ、周りを見渡す。

古い小屋のような店。カウンター席にはまだ人はおらず、静か過ぎてガランとしていた。

ここは簡単なお酒が飲める居酒屋だ。さほど危ない職業でもなく、店主も気の良さそうなおじさんだった。

「樽に入ったワイン運び。……これ一つどれくらいするかな……」

いまさつき運んできた木箱や樽を見下ろし、優衣は思う。

(……まさか、本当に許してくれるとは……)

『居酒屋か果物屋。私が後見人として話をつけておいた。どちらか好きなほうを選べ』

ルカの冷たい言葉を思い出し、優衣はぶるぶると頭を振る。

居酒屋にした理由は、この国の通貨である『ミン』の給料が良かったからである。子どもで贅沢をしなければ、一日50ミンである程度生活できるらしい。この居酒屋は労働で一日68ミン稼げるので、いいくらいの楽しみもできた。

（この店は安定しているらしいし、わたしも ある程度体力あるし
……万々歳ね）

思わず心の中でガッツポーズ。

と。

「――あれ？ あ の、まだ、開店時間じゃないんですけど……」

チャリんと子鈴を鳴らして入ってきたのは、自分よりは体つきの
いい少女だった。

動きやすそうなハーフパンツ。胸のなど完全に無視した白シャツ
に上着。サラサラストレートの蜂蜜の髪は短く、少し切れている髪
と同色の瞳。

桃色の唇は一文字で硬く結ばれ、少年のような格好をした少女だ
った。

「……………ちよつとどいてくれる？」

「え？ ええはい」

自分より高いソプラノ声の少女は、優衣がそこを退くとさつさと
奥へ入ってしまった。近づく、自分とさほど変わらない身長だ。
少女の方が1〜2センチ高いくらいだろう。

「あの、開店時間まだですよ？ それに勝手に奥へ入っちゃいけな
いっておじさんが言っていましたよ」

そんな声も空しく虚空へ消え、しばらくしてから少女が出てきた。

優衣のところへ近寄り、ギロリと睨んだ。

「あんた、……………だれ？ 見たところ、変な格好してるけど——
——それで、油断でも誘ってるつもり？」

「油断って……別にそういうんじゃないけど、わたしは優衣だよ。
ここに雇ってもらってるの」

「ふうん。そういうんじゃないかと思ってた。武器もないし、無警戒だし、見た目からしてそうね」

（凶星なんだからいいけどさ……………）

頬をポリポリ指で搔く。その右手を見て、少女が一瞬だけ息を呑んだ。

「……………あなたも大変そうね。そうだ、私の名前、教えてあげる」

「あげる……？」と目を剥いた優衣など気にもせず、少女はにこりとも笑わず告げる。

「私はユマキスカル・マユ・フムル・バイトン————、ちよつと、どうして背中を向けるの」

「……………。だって名前が長すぎるんだもん！ もうマキちゃんでもいい？」

「今の全部よ。母と父の名前を複製させて出来たのがこの名前。普通では、ユマキスカル・バイトン。

……そうね。初対面のあなたにいきなり愛称で呼ばれるのもあれだ

けど、いいわ。あなたなら、オツケーにしてあげる」

「は、はあ……」

マキという少女は、つかつかと優衣の横を素通りした。

「——またお会いしましょう。そのうち必ず、ね」

ちゃりんと、扉を開る。そして、最後にこう言い残した。

「あとこの居酒屋、いいと思うけど、あとできっと後悔するわよ」

マキは、さっさと出て行った。



優衣は68ミンを貰いうけ、ヨーロッパの街並みを歩いていた。レンガ造りの家々。真ん中には整備された馬車道があり、大通りは現代ヨーロッパと見間違われてもおかしくないほど活気だった。

それは馬車道を占領するほどだ。もう歩行者天国と化している。

（それにしても、デッカイ王城よね）

メイルという街のほぼ中央に君臨する、白亜のお城。それはまるでノイシュヴァンシュタイン城のようで、高さにしてみれば高層ビ

ルだ。

と、そんなことを思っているうちに、宿屋についた。

レンガ造りの宿屋のなかは意外に広くて、カウンターで眼鏡をかけるおばあちゃんに近づく、

「この宿で一番安い部屋はありますか？」

「……安い部屋かえ。ちよいお待ち」

壁にひっかけている部屋の番号を見やって、白髪混じりのおばあちゃんは「お嬢ちゃん一人？」と虚もないことを尋ねてきた。

「え、ええまあ。——安い部屋はありましたか？」

「そりゃ大変だろうね。——安い部屋はここから一番奥の部屋。料金は前払えだよ。そーいや何日泊るんか？」

「……住み込みってできますか……？」

「住み込みかえ。……ここは最高でも一週間が決まりゆえ、住み込みは無理んだ」

妙ななまりかたをするおばあちゃんに、優衣は「やっぱり」と少し肩を落とした。少し考えた末、口を開く。

「……あの、いまあまりお金がないんです。一週間泊るんですか、その日その日に支払ってもいいですか？」

「それじゃ商売あがったりじゃ。でもあんさん、一人じゃろ。特別

にその日その日に支払ってもええで」

「本当!？」

明らかに目を輝かせた優衣に、おばあちゃんは「今日は6ミル頂こうかえ」と、要求する。優衣は銭を6枚出し、ほっと一息ついた。

「まいどあり。……そーいやはあの部屋のシャワー、お湯がでないえ大丈夫かえ？」

「ああそうですか。でもそれはご心配なく、です」

いったいどこから湯を引いているのか疑問だが、優衣は歩き出す。

(そーいやは、……おのおばあさんシャワーって言ってたよね。……年長の方なのによく横文字覚えたね……)

一番奥の木扉を開けると、狭いが綺麗な部屋であることが判明した。

そばにある木製のベット。その横にある木の机よ椅子に花瓶。もう横の壁に一つ扉がついてあったが、それがシャワールームだろう。

木製の机に鞆を置き、優衣は(そーいえば)と、今さら気付いたことがあった。

(わたし、この制服しか持っていない………)

今から買いに行こうにも、外は真っ暗で店じまいをしている。

理由は知らないが、夜の10時を超えたら指定の店以外は店じま

いをしなければならないらしい。

(どっかにコンビニ無いかな……………)

この世界に、あるわけないのである。



昨日は水のシャワーだけ浴び、しょうがないから制服を着た。朝起きてすぐに手ごろな服を買い、さっそく宿に戻って服を試着。

(意外にピッタリサイズ。お値段も合計8ミルとお得だし……………♪)

社会の歴史からすると、この国は結構な近世ヨーロッパだと思われる。

ある程度の進んだ科学。(二昔前のシャワーを見て)

膝が見える程度のスカート。(今着てます)

これぞ自由を愛する文化と言えよう。

(よしそれでは、仕事に行って参るのであります!)

勝手に敬礼をし、勝手に部屋を飛び出す。もちろん皮の鞆を持って、だ。たくさんの貴重品が入っているし。大通りを抜け、路地の奥にある馬小屋のような店に入る。

「おじさん、おませた——………しました…?」

玄関から勢いよく入ったと思ったら、居酒屋にあるはずの物がすべて無くなっていた。

(うそ………。どうなってるの…、これ………)

木の椅子と机。そしてカウンター、まではいいのだが。カウンターの棚に置いてあるボトルも、昨日置いていた木箱も、何もかもが、無くなっていた。

人の気配すら………ない。

「……………誰も、いない……………」

「————誰もいないと思ったら、なんだ娘が居たのか。ヘッ」

思わず中に入ってつぶやいたら、背後で酒のにおいとともに男の声が聞こえた。

ズカズカと、居酒屋に入ってくる、酒の臭いをさせた男二人組。酔っ払っているのか酔っ払っていないのか、という最中で、先にしゃべった大男がしゃべり始める。

「おれらあな、ここんとこの店主に金貸してんのよ。わかる？ そんでさあ、今日返してもらおうと思っとたんけど、ここのクソ爺が金も返さず出て行っちゃって。いくら騎士団が捕まえてくれるって言っても、虫の居所が悪いってわけ」

「……………いわゆる、性質の悪い借金取りってやつね」

「そういうコト」

にやりと、不気味に口角を吊り上げる大男。その隣にいた細身の男は「だから」と付け足した。

「あんたに、それを払ってほしいわけ」

「……………お金、持ってませんが」

「違う違う！ お金は後でいいから、体で売ってくれる？」

「つぎやほごっ！」

「「つぎやほごっ？」」

大男が奇妙な声を出して倒れ、優衣と男の声が不本意にも重なる。気絶してるのか動かない大男に、細身の男が「おい」と肩を揺らす。

（…………見た目とは違いタフじゃないんだ）

てつきり、どんな攻撃にも屈しない鋼の肉体、的なことを想像していたのに、と、優衣が場違いな感想を抱く。

「おい。誰にやられた？ おれには何にもわからねえぞ」

「————それって、私のこと？」

「へ？」

男が振り返った先には、蜂蜜色の髪と瞳を持った少女が立っている。ただし、彼女は白い軍装を上からはおり、不敵な笑みを浮かべていた。

「ちょっと蹴りを入れただけで昏倒するんだから、こっちが焦っちゃたわ」

マキの横で、白い軍装を羽織った男たちが、槍を構える。細身の男の顔が、徐々に蒼白になっていくのを、優衣は知らず。

「いいわ。改めて自己紹介。私はバロン王国おうじょうこえいきしだん王城護衛騎士団、騎士団長第五位・ユマキスカル・バイトン——」

「金融関係は私専門外だから後はよろしく」と、後ろにいる騎士たち
ちにマキは告げる。

優衣はしばらく、その場を動けなかった。

3 (前書き)

読んでくれた方に感謝！

屋敷はまではマキに送ってもらった。断ったのだが、彼女はなぜか屋敷の場所を知っていたのだ。

とりあえず床に正座して、優衣は王様のように椅子に座る茶髪の青年を見上げた。

昨日着ていた騎士服ではなく、白シャツに黒い上着というシンプルな服装だ。

「――言いたいことはあるか」

「……。言うコトは無いです。ただ、一応謝ります。ごめんなさい」
謝罪の気持ちはあったのは確かだ。だが、それ以上言うことはない。

「――ここはな、行き場を失った子どもの集う場所だ」

（……え………？）

思いのほか穏やかな声が、優衣の耳を打つ。ルカは遠くを見る目で、独り言のようにつぶやいた。

「孤児院とはまた違うが、親がいるいないに関わらず、ここの屋敷の主人は子どもを受け入れている。精神的・肉体的外傷を受けた子どもだ」

（――精神、的……外傷）

優衣の目が、徐々に虚ろになる。記憶が、フラッシュバックしそ
うだ。

「…こんな話をしてどうせ無駄だな。やつが来るまで、ここに
いてもいなくてもかまわん。どうせ秘書殿は、今日来るだろう」

（ひ、秘書って誰よ）



改めて思うが、この屋敷は広すぎじゃないか。そして、使用人に
連れられて入ったのは、自分の自室と言われる部屋だった。

応接室。白いテーブルに緑のソファ。左の部屋は大きな天然石の
脱衣所。右の部屋は大きなベットがある寝室だ。

（……一人で三部屋も使うとか……、リッチ過ぎる……）

そう思って優衣は廊下の外に出る。すると向こうから、使用人と
思われる服装をした女性がこっちに来了た。

「ユイ様に会いたいと仰られる方がいますが、どうなされますか？」

「へ？ ああはい。いいですけど」

（……わたしに客？　この世界で友達なんか作った覚えはないんだけど）

「部屋でお待ちください」

部屋で待てと。しかしいったい誰だろう。思い当たる人物なんていないのに。

しばらくしてから、両扉がノックされた。

「はい」と返事する。

部屋に入ってきたのは、美形優男だった。

（ここって……、美形しかない世界ですか？　乙女が夢見る……）

ストレートのサラリとした黒銀の髪。水色の双眸の奥には、野生的な光を放つ何かが垣間見える。

濃い青を基調とした燕尾服と、顔に貼り付けた穏やかな微笑は、まさしく執事に相応しい。

「執事なひと！」

「……。違います。何であんなクソ餓鬼の世話なんてしなきゃならないんですか。わたしはただの秘書です！　決して執事ではありません……！」

超猛烈否定された。しかも若干固有名詞が入っていたのは気のせいだろうか。

「そういえば自己紹介がまだですね。わたしはユエ・サヴァンナ。お迎えが遅くなって申し訳ありません。すぐにでも王宮に戻りましょう。ユイさん」

黒髪の青年が優雅に一礼————つて。

「なんでわたしの名前を！？　　ってかお迎えって……………！」

「今からでも馬車に乗っちゃいますか？」

「うん、……………ってかとりあえず人の話を聞けええええええ！」

ユエはきょとんと目を瞬かせた。

……………意外にそれが可愛かったりする……………。

「ユイさん……………。やっぱり記憶が消えてしまってるようですね……………」

「えっ？　　てかその前にあなた自己紹介したっしょ」

「わたしはその場所にいなかったんです。惜しいことに」

「そうなの？　　それに記憶がつつっ」

……………舌嚙んだ。

「大丈夫ですか？」

痛くて引きつった笑みを見せる。ユエは近づき、優衣の顔を下か

ら覗き込んだ。

（無駄に美形の人は顔を覗き込むな……って言えたらどんだけ嬉しいか）

心の中で白旗を振る。駄目だ。美形に勝てる気がしない。優衣はそう思いながら、うさんくささ倍増の目でユエと視線を合わせた。

「王宮に行きましょう」

「話がぶっ飛びすぎてる気がするんだけどっ？」

しかしユエは、あくまで朗らかな微笑を湛えている。

（ずるい。すぐくすっごく、ずるい）

目の付け所がないほどの美形っぷりに、優衣はいつそ呆然としてしまう。

「あのね、王宮に行くとか意味わかんない——」

「————後見人の私を差し置いて、勝手に国外へ出て行ってもらうのは困るな」

バンと、乱暴に扉を押し開いたのは思ったとおりルカだ。ユエは反射的に優衣を背中に回し、ルカを睨みつける。氷のような澄んだ蒼い視線と、空のように澄んだ水色の視線が、探り合うように交錯した。

「……何者だ。名を名乗れ」

「さすがは貴族のご身分。命令口調はお手の物のようだな」

けなすように、ルカは鼻で笑う。右耳に付けた紫のピアスが、小さく揺れた。

「第一発見者であり後見でもある男さ。初めまして、ヴィアム王国の秘書殿」

「……………」

意味ありげに視線を送ったルカに、ユエは複雑な心境で口を閉じる。優衣は美形の青年二人を交互に見比べ、ただただ疑問符を浮かべるしかない。

「秘書殿。正式な後見人は貴様の王子だろうが、この国においては私が後見人だ。少しはわきまえてもらおうか」

「……………。申し訳ありません……………」

（こんな奴に謝らなくてもいいんだよ？）

真面目なユエは几帳面に頭を下げた。ルカは自身の前髪をくしげする。

「…それで、正式な署名はもらってきたのだろうか」

「はい。変態妄想狂——失礼、コウリ殿下からユイさんを引き取り

たいと、正式に署名を」

「……なるほどな。本人の意思さえあれば、すぐに王宮に行けるわけだ」

ユエがルカに近づき、彼に書類を渡す。一通り読み通したルカは、唇を笑みのかたちに変えました。

「貴様はどうしたい。王宮で暮らしたいか？」

ルカの冷たい視線と、ユエの期待こもった視線が、自分に注がれる。

王宮で暮らす？

いきなり説明もなしに王宮とか、意味わかんない。

「王宮に、行きたくありません」

「ほお？」 「！ ユイさんっ！」

ユエの悲痛な叫びが、部屋を木霊する。

「それは、理不尽だと思います。わたしは王宮に行きたくありません」

「ユイさん、落ち着いてください。王宮ならあなたの味方となる人がたくさんいます。この国よりは、王宮の方が安全なんです。どうかわかってください」

「それはかなり独断の偏見だな若造。それを決めるのは貴様じゃないだろ」

ルカが黒い手袋の皺を伸ばしながら言う。

「全てを決めるのは本人だ。それに行かないとは言っていないだろう。そのような庇護欲があるのなら、少しは待つという行為を知らんのか」

「……不本意だけど、わたしもルカに同感」

ユエは苦渋のすえ、少し身を退いた。

「……わかりました」

すごく渋々感が出ているがそこは気にしない。

「一週間経ったら、お迎えに上がります。ですがお願いです。ぜひ王宮に戻ってきてください」

是とも否とも言わず、ユエは一礼して流れるような動きで優衣の手を取った。

（なに）と思う暇も無く、なれた手つきで唇を押し当てる。

（っっ！！）

「では。また一週間後に」

動揺しきった優衣に対して、ユエはルカにも一礼を取って速やかに部屋を退出する。その背中を見送ったルカが、少し眉根を寄せた。

「一週間とは、早い日程だ……。それほどあちらは急いでいるのか……」

つぶやき、カツカツと長靴を鳴らして、優衣に近づく。

「……まさか、まだ屋敷に居たいと言うとはな。この街で楽しいことでも見つけたか？」

「……。今日中に来るって言った秘書殿って、ユエのことだったの？」

ルカの質問には答えず、優衣は逆に問い返す。「ああ」と、ルカは頷いた。

「貴様を引き取った時から、すでに若造が言っていたからな」

「……。そういや思い出したけど、引き取ったって？ てかどうやってあそこから移動したの」

瞬間移動、というのか、それともただ単に気絶していただけなのかは知らないが、一応尋ねてみる。

ルカは若干渋面を作って「運んだのは私だが……。貴様がいたと

いう場所から移動したのは知らんぞ」と、小さな声で言った。

「知らないの？ 一番、それも何でも知ってそうな顔してるのに？」

「……。うるさいな」

言い、黒い手袋のまま優衣の頬を引っ張った。

「い、—————っ」

「————とりあえず貴様は、生きてればいいんじゃないか？」

整った顔を近づけ、ルカは皮肉げに笑う。

すぐに離れて、彼は部屋から退出した。

（い、生きてればいいんじゃないか……って—————）

何ソレ、と、尋ねる声は、空しく虚空をさ迷った。

3 (後書き)

ついに二人目の美形登場！

わたしが知らないあいだに読んでくださっている方々、ありがとうございますっ！

4 (前書き)

物語の進み具合が早いのは作者のせい。

特に何も無く、普通に一週間が経過した。今日はお祭りらしく、王城護衛騎士団の者はすべて召集されているのだが。

「……あなたは行かなくていいのね」

右も左も本で埋め尽くされた書斎。悠然と椅子に座って本を読むルカに、優衣は呆然と立ちながら質問を投げかける。

なんか異様にサマになっているって、こいつだとムカつくな。

「あなたも騎士でしょ？」

「……。私は、他の騎士とは違う」

「はっ？ 何が？」

いきなり立ち上がったルカに、優衣は思わず身構える。

「……なぜ私の軍装が、他の騎士と違って黒い色をしているかわかるか？」

「え？ ああ、そういえば……。騎士の人ってみんな白だったような……」

「護衛騎士団の位は、騎士団長、二級騎士、三級騎士、従騎士と言った四つの位に分かれている。位としては二級騎士だが、どの位にも黒い軍装なんてものはない。例外中の例外だ」

「それで」

続きを促すと、ルカは見たことが無いような苦笑いを浮かべて答えた。

「――闇に姿をくらませ、日の光に決当たることの許されない“黒”の存在。裏で暗躍する者に鉄槌を与える、いわば影の覇者さ。私としてはこれが殉職だ」

(……なんで……)

誇りに思っているのだろうか。でも、そんな感じの表情じゃない。

(……むしろ)

いっそ、自分自身を哀れんでいるか、さげすんでいるかのような。そんな表情だった。

「……そのうち秘書殿が来るだろう。部屋にいるか、外に行けよ」

微笑を消し、ルカは言う。それを見ているのが辛くなって、優衣は足のつま先を扉へと向けた。



(とか言いながらなんですよねっ)

屋敷を出て約八時間。今は太陽が沈んでお星様がちらついている時間帯。

街の中央に鎮座するお城を見上げても。

王城の敷地内である庭園の奥の林を見渡しても。

はてや明日の方向へ見やっても。

(わたしが迷子なのは変わらない……………)

そう。あれやこれやと見ているうちに、優衣はいつのまにか王城の林に迷い込んでしまったのだ。

……我ながら何て情けない現実。トホホ……

「いったいどこから入ってきたのかわからないから、この林から出られないわけで」

優衣の記憶では、裏門の端っこに出来ていた隙間からこの林に入った気がする。なぜ裏門の隙間からこの林に入ったかというのは聞かれたくない話だが、とりあえず自分が危機的状況に陥っているのは変わらないわけで。

ヤケにデカく感じる。ノイシュヴァンシュタイン城。

「――あの辺で物音がしたぞ」

「コラッ。声を出すな。気付かれるだろッ」

まぬけな衛兵もいたのね。

優衣は獣道ともいえる小道を、ゆっくりと後退し始める。見つかりませんように……、と何度も心の中でつぶやきながら。

シャキッ、と小枝を踏んだとき、いきなり腕を捕まれ捻りあげられた。

「いたっ」

「っ！ 子ども!？」

黄色いランプが優衣の顔を映す。明かりを持っていた片方の男が「どうする?」と言った顔で相方を見た。優衣を取り押さえた男の方は、少し考えたあと優衣の腕を放した。

勢い余ってこけそうになったが、何とか堪えて二人の衛兵を見上げる。

「おまえ、なぜこの林にいる。ここは一時間ほど前から閉鎖されているはずだ」

……えっそうなの？

（わたしこの林で二時間は過ごしたんですけど……）

「ま、迷ってしまったんです……」

できるだけ子どもっぽく見せようと思ったが、無理だとすぐに悟った。いぶかしげに二人は眉をひそめる。優衣は何かを言おうと口を開いて、ちょっと肩が動いて激痛が走った。

（ったっ！）

思わず肩を押さえると、さきほど腕を捻り上げられた男の方が口を開く。

「いきなり捻ってしまったことは詫びる。すまなかった。この林は日没する時間帯になると封鎖される。王城が近いせいだ。俺がお前を王城に連れて行く。そこで治療しよう」

「へ？　ち、治療ってなにも、ちょっと捻られたただだし……、大丈夫ですよ？」

いやいやいや！　その仕返しとかが怖いから嫌なのよ！

訴えるような目で男を見つめると、男はゆるゆると首を振った。

「無理に捻り上げたから、骨に異常をきたしているかもしれない」

いーやーだー。

本人は本気で心配しているようだが。



「骨にヒビは入っていないようです。ただ打撲に似た鈍い痛みが明日

からくるので、一応包帯を巻いておきましょう」

狭い医務室で優衣と向かい合うのは、白衣を着た丸眼鏡の男。少しほっとしたのが、平凡で人の良さそうな顔立ちをしていたことだ。身長も自分より少し高いくらいで、見上げて首が痛いということはない。

優衣の左腕には包帯が巻かれていた。

姿勢をくるりとかえて後ろを向く。この部屋はカーテンで仕切られていたのだが、そのカーテンに人影が写った。

「ユイ様いらっしゃいますか？」

（わ、わたしっ？）

白いカーテン越しで話しかける女性の声。

「ああ。いるよ。でも先に用件を言ってくれるかな」

「あはい。実は……、屋敷にいなかったユイ様を引き取りたいと、ユエ様とルーク様が起こしになっております」

優衣はひきつった笑みをうかべた。てかなぜ王城にいとわかった。テレパシーか。

（しかも、ルークってだれ……？）

「——駄目だ。ユイさんは僕の患者だ。例え隣のお偉いさんでもできない。手荒い真似でもされて怪我をしたらどうするんだ」

おお。平凡な顔立ちをしてると思ったら結構強いこと言うじゃないか。

カーテン越しにいる女性が「ですが……」と言葉を濁らせながら言った。

「正式な署名もありますので……。それにユエ様は少なからず伯爵家の血を、ルーク様は公爵家当主でございます。王国としての名譽もありますので、例えば名医と呼ばれるあなた様でも、今回は退いてもらいたいと……」

「あ、あの、わたし行きますっ！」

女性の言葉に優衣が飛び上がったのは、白衣の男が舌打ちした瞬間だった。

「こ、公爵ってお偉い人なんですよ？ どっかの衛兵みたいに、いきなり捻りあげたりはしないでしょ」

「うっ！」

すぐカーテン隣にいたらしい男が、思わずうめき声をあげたのも気にせず。

「治療してくれてありがとね。じゃ、じゃあ……！」

カーテンを開けて女性を見た瞬間、どこのメイドさんですが、と場違いな声音が広がった。

？お前、昨日までどこへ行っていたんだ。しかもノコノコとわたしにまで着いて来て……！？

聞き覚えのある声が、叩こうとした両扉の向こう側から聞こえた。荒々しい口調など初めて聞くが、もう一人の男がなだめるように声を出す。

？別にいいでしょう。王宮から抜け出すのも結構楽しいですよ。研究にもはかどりますから。私も久しぶりに、ユイちゃんにお会いしてみようと思ひましてね？

それも聞く限りかなりの美声だ。落ち着いてしつとりとした、男性にしては高い声音。

後ろに侍女がいるのも忘れて、優衣はその会話に聞き耳を立てた。

？！ お前。ユイさんに会ったことがあるのか………ツ！？？

？ええ。ユイちゃんがこの世界に来たときから王宮に入っていましたから？

？こんな奴にまで先をこされたっ！！？

？……………。こんな奴とは失礼な……。ほらほら、肩を落

として落ち込まない？

美声の持ち主が青年に近づく気配がある。

ビシツと人差し指で、彼がけん制する。

？お前がユイさんにちょっと変な真似でもしてみろ！ このわたしが
お前を退治してやるっ！？

？私はいつの間に魔物扱いですか？ 化け物とは呼ばれたことがあ
りますが？

？同じだろ？

（同じだしっ！ でもユエも怖いことサラリと言わないでっ）

荒々しい口調をしていることに違いないが、黒髪ユエの青年に優衣は
盛大なつつこみをする。

しかしもう一方の美声は聞き覚えが無い。……たぶん。

？……そうですね。殺気も何もないこの気配、まさしく……——
——？

カツカツと長靴を鳴らし、美声を持った男は両扉を開けた。

（うわ………っ！）

「間違いありません。お久しぶりです。ユイちゃん——」

眩しいと感じた元凶である、肩の前に下ろした艶やかな銀髪。長い睫毛に彩られた翡翠の瞳に、くもりひとつないきめ細かな白い肌。

簡略化した白い僧服。厚着ではなく薄着だ。動きやすそう。

「ルーク。お前、気付いていたのか……」

ユエが感嘆とも意外ともとれる表情で近寄る。

「ええまあ。貴方も気づいていたのでしょう」

「ああ……。ただユイさんが入ってくると思っ——————思いまして」

黒銀の髪を持つユエと、銀髪の麗人ルーク。

優衣は二人を見上げて、誰にも悟られないよう心の中でため息をついた。

（美形ねえ。まあ慣れてるんだからいいけどさ）

左頬を右手で掻きながら、優衣は再びため息をつく。

「ところでユイちゃん。腕を痛めたようですが大丈夫ですか？」

いきなり中性的な顔が近づいてきたものだから、反射的に一步退く。とその前に白い指が、制服の上から左腕を撫でた。

「な、なんで知ってるんですか」

「ぎこちない動きでだいたいは察しがつきますよ。それに痛みを緩和する薬品の匂いが、貴女の腕からしますから」

「げっ」

思わず優衣は顔を近づけて匂いを嗅ぐ。しかし、まったく薬品の匂いがしない。

「――ユイさん、驚くことはないですよ」と、ユエがこちらに近づきながら朗らかに言った。

「こいつは人間にんげん以上犬いぬ以下の嗅覚を持っています。…まったく。本物の犬だったら少しは可愛がってやれるものを……」

「……ユエ、いくら心の中で悪態をつこうが気にしませんが、無意識で言わないでください。貴方が誰なのかたまにわからなくなります」

（……いま無茶苦茶ルークさんに同意したいかも……）

「なんだ」と朗らかに問い返すユエに対して、ルークは失笑を、優衣は引きつった笑いを浮かべる。

（ってか皮肉を言ってることがわかるルカより、あなたのユエほうが性質ち悪いわよ）

ユエは棘のある言葉を、悪意なしで言える才能があったりするのか。

咎めたくても咎めない。うーん。性質が悪すぎる。

「嫌うのは大いに結構ですが、見てください。ユイちゃんがドン退きしていますよ」

ドーン？

「……お前、「ドン」退きというのはどういう意味だ？退く、というのはわかる——りますか……」

「そのままの意味ですよ。「ドーン」という感じで」

「はあ？」と、ユエが口を開ける。

ああ。もう口調が崩れてる。これはルークにだけこうなるのだからか。

「……話がかかなり脱線しました」と、ルークがコホンと咳払いをした。

「ユイちゃんは、夜のお旅は好きですか？」

「夜？ 旅？ またたび？」

「……………」

思わずルークは、口を閉じた。呆氣にとられたかのような顔をし

ている。

（まさか、これは、関西人にあるまじきスベった？ スベりましたか？）

ルークから視線を外してユエを見ると、なぜかガッツポーズで促された。

（ええええええええ！？ 何をしろと！？ このわたしに何をしろとっつ！??）

「……。とりあえず、夜の旅は平気ですか、と聞いているのです」

「ああそうそれね！ 大丈夫！」

（ナイスフォロー！）

ユエの謎のガッツポーズから逃れられた。

彼はなぜか耳を……失礼、頭を垂れている。

「あれって、拗ねてるの？」

恐る恐る声を忍ばせてルークに聞いてみる。

すると彼は「ああ」と言ったあと、顔を近づけて耳打ちした。

「拗ねてると言えば拗ねてます。彼はコウリ様と同じく子どもっぽい性格をしていますから。本人は気付いていませんね。無意識です」

「なんか可愛いかも……………あ…」

思わずルークさんの目の前で言っちゃったじゃないか！

「…ユイちゃん……………」

ルークが優衣を見下ろす。その表情は、明らかに複雑だ。

「ユエは、19ですよ？」

「若っ！ わたしと四つしか変わらないじゃん！」

「私とは五つですか。もう少し離れているかと思いましたが」

「へっ？」

（ってことは）

「まだ20！？ えええでも確か、何とか当主って！」

ルークはくすりと、笑みを浮かべる。優衣の反応を楽しむかのよう
うに、彼はそのままつづけた。

「ええ。ヴィアム王国公爵家当主とは、この私のことです」

『それにユエ様は少なからず伯爵家の血を、ルーク様は公爵家当主
でございます』

そう言っていた侍女を思い出す。彼女はいつのまにかこの場を退
席しているが。

(なんだかまた眩しい……)

後光が差しているように見える。

「そう驚くことはありませんよ」↑↑ルーク

「……雲の上の人だ……神だ………すごすぎる……」↑↑放心状態の優衣

「……ユイちゃん……？」↑↑驚くルーク

「雲の上の住人だ………、神様だ………」↑↑継続中の優衣

「……大丈夫ですか」↑↑あまり心配ではないルーク

「天から召された神、あるいは仏様だ……わあ」↑↑頭がいかれた優衣

「………ユエ、」↑↑ユエに視線をやるルーク

「やっぱりわたしには程遠い存在なのだ……」↑↑心ここにあらず優衣

「……私には到底無理です。貴方がユイちゃんを現実に戻してください」↑↑苦笑を浮かべるルーク

「わたしが？　だが、そんなこと言われてもだな…」↑↑優衣を見て若干無理そうな顔をしたユエ

「わたしなんか高校すら危ういかもしれないのに……」 ↑―意味の分からないことをほざく優衣

「……しょうがないでしょう。ユイちゃんの思考回路が壊れてしまったのですから」 ↑―マジでそう思うルーク

「……しかしどうすればいい？ 下手に揺さぶって頭が馬鹿になってもなったら大変だぞ」 ↑―油断したユエ

「やっぱりわたしは馬鹿なんだ……」 ↑―傷ついた優衣

「あつ。いや、その、これはだ……ですね。ただの不可抗力と言いますか……」 ↑―必死に訂正しようとするユエ

「ユエ。何とかしなさい」 ↑―命令口調になるルーク

「わ、わたしは無理だ！ お前がやれ！」 ↑―ヤケになるユエ

「変な真似をするなど言ったのはどのどいつですか」 ↑―肩をすくめるルーク

「……………」 ↑―無言になった優衣

「とりあえず、どのような方法でユイさんは元に戻るんだ？」 ↑―真面目に聞くユエ

「刺激ある方法ですかね。口づけとかですか？」 ↑―超真顔で言うルーク

「ああなるほど」 ↑―納得するユエ

5 (後書き)

出たぜ美形三人目！

銀髪ルークの麗人の言葉に、放心状態が二分間ほど続いていた優衣はあわてて手足をバタつかせた。

「無理。無理無理無理無理————っ!!!!」

「……言葉だけで戻ってきましたよ……」

「そうだな……」

若干残念そうな顔をする二人。ルークは肩をすくめると、好機とばかりに話を始める。

「夜の旅。すなわち夜の間にこの王城を出るということです。獣が出る可能性は増えますが、夜の方が厄介な輩に会わなくてすむので」

「よほど馬鹿じゃない限り、夜に行動をする盗賊団なんかいません。周りが真っ暗だと連携なんてとれませんし」

ユエも何故か嬉しそうな顔でルークの説明を付け足す。優衣はとりあえず「はあ」と相槌を打っていた。

「光があるところちが盗賊だとバレバレですからね。まあとりあえずは、夜に移動できるなら夜の方がいいですよ」

「夜ねえ。夜。……でもさあ、夜って危なくない？　よく言うじゃん。寝込みを襲う盗賊団とか、狼とか……」

なぜか、ルークの顔が曇る。隣にいるユエは、前込んで力説を始めた。

「大丈夫です！　もしも盗賊に会ったとしても、わたしがお守りしますし！　それに、ヴィアムの中にさえ入れば、もう怖いものなんてありません！」

（盗賊に会ったこと前提なんだ……）

ルークが右耳を指で押さえる。優衣はそう思いながら、あははと引きつつ笑いを見せた。

「王城から出て、早くヴィアム王国へ帰りましょう！　ユイさん！」

「――……セン……カツ……。熱ふ……。……を最……。……で……。……」

（えっ……？）

「ルークさん、今何か言いました？」

耳を澄ませて聞こえるかどうかの、小さな声。さきほどユエが言っていたのと、ほぼ同時だった。

しかし当の本人は、目を丸くするだけで「言った、とは？」と逆に問い返してくる。

「あれ？　じゃあ空耳かな。全然内容が聞こえなかったし……」

「……。私は何も聞こえませんでした……。」

「同じく」

ユエとルークが言うので、優衣は（空耳だ）と納得する。

「また話が脱線しました。ユイちゃん、とりあえず聞きますが、夜の旅は大丈夫ですか」

「ああはい。だいじょうぶです」

「では。馬車はすでに手配しているので、いきましよう」

「てか、マジで王宮に行くわけですか」

さっそく歩き出したユエとルークを、優衣は声だけで制止させる。

「何か不都合でもあるんですか？」

「いや、不都合って。なんで王宮に行かなくちゃならないのかなあ
って」

ユエが「そんなの簡単ですよ!」と、何故か熱の入った声で言う。

「王宮にいてくれるだけで、色んな人が幸せになるんですから!!」

「……………」

「……………」

優衣はともかく、隣で聞いていたルークまでもが、複雑な表情で沈黙した。ルークが何を思っているのかは知らないが、優衣は思わずユエを見上げる。

（それって、ものすごく複雑そうで単純なんだけど、意味不明………）

理由になってない、と、優衣はついつい思ってしまう。

「まあ別に、いいけど」と、油断して口走った瞬間。

「じゃあさっそく！」

「結構な時間を喰いました」

ユエは優衣を抱え上げ、ルークは微苦笑を浮かべて。

（ええ？ え？ ええええええええええ！？）

二人は部屋から、飛び出した。もちろん優衣は、小さい子どものように片手だけでユエに抱え上げられているわけで。

（ひ、ひいとおさああいいいいいいいいい？）



「いいの？ 本当に彼女を行かせて」

マキは見た目からしてひ弱な少女だ。それでも彼女と対峙したところのある騎士なら、彼女をみただけで竦みあがってしまうだろう。

『蜜のように甘い毒林檎』

誰よりも早い速攻の連続攻撃と、一瞬の観察と洞察能力。

そんな彼女でも、素性のわからない男がいた。それが、目の前で椅子に腰掛ける茶髪^{ルカ}の青年だ。

「言うことなどないな。その事項はあいつが決めたことだ。私に異論は無い」

マキより一段格下の二級騎士である、ルカという青年。彼女は直々にこの屋敷を訪れていた。

「そう。まあいいわ。それがあなたの真意ならね」

「真意？ さあ。どうだろうな」

騎士団長五位であるマキに対してでも、彼は平然と皮肉るのだ。能力としてでは、騎士団長と二級騎士は選ばれたか選ばれなかったかの小さな差だ。

三級騎士が200人いるに当たって、二級騎士はせいぜい50人程度。騎士団長は6人しかない。

だから、マキとしても彼があのように言うのは許しているのだが。

……どこまでが、この男の限界かしら。

一度だけ、面白そうだからといって彼と戦ったことがある。肩書きとしてでも最終的にはマキが勝ったのだが、妙な戦いだった。

最後に彼の銀剣を弾いたとき、マキの息が上がっているのに対して、彼は息どころか汗すらかいていなかった。

第三者から見れば男と女の差、短期戦で挑むマキとの相性の悪さ、であるのだが。

……おかしい……。

彼と戦ったことがある自分だからこそ、わかりうること。

ただ、違和感を感じずにはいられない。それでも、屈辱は感じていなかった。面白い、という感情が、胸を占めつつある。

「それで、久しぶりにお手合わせ願える？」

「却下する」

期待を込めて言うと、この男は即答ときた。

「騎士団長五位の、このユマキスカル様が言っているのよ。格下の者は素直に従いなさい」

「……。仕事しないのか」

「そ、それは……………。だ、大丈夫よ。優秀な部下に、頼んでるから…………」

少しパニックったマキは、軽く咳払いをして気を静める。

「久しぶりに、私と手合わせしなさい。いいわね。これは常務命令よ」

「…………却下」

「あなた。どれだけ平静に私との手合わせを断るのよ」

ルカはちらりと目線を上げ、彼女と視線を合わせる。

「丁重に、断ったはずだが」

「…………。そうね。あなたにとってはそれが「丁重」なのよね。期待した私が馬鹿だったわ」

マキは思わず額を押さえる。だがしかし、ルカは何も言わない。

「今日は出直すわ。また来る。いいわね。そのときは絶対に――――」

マキは少しだけ、息を呑んだ。

彼女が驚くなんて明日は空から槍でも降ってくるかと思うくらいだが、彼女の視線の先にはルカの横顔がある。

どこかを見つめる、綺麗な彼の横顔――――

「~~~~~っ！」

マキの頬が、一瞬で朱色に染まった。

何故か知らない。理由なんてわからない。

ただ、顔が紅くなっているその事実だけ。

……落ち着くのよ、私。

深呼吸をし、マキは気を静める。何事も無かったかのように部屋の外を出ると、ヤケに大きな音を立てて扉を閉めた。

……うるさい扉っ！

それは、動揺している自分を表すようだった。

「……………っ!!」

「? ユイさん風邪ですか?」

ぶるりと、なぜか身が震えた。

屋根つきの馬車の中で、隣にいるユエが優衣の顔を覗き込む。

(なんだろう……………、見も毛もよだつ、っていうか、鳥肌立った…
…)

「夜ですからね。寝ていたほうがよろしいかと」

「猛烈に結構です。お断りします」

ルークの丁寧なすすめに全力で断った。男に囲まれて——しかも美形——寝られるわけがない。そこまで肝が据わっているわけでもないのだ。

しかし期待を裏切って「いいえ」と、また力説を始めたのはユエだった。

「風邪でも引いて身体を壊しては大変なんです! さあ遠慮なく、わたしの膝でも使ってください!」

「だ、誰があんたの膝なんか使うかあああああああ!」

「ユイちゃん、声を静めて」

「あ、すいません」

（……まさかこの二人、共犯くってる……？）

流れるような感じで謝罪してしまった優衣だが、後からそのことに気付く。ルークは相変わらず微笑を湛えているが、何を考えているのか意味不明だ。

（いやでも、ルカの行動が解るかって言われても、返答困るんだけど。あの人も何考えてんのかまるで謎だし）

「——でも本当に眠らないんですか？ 身体に悪いですよ」

「う、うん。まあどうせ今は眠くないんだから、そういうだけだけど。もうちょっとしたら、どうせ眠くなって寝るだろうし」

………といいつつ寝てしまったのは、決して優衣じふんのせいではない。

眠気。そう、眠気が悪いのだ。

「……本当に、小さい……」

「そうですね。確かに15歳にしては、同年代と比べて骨格が違います」

「……いや、それだけじゃない。お前は気付いたか？」

優衣の頬を撫でていたユエが、頭を上げて向かい側に居るルークを見る。同じ仕事をすでに一年以上になるが、未だユエはルークを受け入れきれてない。ユエの口調が荒いのは、4割方そのせいだ。残りの6割はと言うと、昔から口調が荒かったせいである。

「――痩せている以外に、彼女の首筋に刃物で切ったような痕がありますね。ここを刃物で切られるということは、死の淵に立った経験があると」

白い指が、彼女の首筋にある傷跡をなぞる。それを苦々しく感じながらも、ユエは彼に同意した。

さほど目立つものではない。がしかし、彼らには意図も簡単に見つけてしまった。

「幼少期に受けた傷、というのが妥当でしょう」

「やっぱり賊に襲われたときの傷か？」

「彼女の世界に賊がいるとは、考え物ですね。いないでしょう。彼女の世界には」

「なぜ断定できる」

ルークは失笑し「ただの勘ですよ」ときっぱり言う。よくあることだ。

「それより、よく彼女の後見はこのことを許しましたね。どのような手段を使ったのですか」

さらりと話題をすりかえ、ルークは自身の銀髪をいじりながら言う。ユエはそのことを頭の中で考えながら、言葉を紡いだ。

「……ああ。あの人は『本人の意思を尊重したい』と言っていたから、一応王宮に行くことは許可してくれた。条件付で」

「条件？」と、ルークが眉根を寄せた。

「本人の意思を尊重することと、本人に傷をつけないこと、だ」

「そのようなこと、当たり前ではありませんか」

「ああ。そうだ。だが、あの人はそう言ったんだ」

「……。そうでしたか」

ルークは苦笑し、再び彼女に視線を戻した。



(……ん)

「あつ、起きたんですね。朝ですよ。ユイさん」

「ふがっ！」

美麗な顔に上から覗き込まれ、優衣は思わず奇声をあげた。向かい側に座るルークが、クスクスと笑っている。

「可愛い寝顔を見れないのは惜しいですが、休憩地点に着きましたよ」

(ま、ままままマジで————っ！？)

ルークが言うや否や、何故か馬車の扉がひとりでに開いた。

眩しい、と感じた瞬間に、ユエの「そうです。まだ王宮まで二日とかかる距離ですから」という声が右耳から左耳へ通り過ぎていく。

「ユイさん、手を」

ルークに続いてユエが馬車から降り、ユエが優衣に手を差し伸べる。

（うわ、社交辞令……！）

優衣はおずおずとユエの手をとった。意外に大きくて温かいことにびっくりする。

地面に降り立ったことで目の前に広がった光景に、優衣はまず目を疑った。

（つつか、これが休憩場所！？）

ヴェルサイユ宮殿。

はるか彼方にそびえ立つ、壮麗で豪華な建物。

左右対称である噴水庭園。花々や敷き詰められた砂利。

それはまるで、17世紀〜18世紀に造られたヴェルサイユ宮殿のよう。

（うご……。ここって何世紀のヨーロッパ？　ぶっちゃけ19世紀？）

歩き出した二人に挟まれていると、ユエが淡々と説明する。

「ここは先代国王が避暑として造らせた宮殿なんです。下級貴族は入ることが許されず、上級貴族でも特別な日や国王の許可なしには、入ることが許されないんですが——」

ちらりと、ユエがルークに目配せする。ルークは失笑ながらも、丁寧に応えた。

「この宮殿を管理するのが、公爵家の仕事の一环。すなわち公爵家当主なら、許可など必要ありません」

「そのかわりコウリ殿下の許可をもらってるんですよ。ほら、お出迎えがきた」

仲が悪そうなかわりに息ピッタリで二人はそう言い、視線で前に促した。

「えっ？」

宮殿の玄関まであともう少し、というところで。
優衣はすごさに気付く。

右はメイドの列さん、左は執事の列。

どっかの漫画に出てきそうなお出迎えの仕方が、そこにはあった。

「は？」と、大口を開けて固まった優衣に、ルークが耳打ちをする。

「全員が公爵家のエリート達ですよ。掃除、洗濯、裁縫、炊飯。すべて誰がやっても完璧にこなす優秀な人たちです」

「で、でも、この人数、ざっと百人はいるよ……？」

「公爵家はヴィアム王国の貴族第一位ですから」と、事もなげにルークが笑む。

（なんか、居心地悪い……）

何しろ「お帰りなさいませ、ご主人様」的なノリで全員が頭を下げているのだ。

あまり刺激ない暮らしをしていた優衣にとって、これほどの刺激はかえって辛い。

（あれ……、ここが公爵家の管理下だということは……）

「ここって、もう国外なの？」

「大陸中央に君臨する、ヴィアム王国です。そういえばユイさんは、この大陸のことをどれだけ知ってるんですか？」

今度はユエだ。忙しいな。

「ううん。全っ然知らない。なんとなく、ヴィアム王国とバロン王国があるということだけ、知ってるけど」

「じゃあ、それは部屋で教えますね」

なぜか、ユエの顔がキラキラと輝いているような気がする。

その時、ルークの顔が少々曇っていたことに、優衣は気付かない

7 (後書き)

全キャラを出すまで、あと何十話くらいいるだろう……。。

赤いカーテンと縦長に大きな窓が三つ。天蓋つきのキングサイズベット。向こうにあるテーブルからシトラスの香りがふわりと漂った。

隣の部屋は緩やかな曲線を描く階段があり、二階には大きなバスルームと彫刻から噴き出す噴水が一つ。

「げが……………」

とりあえずとソファに腰掛けたユエとルークなど目もくれず、優衣は魚のような目でロイヤルスイートルームを見渡した。

（扉が二つもあるし！ しかも大きいし！ ボディガードが扉の前で立ってるしっ！）

……19世紀ではない。完璧に21世紀だ。

（まさか、国によって化学が違ったり……）

無茶苦茶ありえる話だ。

「——ええつとそうですね、とりあえず大陸の国から」

羽ペンとインクと紙を持ちだしたユエが、テーブルにそれを置く。優衣はユエと向い合せになって座るため、必然的に隣がルークとなった。

「まず、ここがヴィアム王国です。こっちがバロン王国で、こちらが砂漠の国・西ヴィアム。そして、ここがフムユスト皇国（こうこく）です——」

横長の長方形に伸びた大陸を、四分割するそれぞれの国。ほぼ中央に君臨するヴィアム王国。見る限り一番大きい。

山脈で囲まれた東のバロン王国に、国のすべてが砂漠という西ヴィアム。

そして、大陸の最南。沿岸部をほぼ独占するようにできている、フムユスト皇国（こうこく）。

「ヴィアム王国には他国にはない四季があります。あと作物なども豊富で、大陸一の富を誇ってるんです。東端にあるバロン王国は、一番小さな国ですが山脈に囲まれて、敵からの壁となっているんです」

地図を見ながら、優衣はふむふむと適当に相槌を打っていく。

「西ヴィアムは祭しの通り、砂漠なんです。宝石の純度が高いことが知られています。唯一のオアシスに巨大な都を作っていると言われていますね。わたしは行ったことがないんですけど」

隣で座るルークが、眉根を寄せたのが気配でわかった。

「最後に、フムユスト皇国。この国は何から何までが謎で、ただ大陸一の軍事国家ということだけ知られてるんです」

「えっ？ 隣の国なの？」

隣の国。日本でいえば韓国だろう。そんな近くて、もし韓国内部状況がわからなかったら、こっちのほうが大変だ。怖い。

「この国に入った人間は、誰も帰ってこれないとまで噂がありますしね。どうやってこの国に入るのか、というのも、謎なんです。ただ、この国の皇太子が一度だけ、王宮に来たことがあるらしいんですよね。そのときわたしは、まだ若輩者なので、王宮にいませんでしたけど……」

続きを言え、とでもユエに視線で促されたのか、ルークは微苦笑混じりに言った。

「15から王宮に行っていましたからね。確かにいらっしゃいましたよ、皇太子殿下が。」

そのときは、確かコウリ殿下と話をしていたらしゃったようですが、私は存じ上げませんね——」

「——と、いうわけです。四つの国のこと、わかりましたか？」

「え、あうん。だいたいは」

「じゃあ次はですね……………」



「？ ルークさんどこ行くの？」

かれこれ一時間くらい社会の授業を受けていた優衣は、急に立ち上がったルークを見上げる。

「ええ。部屋に戻ります。ユエ、お願いしますね」

「お前に言われるまでもない」

ルークはくすりを笑みを残し、部屋から出て行く。優衣はその背中を見送り、ユエに視線を合わせた。

「――と、こういうわけです。しっかりお勉強できましたね」

偉い偉い、的な感じで頭を撫でるユエ。それはまるで、赤ちゃんが初めの一步をして母親がほめるのような構図だ。15歳の優衣にとって、複雑な心境である。

「なぜに頭を撫でる……」

「ああ何となく。教師をやっていると。小さな子どもは特に」

「きよ、教師っ？」

ええ、と、ユエは小さく頷いた。

「わたしは秘書であるのと同時に、王子の教師役ですからね。じゃないといくら伯爵家の血筋があったとしても、直系の秘書にはなれませんよ」

「優秀なんだ」

「まああいつほどじゃないんですが」

（羨ましい、って——）

絶対国語の成績の悪さではわたしの方が勝つな、と思いかけていた優衣は、疑問符を浮かべる。

「アイツ？ アイツって？」

「ルークですよ。さっきやっと出て行ったヤツ——」

（ちょっと言い方ヒドくない！？）

確かにさきほど出て行ったが、なんか棘があるように感じられる。やっぱり仲が良いのか悪いのか、微妙だ。

「気持ち悪いほど天才ですよ。あいつ」と、ユエが前にのめり出した。

「爵位の貴族から下級貴族。経済界や政財界。四つの各省にまで広く顔を持ち、その天才的な頭脳で俗界にまで名を轟かせています。特に16歳という異常な若さで、公爵家当主の座を勝ち取ったのは、一番の吉報でした」

「そ、そんなすごいんだ……」

「別にあいつを褒めているわけではありませんが、確かに魔術に関する論文は素晴らしいもので……」

「へっ、魔術？　いま魔術って？」

（この世界って、まさかそんなものであるの……！？）

なんてファンタジックな、などと思っていると、ユエが苦笑交じりに言う。

「ですが、いまは魔術どころか、魔力さえ持つことの出来ないと言われています。微量の魔力なら十万人に一人、魔術を使えるほどの魔力なら五百万人に一人です」

「へえ。そうなんだ」

「……まあ近くに、気持ち悪いほどそれを持った変態妄想狂がいるんですけどね……」

「えっ、なんか言った？」

「いえいえいえ。ただの独り言です」

つとめて笑顔を貼り付けるユエに、優衣は疑問符を飛ばし続ける。

「まあともかく、あいつの話なんてほっというて、続きでもしまし
ようよ」

「あ、あの、できれば、もう勉強は疲れたんだけど……」

（わたしが得意なのは数学だけ。国語は最悪。社会は………微妙）

「そうなんですか？」

……秀才なユエにだけは言われたくない……かも。



コツコツコツ、と、細長いコンクリートの空間で、靴の音が反響する。延々に続くような空間。線路がひかれているが、電車が通る気配など無い。足もとから這い上がるような冷気は、この通路を歩く少年にとって大きな苦痛を与えていた。

ツツクシヨン。

ひとクシヤミ。ぶるりと身体を震わせ、美がつくほどの少年は黒いジャケットを羽織りなおす。

「――さ、さつみい！ 寒すぎる寒すぎる！ ああ駄目！ マジで死ぬよ。マジで死ぬう！」

クセのある青い髪に碧眼。走りやすそうな半ズボンは、この場所

と不相性だ。

「くっそう。今度は唐辛子を入れてやる……！　しかも超激辛のやつを入れてやる……っ！」

誰に対してなのかわからない恨み言を言い、ソプラノ声の少年はふと足を止める。白い息を吐きながら、真っ暗なその先の空間に目を凝らした。

（変だなあ。ここはボクの領域なのに、電気が点いてない？）

少年はジャケットの胸ポケットから小さな機械を取り出し、それを見た。超ミニ型のコンピュータプログラムが組み込まれている携帯式の機械。ブラックボディがきらりとひかり、キーボードがないためタッチ型だ。

「ねえねえ兄さん。コレってどゆコト？　ここってヴィアム王国の真下だよな？　ボクの領域だよな？」

『…………いきなりなんだ…。緊急事態じゃあるまい』

兄の冷徹じみた声がモニター越しから聞こえる。ただし、通話だけだ。

「なんかさ、とおってもやな予感がするんだよね。これって野生の勘ってやつ？　まさかボクでも野生の勘が働くとは思わなかったよ」

『おまえはとりあえず頭脳でなんとかしろ。体力ないだろ』

「はいはい。とりあえず、コレなによ。電気が点いてないんだけど」

『……僕にもわからないな。だが、電気が点いていないだけだろう』

「—————っ!!」

『? どうした』

ぶるり、と、少年の全身に戦慄が走った。少年はゆっくりと、コンクリートの先を見やる。

………何かが、この先で動いてる………

「ねえ兄さん。地下鉄^{地下鉄}、まえはいつ使ったの……っ?」

『……五日前だが』

「ふうん。五日もあれば、『赤』がここで力を貯えることもできるね。ボクの野生の勘が当たっちゃった。もう切るよ、兄さん」

『ツ————おいっ!』

少年は兄の声など気にせず、勝手に通話を遮断した。ゆっくりと息を吸い込み、白い息とともに吐き出す。

「……下手すればボクもここで死んじゃうかな。でも、この地上にいるヴィアムの間人もろともか……」

失笑をうかべ、少年はその場で構えた。

「――さあ、今回の獲物。データ街で仕留め損ねた『シックス・レッドラウ第六赤蜘蛛』。画面越しではないあんたの姿、ボクが回収してやるよ」

[illegible]

狂喜のような雄たけびとともに、赤い目を爛々と光らせた獲物が、少年の前に躍り出た。



「う、うやああああああああああああああああああああ」

「どうしたんですかユイさんっ!!」

突然悲鳴を上げた優衣に、ユエは扉を開けて部屋の中に入った。天蓋つき寝台の上で悲鳴を上げていた優衣は、ユエを見てぽかんと口を開ける。

「あれっ……。まさか夢……？」

それを聞いて安堵したのか呆れたのか、ユエは頬を綻ばせた。

「ごめんごめん。なんかムチャクチャ変な夢見ちゃって……」

寝巻き姿の優衣に近づき、ユエはベットに腰をかける。ズトンと、キングサイズの寝台が揺れた。

（そうだもんね。こんな世界に地下鉄なんて登場しないだろうし、でっかい化け物なんか出ないだろうし…）

と思い、試しにユエに聞いてみる。

「地下鉄とか、でっかい化け物とかって出てくることある？」

「は？ 化け物ならともかく、地下鉄、というのはなんですか？ 化け物でしたら、昔はいたらしいです」

「だ、だよねえ。ありえないよねえ」

（しかしリアルな夢……！）と思いかけていた優衣は、ふと気付く。

自分は、寝巻き姿のままだ。

「ぎいやあああああああああああああああああつ！」

再び優衣は、大きな悲鳴を上げた。

「ふくれてますね……。ユエに何かされたのですか」

隣に座るルークが、白い指で膨れた頬をつつく。

再び馬車に揺られている優衣は、頬をふくらっぱなしで向かい側に座るユエを睨みつけていた。

「だ、だって、乙女の朝を邪魔したのよ。酷い」

するとユエは、あわてたように弁解を始めた。

「そ、それはですねっ。ユイさんが悲鳴を上げたので、何かと飛び込んでしまったまでなんですよっ」

「でも事実は事実じゃん」

「ユイちゃんの仰るとおりですね」

「お、お前までっ」

ルークがユエに麗しい憫笑^{びんしょう}を向ける。が、そのことに優衣は気付かずユエに「反省なさい」と、ビシッと指で指し示す。

「ど、どうやってですか……………」

可愛いほど、……失敬、哀れなほど従順な表情をするユエに、優

衣は厳しい一言――

「正座しなさい」

「せ、製剤ですか？」

を、聞き間違われる。

「正座しなさい」

「ザセイですか？」

を、上下反対にされる。

「正座しなさい……」

「せ、星座の観察ですか……っ？」

を、意味間違われる。

「せ・い・ざ・っ・！」

「せ、い、ざ、？」

を、反復される。

「だから正座だって……っ！」

「セイザって何ですか？」

……最終的に疑問で返された。

「……。ごめん忘れてたわ……」

ヨーロッパ人は正座しないということを、すっかり忘れていたのだ。しかし隣にいるルークは、何を思い出したのか楽しそうな笑みを浮かべている。

「正座って言うのはね」

「ふむふむ」

「こうやって座るの」

「ほうほう。で、これで何のご利益があるんですか？」

「そ、それはねっ————！！」

不思議そうに首をかしげるユエに向かって、優衣は断言する。

「———何にも、それこそ価値すら、ないわっ！！」

………

………。

「失礼ですが、それは明らかに無駄な作業なのは？ やっぱり頭が可笑しくなってしまったんですか？」

柔らかい口調でけなされた。優衣は頑張って、弁護する。

「そ、そうかもしれないけど！ 座禪は精神統一になるんだよっ！ お仕置きには一番の薬！」

「……そ、そうなんですか……」

「ユエはそちら系の趣向はありませんからね。止めておいた方がいいですよ、ユイちゃん」

「普通誰でもないっしょルークさん」

「そういう人はいますよ。まあそれより、ユエは三十分でギブですね」

「わたしも三十分で無理だね。………あれ？ てか何でルークさん知っ………っはぶ」

「あああああ！ ルーク、お前 ユイさんに何をするっ！」

ルークが手で優衣の口を塞いだのだ。ユエが慌てるのも無理はない。

必然的に優衣が彼に近づくことになるのだが、優衣にとってはそんなことより酸欠状態。

「失礼。ちよつとした悪戯心です」

離れていくルークの左手を呆然と見送って、優衣は彼に視線を向ける。次の瞬間には、驚きと悲鳴に似た言葉が出ていた。

「今のが悪戯心!??? マジで殺されるかと思ったわよ!」

しかしルークは「すみません」と、顔の前で手を出し、謝罪する。
すぐく悪びれなく言ったのは気のせいだろうか。

そしてルークは、ユエと優衣の顔を交互に見比べた。

「ええっと、ユエのお仕置きの話はどうなりましたか?」

「あああそうだった! ユエっ!」

「え、ええ? ええええ? 話戻すんですか?」

「そ、そうよ! あの事件は、わたしにとってあれなんだからね!」

乙女の事件だ。

「結構根に持つ、いえ、覚えてらっしゃるんですね……」

「ユエ、聞こえてるよ」

「ユエ、聞こえてますよ」

優衣とルークがほぼ同時に言う。するとユエが、しゅぼんと頭を垂れさせた。

(むちゃ可愛い気が———するっ!—!)

撫でようと手を伸ばして、でも理性で止めさせて腕をプルプルさせている優衣の隣で「愛玩作戦」と、ルークが素直につぶやいたことに、優衣は気がつかない。

（大の大人、しかも男の人に可愛いっていうのも、何か変なんだけど……。でもわたしより、マジで可愛い気がするよ!?!）

……偏見だ。

「ユイちゃん。ユエは男ですよ？　しかも年上ですよ？」

「だ、大丈夫よルークさんっ。いま抑えてるから……。っ」

「……………腕が震えてます」

「あと身長が150センチ低かったら完璧なのっ！」

「……………」

ルークが、何とも言えない顔で沈黙した。

それは完璧、ペットだ。人間じゃない。

「王宮生活、大丈夫でしょうか……………」

不安を胸に、ルークがひとり呟いた。
彼の耳元で、何かが音響く。おとひび

9 (後書き)

白い曲線を描く巨大な宮。

そのほとんどが白い大理石で造られた王宮には、執務室・応接室・処務室・礼拝堂・厨房など、様々な部屋が用意されている。賓客用の部屋は特にたくさんあり、王宮の大半を占めていた。

執務室は、王宮とは思えないほど質素だ。

縦に長い長方形の奥には、大きな竜の描かれた執務机。冴え冴えとした大理石の部屋は、執務机のある向こう側が段違いになっている。

なお、執務室にあるのは、執務机と蛍光灯と本棚のみ。

「――ふうん。ソレがコウリの……。あの人もついに頭がイかれちゃった」

肩につく程度のサラリとしたプラチナブロンドの髪。左右対称に整った顔立ち。

ギラギラと輝く紅い瞳が印象的な青年だ。

王子のような、ではなく、簡略化した白い正装に身を包み、傲慢さを感じさせない気品ゆえか、ほのかに薔薇の香りが漂ってくる。

「二人とも、大儀であつたよ。頭上げて」

金髪赤眼の青年が言うと、二人の青年が頭を上げる。

（この人が……）

自分を挟んだユエとルークが頭を上げるのを気配で感じ、優衣は思わず唾を飲み込む。

執務机の横に立つ、オウリという金髪赤眼の青年。

（次期国王継承者で、ユエが教師役を任せられた人……）

「――オウリ様。改めて問いますが、何か感じませんか？」

黒髪の青年・ユエが、いつもとかわらず穏やかな口調で問う。

「うーん」と、オウリは優美に首をひねった。

「僕は、コウリのように卓越たぐえつしているわけじゃないし、彼女を召よんだのも僕じゃないから、全く。

そういうのはコウリに聞いてくれる？ 全然興味ないしね」

「そうですか」

何の話をしているのか、全く意味不明だ。自分を挟む美形二人を見やるが、答えてくれそうな雰囲気ではない。

「オウリ殿下――」

続いて、銀髪の麗人ことルークが口を開いた。しっかりとオウリを見つめる翡翠の双眸に、なぜか鋭い光が走る。

「彼女には説明が必要だと思われます。そして心身ともに休まる時

間も。ご用意願えますでしょうか」

「いいよ。どうせコウリもそう言うだろうと思うし。でもコウリが起きたら、心身疲労して腐って墓に埋めちゃうかもよ」

はあああああ！？ 腐るう！？

「腐ることはさせないのでご安心を」

（てかルークさん何でそこ笑顔！？ 何故に笑顔！？）

なぜか意味ありげに微笑を湛えるルークに、今度は思わずユエを見やる。が――

「そうです！ ユエさんに指一本触れささないよう、縄で縛ってやりますっ」

一瞬遅かった。

（うわああああ珍発言っ！）

そするとコントのような流れで、オウリは唇を歪ませた。

「そうだね。じゃあいまから、僕を縄で椅子に縛り付けるかい？ ユエ」

（またまた珍発言っ！？）

珍発言の連発に、優衣はついていけない。

金髪赤眼の青年が言うと、ユエは怖いくらいにつこりと笑みを浮

かべた。

「いえいえいえ。…（クソ餓鬼は後で縛り付けにしてさしあげます）」

「そう？ …（君バカ？ その前に墓に埋めちゃうよ）」

「滅相もないですよ。…（人を勝手に殺すな、クソ餓鬼。お前の方こそ墓に埋めてやる）」

「ふうん。…（バカかい。僕は国王継承者だよ。殺したら打ち首だ）」

「……。…（ついでに変態妄想狂も抹殺できるからむしろ好都合。何も未練などない）」

「——ルークさーん！ この二人なんか変ですっ！」

とりあえず叫んでみた。しかし横で繰り広げられる口喧嘩は、治まりそうもないのだが。

「大丈夫ですよ。いつものことです」

「ま、マジですか……」

ルークは翡翠の瞳を細めながら、優衣の頭を撫でた。それは、慈しむかのような慈愛深い微笑とともに。

「とりあえず、この二人は放っておいて、部屋に戻りますか？ 私
が手配しますよ」

「……………そ、そのことなんだけどさ……………」

ルークが優衣の顔を覗きこむ。中性的なその顔に、たじろきつつも言った。

「……………お、王宮にいたときの、き、記憶がないって……………。ユエが言ってたんですけど……………」

『ユイさん…………。やっぱり記憶が消えてしまってるようですね……………』

ユエがそう言っていたのを思い出す。自分は、あのコンクリートの場所にいたまえに、王宮にいたと言うのだ。

「……………いましたよ。確かに」

いつのまにか俯いてた顔を上げると、目上でルークが麗しい微笑を浮かべていた。

肩の前に出し軽く一つで結った銀髪が、サラサラと音を立てて流れる。

「ですが、ひどく消耗していました。専門の侍医のもと、二日は寝込んでいましたよ。そのとき私は出かけていて、遠目でしか貴女を見ていませんが。」

戻ってきたときには、貴女がいなくなっていたのです」

「へ？ いなくなってる？」

その時の記憶が全く無いのだが、とりあえず疑問を覚える。寝込んでいて、いったいどうやって姿を消すと言うのだ。幽霊か、自分
は。

「…専門の侍医と衛兵達も気絶させられていました。なので、コウリ様が総出で搜索をなされたのです。バロン王国の彼……——ルカ殿が、本人の意思を尊重した上での、王宮にもどすことを許諾されたのですが、貴女がいったいどこで何をしていたのかは、教えてください」

「そ、そうなんだ……。まあ、ルカってすっごく性格悪そうな顔してるもんね」

「……。そうとは思いませんが……。むしろ私より」

「何で？」

深刻そうな顔をするルークの心情がわからない。しかし彼は「何でもありません」と小さく微笑し、金髪赤眼の青年に背中を向けた。その瞬間、薬品のような甘い香りが一瞬だけ匂う。

「部屋に行きますよ。王子の隣か、私の隣か、ユエの隣か、どの部屋がいいですか？」

「ぶっうううっ！」

優衣は盛大に、吹き出した。

「何ですかその究極の三択っ?!」

まるで、生きるか死ぬか奴隷になるか発言だ。優衣の反応など気にもせず、ルークは「危険回避です」と、事もなさに言った。

「離れると色々と危ないでしょう？ 私事ですが、できればコウリ様以外にしてほしいのですが」

「……わたし、誰の隣も嫌なんですけど？」

自我自讃拍手喝采じがじさん はくしゅ かっさいのうるうるビームでねばってみる。が、ルークは軽やかに笑顔で黙殺した。

（うっえええええ。でもやっぱ自分でやると気持ち悪い……っ）

うるうるビームをやっておいて自分で気持ち悪く感じる。

（——コウリ、って誰だが覚えてないけどその人の隣か、ユエの隣か、ルークさんの隣か……）

「私のおススメは、ユエの隣だと思いますよ。笑えるほど清潔です」

「わ、笑えるって……、ルークさんの隣の部屋って、いったい……」

「ああ気にしないでください」と、ルークが優衣の頭をポンポンと撫でた。

「私の部屋から研究室直通なので、少し薬品臭いにおいがするかも知れませんが。それに私の自室も薬品等が置いてあるのです。王宮の最奥なのでここから遠いですから」

人間以上犬にんげんいじょういぬいか以下の嗅覚とはこれのせい？

「へ、へえ。研究してるんですか。でも確かに邪魔しちゃいけないから、やっぱりユエの隣かな」

一瞬だけ不服そうに眉根を寄せたルークだが、すぐに微笑を刻み、歩き出した。

「こちらです」

執務室を出るための大きな両扉を押し開け、ルークは優衣と共に退出した。

尚、ユエが優衣の姿が無いと気付いたのは、それから約三十分後だったとする。

1 (後書き)

1, 5 閑話：血濡れた騎士（前書き）

暴力・流血シーンがあります。

人によっては、それでもグロい、と感じるかもしれません。
ご注意ください。

1, 5 閑話：血濡れた騎士

『仕事？ 西ヴィアムに行け、だど？』

『ああ。国のため、西ヴィアムを偵察して来るのじゃ』

バロン王国の王城に、宰相直々の呼び出しを受けたと思ったら、やっぱりこれだ。

元々彼は、色々な国を回るのが仕事。

それと同時に偵察と抹殺を繰り返してきた彼にとって、ただ西ヴィアムに行くだけなら、これほど簡単な仕事ものはない。

闇のように濃い茶色の髪が、小さく微動する。

『ルカ。お主は、唯一の銀剣を所持している。国家名誉として、誇りに思っておるのか』

密かに唇を噛む。

太陽は、ルカを照らさない。照らされてはいけない存在なのだから。

だから、彼の周りだけ、闇が渦巻く。

ただ右耳につけた紫のピアスが、彼の存在をあらわしているかのよう。

『西ヴィアムに潜り込め。お主は、バロン王国の騎士じゃ。なればこそ、今だ、お主のことを王城に伏せているのだ』

太陽に照らされない影の存在。それこそ、彼の生きる上での永遠の栄光だ。



「何者だッ！ 名の名乗れっ！」

オアシスにつく手前、関所で足止めを喰らうのはいつも当たり前だ。

相手は五人。砂漠の国らしく、露出度の低めな服装だ。全体的に白で覆われたマントと、槍を持っている。

自分も同じような格好。茶っぽいマントで顔を隠し、露出している部分は無い。

「通行証を見せろ」

小さく、息を吐く。

マントのなかで銀剣の柄を探し当て、右手で握る。

いつも通り、そこには黒い手袋が嵌っていた。

「なんだキサマ。通行証が無いのか？ 無いんだったら、ここを通すわけにはいかんッ」

「さっさと失せろ！」

「――……………通行証なら、ここにあるさ」

左手で、何かを探る仕草をする。通行証を、兵士に投げた。

「う、うむ。これは確かに、バロンの王国のもの。よ、よし、通っているぞ」

ルカは砂に足をすくわれない様に歩きながら、通行証を投げた男に近寄る。と、そこで立ち止まり、兵士を見た。

「ついでに聞くんが、西ヴィアムの反乱は納まっているのか」

「……キサマ、この件については一切の無関与だ。バロンの者に話す理由などない」

やはりか、と、心の中でつぶやき、再び歩き出す。

比較的情報は集めた。だが、やはり内乱のことは一切口を割ろうとしない。しかし見たところ、都では内乱の影響は受けていないようだ。

大きすぎるとでもいうほどの、派手な宮殿を見上げる。この中に、税金を取り立て太鼓腹した男や、宝石と地位に自惚れる女がいるとなると、吐き気すら覚えた。

「宮殿か……。いい思い出の無い建物だ…」

母の残像が頭をよぎり、彼は切り替えようと頭をかぶり振る。
一歩足を動かした瞬間、悲鳴が聞こえた。

「—————きゃああっ！」

恐ろしく五感が鋭い彼にとって、静寂のなか聞こえたそれは悲鳴以外のなにものでもない。

（女か……）

土で作られた建物の角から、女の髪の毛を引っ張った大柄の男が出てくるのが見えた。そのそばで、男の子が泣きながら大柄の男に体当たりをしている。たぶん親子だろう。子供が大人に体当たりしているなど、哀れなほど滑稽な絵だ。

それよりも、彼は女の方を見ていた。その目に、感情という感情がない。女は嫌いだからだ。特定の条件を満たしたものは、見るだけでも吐き気と嫌悪を覚える。その特定の条件というのは、子を持つ母親だ。変だと言われたこともある。

「——お母さんを返してよお！ お母さんっ！ お母さん！ お母さんっ」

「うるせえなこのガキ！ てめえはすっこんでろ！」

大柄の男が子どもの首根っこを軽々と掴み、持ち上げる。男の子はひっしに我が爪を立て抵抗するが、力の差は一目瞭然だ。

「なあ母親さんよ、お金が足りねえんだ。これが欲しいんだろ？」

大柄の男は男の子を投げ捨てると、痛さで顔の歪んだ母親に顔を近づける。そして懷から、革袋を取り出した。

（……………アヘンか……………）

同盟を結ぶ西ヴィアムとヴィアム王国で、全部焼却処分とされたものだ。今はほとんど無いに等しいはずなのに、まだ出回っていたのだろうか。すると察するに、あの母親はアヘン中毒者。

大柄の男は、見せびらかすようにアヘンの入った革袋を揺らしている。こちらに気付いていないのだろう。興奮して鼻息が荒くなっていた。

「ほ、ほ、ほしいですう！　　お願いしますう！　　お願いします………
…っ！」

母親も必死だ。何とかアヘンの入った革袋を手に入れようと、手を伸ばしている。

「じゃあ、奴隷になれ。そしたらコレをやろう」

アヘンをもらえる。ただその事実だけに、母親は狂喜している。奴隷、という意味を、理解していない。

（奴隷解放令も、ここでは無意味か……）

あの母親がどうなろうと、自分には関係なかった。だが、正当な、それもただの借金取りならともかく、裏の売買の本流である麻薬と

なると、見過ごすのもカンに触る。

矛盾する思い。

「お母さん！ お母さん！ お母さんっ！」

「！」

一瞬だった。

子どもの叫びを聞いた瞬間、すでに銀剣は耳障りな音を立て、鞘から抜かれている。

男が驚く暇も無い。母親が叫ぶ暇も無い。そこにあつたのは、血の海。

命が、静かに流れ出た。

「とっと失せろッ！」

薄く、汚く、汚きたなれているだろうその眼で、母親に一喝を入れる。

母親は子どもも忘れて一目散に逃げ出した。

大柄な男はというと、腰を抜かして地面に尻餅をついている。そして右腕が、無くなっていた。

……ぼた……ぼたぼた……

ざしゅっ！

「ひっ！」

銀剣を大柄な男の首筋に当て、冷徹に見下ろす。

「その葉は違反だな。右腕が無くなるくらいでは済まないだろう」
冷たい、冷たすぎる声。そしてひどく、落ち着いていた。

「葉を持ってさっさと行け。死にたくないのなら、もう二度としないことだな」

大柄の男は、恐怖で何も言えない状態だ。
彼は銀剣についた血を振り落とし、鞘に納める。何事も無かったかのように、ここから立ち去ろうとした。

肉を抉る感覚。何も感じないほど人を殺してきたというのに、たかが右腕を斬っただけで、恐怖が襲い掛かる。
らしくない、と、頭を振った。

もう考えない。
雑念は、いらぬ。

「ただ、任務にまっとうするのみ……………か」

いつも通り、皮肉げな笑みを浮かべてみせる。

（私は、私の行きたい道に行く）

その先に、たとえ何があろうとも。

？大人しく、僕の遊び相手になれエえええええええええええええええ！？

？誰がなるかこのクソど変態の妄想狂野郎がツツ！！？

（な、何事————っっ！？）

またしてもロイヤルスイートルームに泊まることになったのだ。それはいい。というかそれより、なんだこの叫び声は。

優衣は飛び起きる。天蓋つきのベットから飛び降り、優衣はとりあえず服装を整えた。

？朝から銃を振り回すな馬鹿っ！ 建物が壊れるっ？

？そんなことはどうでもいいよ。そんなことより僕の遊び相手になっ
てね、ユエちゃん？

？気色の悪いこと言うなっ！？

部屋の外から聞こえる怒声というか何というかの声は、片方はユエだ。間違いない。

両扉に近づいた瞬間、何と独りでにその扉が開いた。

「わっ！———って、あれ？ ルークさん、どうしたんですか」

目の前にいた銀髪の麗人に優衣は目を丸くする。しかも彼は、急

いでいるかのようだ。有無を言わず優衣の腕を引っ張り、部屋から連れ出す。

「とりあえず来てください。コウリ様がついに暴れられたのです」

（つ、ついに？ 暴れられた？）

丁寧な物言いだが、ルークは小さく憫笑びんしょうを浮かべる。

そのあと回廊を早足で歩いていると、角を曲がった瞬間ルークの足が止まった。

「あっ。しまった」と、全然そう思っていない口ぶりでルークが言うや否や。

「——ああああ！ ユイさん、とりあえず逃げてくださいっ！」

銃声と共に、猛ダッシュでこちらに向かってくるユエが見えた。

（はあああああ！？ しかも、なんで銃声……？ いったい誰が銃持ってるの）

逃げている。そう、ユエは逃げているのだ。

走って。

「ルークさん……。ユエの後ろに居る人…」

「ああ。あれですか。コウリ様です」

「こ、コウリ様ってだれ？」

何回か聞いたことのある名前だ。だが、それが思い出せない。

「オウリ殿下と対なる人格のコウリ様です。毎日人格が変わり続けます。昨日はオウリ様だったので、今日はコウリ様です」

オウリって、たしか金髪赤眼の青年か。

「二重人格なんだ……」

テレビでは何回か見たことはある。だが目の前にいても、さほど驚くことはない。せいぜい、興味を持つ程度だろう。

「それだけだったのならいいのですがねえ」

「えっ？」

ルークが笑みのかたち唇をゆがめる。その視線の先には、ものすごい勢いでこちらに来るユエの姿が。

そして――――

「貴女がこの世界に来たきっかけを造ったのが、コウリ様ですよ。ユイちゃん」

何でそんな重要なことをもっと早く言ってくれなかったの!?

ルークは、あっさりとそれを言っただけ。説明も入れてくれないのだが、何だか騙されているような気がしてならない。

「彼は希少稀な魔術を使うことができてましてね。魔術を使える人間、

という条件付で人間の召喚魔術を使ったのですよ。ですが、どうも貴女は魔術が使えるようには……………見えませんね」

「……平凡だからね。当たり前でしょ」

自分で言っってちよつと傷ついた。

「まあ魔術ができるかできないかではなく、貴女に心底惚れ込んでしまったのが問題ですねえ」

「は？」

苦い微笑を浮かべるルークの心情が謎だ。
と、そこらへんで。

「あっ！ ゆ、ユイ—————っっ！」

ゆらゆらと揺れる金髪とともに、王子スマイルの青年がユエの後ろから出てきて抱き付いてきた。

「うげっ」

しかも、拳銃所持で。

「ああ間に合わなかったっ！ ユイさん！ どうぞわたしの頭を殴ってください！」

「へっ？ つか何いきなりマゾ発言……っ」

ユエが近づいて同時に頭を下げる。黒銀の髪がサラリと音を立て

た。

「彼は謝っているのですよ。コウリ様から貴女ユイちゃんを守れなかったのですからね」

説明するのはルークだ。しかし、なんかさつきより距離が遠く感じる。

「――ちよつと君たち消えてくれないかな。僕がユイと一日を過ごすんだよ？」

金髪王子が顔を上げた。その瞬間、オーシャンビューのような深い海の双眸が目に映る。そう。彼は金髪赤眼のオウリではない。れつきとしたもう一人の彼なのだ。

優衣は小さく息を呑んだ。

「黙れ変態っ！ さっさとユイさんから離れろッ」

ユエが叱咤するが、逆に金髪王子は優衣に密着してくる。うう、圧迫される。

ついでにいうと、コウリが着ている王子服が邪魔だ。正装ではないだろうが、何となく、高そう、ということだけわかる。

「……コウリ様。ユイちゃんが圧迫死します」

冷静にルークが指摘する。うん、距離遠くない？

「僕はユイと一緒にいるよ。一日中ね」

「はいはい。政務はどうでもいいってことですか。わかりました。

ならば、痛い目にあってもらうしかありませんね」

「「「え？」」」

優衣、ユエ、コウリが、同時に銀髪の麗人を見やる。

ルークは、艶やかな微笑を浮かべていた。

いや、かなり嗜虐的サディスティックに。

「とりあえず、ユイちゃんは狙いません。まあユエはそのついで。一番攻撃が当たるのはコウリ様だけなので、安心して眠ってください」

薄ら寒い笑顔で、どこから取り出したのか黒い物体をコウリの首筋に押し付ける。

ユエはその場で固まって、優衣は当たり前に動けず、ルークは優衣からコウリを引き剥がした。

「アレだけは止めてええええええええええ！　ぎいやあああああああああああああ」

いったいどこから出てきたのか、覆面をした女官たちが、ギリギリセーフで気絶した金髪王子を受け止めた。……覆面？

「お、おい。わ、わたしは関係ないんだなっ？」

あわてたように、ユエがルークに問いかける。額には、大量の汗があった。

「ええもちろん。今回の実験はコウリ様のみです。良かったですね」

つとめて、というか作り笑いを浮かべるルークに、ユエは今まで溜めてきた疑問をぶつける。

「…………。お前、なぜそう物事を実行できるんだ…………？ スタンガンとやらを平気で」

（スタンガン！？ それスタンガンだったの！？ やっぱり近世じゃなくて現代ヨーロッパ！？）

コウリが女官たちによってどこかへ運ばれていくのを横目で見やり、ルークは何故か誇らしげに説明する。

「結構きますでしょう。一発で気絶させられます」

「いや、そういう意味ではなくてだな。…………まあいい。お前の研究は訳が解らん」

「失礼ですねえ。あの銃を開発したのは私ですよ？」

あのヨーロッパ式の銃を王子に持たせたのあなた！？

「火縄銃もお前か？」

「…………。それ、何百年前の話ですか…」

…………歴史を聞いているような心地がするのは気のせいだろうか。

「いやお前なら、時間も飛び越えられるかと」

「…………できるものならやってみたいですが、さすがに時まで操作で

きませんよ。残念なことに」

……そろそろ、ワタシカイワニわたし会話にハイッテモヨロシイ入ってもよろデシしいでしようかヨウカ。

そんな優衣の気配を感じ取ったのか、ルークがこちらに向き直った。

「ユイちゃん、これからどうしますか？」

「へ？ 別に、そんな予定なんかないけど」

「まあ王宮に来たとしても、コウリ様とじゃれるかその辺の庭で散歩するか、どちらかですからね」

「じゃ、じゃれる……？」

……それって、愛玩的に……？

3 (前書き)

かなり暗いです。母親に対しての否定的な文章が出てきます。ご注意ください。

「ユイー！ ルークに虐められたあああああ」

「失礼な。ちょっと遊んだだけでしょうが」

「いやあああああああ。僕お婿に行けないiiiiiiii」

いきなり金髪青眼の王子・コウリが、こんな時間まで部屋のなかに入ってきた。身体の大きな彼に抱きつかれ、優衣はソファで危うく昇天するところだ。

「ど、どうしたの？ こ、コウリさん……？」

「コウリさんじゃ無い。僕はコウリ」

子どものように頬を膨らませるコウリに、優衣はしぶしぶ「コウリ」と名前を呼んでみる。するとコウリは、何かを発見した子どものように目を輝かせた。

「そうそう。って、それよりユイ聞いてよ、ルークが、ルークがあああああ」

「止めてください。私が悪役みたいな雰囲気ではありませんか」

……いったい何してたの……。この数時間の間で。

ルークは優衣の隣に座り、ほうと息を吐いた。

「って、いま何時だと思ってんの！？ 八時よ八時！」

日本語に変換すると、だ。

「このままベットに行ってもいいよ」

うわぁ顔が出たっ！

いきなりむっくりと顔が出てきたので、思わずびっくりした。

「い、いきなりなに！？」

「いきなりじゃないよ。ユイは僕の妹になるんだから☆」

「そっちの方がぶっちゃけ驚き！」

「だからお兄ちゃんって呼んでね」

王子スマイルで可愛くウインク、って——

「なんでわたしがあなたの妹——っ！？」

王子の妹になったら、イロイロ比べられた困る。容姿とか、容姿とか、容姿とか。まあ色々ひっくるめて、困る。

社交辞令？ めんどくさ。

ドレス？ 重い。

やっぱりこんな時でもフォローに入ってくれるのは、ルークだ。

「妹にするなら私も賛成ですが、貴方の行為はどうみても兄妹の理
論から外れていますよ」

ルークが隣で眉根を寄せた。コウリは気にせず、子どものように
目を輝かせる。

「妹になるか、妻になるか選んで？」

（は、話がぶっ飛び過ぎて意味わかんないんだけどっ!?!）

頭の中で大混乱が起きている優衣の返答を期待していないのか、
コウリはルークに視線を送る。

「ねえルークは出てって。僕今日はここで寝るね」

ね、寝るう!?!?

察しの通り、ルークは睨むように王子コウリを見た。

「……そのような言葉を聞いて、出て行けるほど余裕はありません
ね」

「別に変な意味は無いんだよ。膝枕ひざまくら膝枕ひざまくら」

コウリはそう言うと、ごろんと寝転がった。もちろん、膝の上で。

そして一分も経たないうちに、すやすやと寝息を立て始める。

「ああ。たぶん寝ましたね」

呆氣にとられたような表情をしてから失笑し、ルークはコウリの顔を覗き見る。

「うう。完璧膝枕状態」

「……でも、嫌がらないでくださいね」

「えっ？」

横を見ると、ルークが寂しそうな微笑みを浮かべていた。翡翠の瞳は、吸い込まれそうな魅力があつて。しばし、見惚れてしまう。

ルークは自分の頬を撫でながら、玲瓏^{れいろう}な声で言った。

「コウリ様は、これでも極度の対人恐怖症なのです。私とユエとお父上以外、コウリ様は喋るどころか見ることもできません」

（そうか……だから、王宮の中に近衛兵もいないし、女官も覆面してたんだ……）

王宮の門番くらいだっただろうか……。確か、王宮の周りにはぶあつい壁に隔てられ、人を寄せ付けないイメージがある。女官も全て覆面をしていて、その理由が、いまやっとわかった。

すべて、コウリのためだったのだ。

「ルークさんやユエならわかるけど、わたし初対面なんですけど？」

それになんで召喚魔術をしたんですか？」

確か、王宮で寝込んでいた、ということだけだし、コウリと直接話したことは今まで一回も無かったはずだ。

「召喚魔術を使ったのは、単なる気まぐれなんです。

——ユイちゃん。貴女は、召喚当時の記憶が全くありませんよね」

「へ？ う、うん。そうですけど…」

「……ちよっと失礼しますね」

そう言うところ、いきなり首筋を指でなぞった。体全体がびくんと跳ね上がる。

片方の手は体重を支えるため、彼は優衣を下から見上げるかたちとなる。

「ここ」と、ルークは切実な微笑とともに、ナイフで切られたような痕を指し示す。

「あの時、とても不思議だったのですよ。貴女は、体中泥まみれで、身体にたくさんの古傷があった」

「……………あ……………っ……………」

自然と、自分の息が乱れていく。浅く、速い、呼吸のリズム。

頭の中で、何かがフラッシュバックした。

「…聞かないで」

母。

「ユイちゃん？」

狂気。

「…お願いだから、聞かないで…っ」

血。

「ですが……」

『私の可愛い娘！ さあ、私と一緒に死にましょう！』

嫌い。

『綺麗。なんて綺麗な赤。綺麗よ、優衣……』

嫌い。嫌い嫌い嫌い……っ！

「お願いだから聞かないでっ。わたしを殺さないでっ！」

「……………っ！」

もぞりと、膝の上でコウリが動いた気配がある。ルークは体を寄せ、条件反射的に俯いた優衣の頭を撫でた。

こんなこと、言うつもりじゃなかった。

「ごめんなさい。ただ、思い出すのが怖いから、こんなこと言うてるの」

ルークは、そうでしたか、と、心の中で痛々しげに呟いた。

彼女が今まで一度も、元の世界に帰りたい、と言わなかった理由^{わけ}。帰れないと察したからではない、帰りたくないのだ。

だが、いつか時空は元に戻る。

「…………その傷は、もしや親族……」

「ええ。……母」

優衣の頭の中では、いろいろな記憶がフラッシュバックしていた。

召喚されるまえ、自分は学校から帰ってきた時だった。

家に帰り、いつもその時、母親の機嫌をうかがう。

機嫌が良かったら何も起らない。自分の頭を撫でるだけ。機嫌が悪かったら、とりあえず包丁を投げてくるだろう。

ただ怖かった。

母の狂気に、触れるのが。

「なら、貴女も人間不信になるのでは……」

「ううん。そうじゃない。母の行為が嫌いなだけ。……お願い。もう聞かないで……………」

耳を塞ぎたい、という欲望のまま、自分は殻に閉じこもる。

「わかりました……」

ルークは静かに立ち上がって、部屋を出て行った。

人間不信……か——

そうか、わかった。

やっぱり自分は、母だけが憎いのだ。

愛して欲しくて、甘えさせて欲しくて。

——先に逝った母が、憎くて、怖くて。

だから自分は、母のいない世界に、何も感情を持てなかった。

愛しみも、憎しみも、何もかも。

(……………っ)

筋肉痛が、すごい。膝の上でコウリ(?)が寝ているからだ。

「……でも、気持ち良さそうに寝てる……」

仰向けは寝にくいのか、彼は横向きで寝ている。こんな近くで、人と一緒に寝たことなんてあっただろうか。

「やわらかい……」

自分のクセ髪とは違う、滑らかな金髪。太陽のように煌くそれは、見惚れてしまうほど美しい。

気がつけば、窓の外は明るかった

「……良い」

(え……………?)

彼は、横向けでボソリとつぶやいた。昨日より、何だか声が低い気がする。

「良い匂いだ……………。母上の、匂いがする」

「……………」

彼は、ゆつくりと目を開いた。一瞬だけ、紅い光が見える。

（オウリ……………。また人格が変わったんだ…………）

毎日人格が変わり続ける王子。それは、身体に宿る魔力のせいだという。

「……コウリが君を気に入った理由も、やっとこれでわかった……。亡くなった母上に、君はそっくりだ」

ひどく、穏やかで柔らかな口調。一昨日聞いた冷たい声とは、ぜんぜん違う。

「何で……」

気がつけば、自分は疑問の言葉を口にしていた。オウリは、ここからじゃ見えないような、小さな微笑を浮かべて言う。

「コウリは母上が大好きなのさ。そして君の匂いが、母上と同じだ……」

優衣は小さく息を呑んだ。

（わたしは……、母が嫌いなのに……）

「……コウリのためを思って、妹になってやりなよ。僕の片割れには信用できる人間が少なすぎるんだよ」

「……………」

「一緒にいるだけでいい。共に暮らすだけでいい」

穏やかな口調。強制なんて欠片もない。

コウリは、寂しい人だと、思った。

かわいそうな人だと思った。

自分と、似ていると思った。

「……………うん」

頷くと、オウリは満足したように微笑して、ゆっくりと身を起こした。約束を立ててくれて、ありがとう、とでも言うかのように。



食堂、というよりレストランに近い会場には、ユエと優衣とオウリは席についていた。

丸いテーブルに優衣が座り、その横にユエが座り、自分と向かい側にコウリが座っている。

空いている席はまだ来ていないルークだ。

「今まで気付かなかったけど、コレ全部ユエが作ってたの？」

「……ええ、まあ。ほとんど無理やりですが。ルークが作ると謎の物体に成りかねますので」

「…そ、そうなの？」

（——しかし、ユエにこんな才能があったとは………!）

サラダ、オードブル、魚料理、肉料理と、料理がズラリと並んでいる。昨日まではお手軽なサンドイッチを食べていたが、今日はなぜか豪華な品揃えだ。

（……でも、テーブルマナーって知らない……）

なんかスプをズズツと音を立てたり、ナイフとフォークを左右逆に持ったり、ガチャガチャと物を落としたり、そんなことをしそうだ。優衣はじいっと料理を見つめる。

「——別に緊張しなくてもいいんじゃない？」と、オウリがいつものように冷めた目で言った。

「君が音を立てながらスプを飲もうが、ナイフとフォークを反対にして持とうが、ガチャガチャに物を落とそうが関係ないし」

「えっ？」

読心術!?

驚いている優衣など気にもかけず、オウリが先にスープを飲み始めた。二、三口スプーンで飲んだ後、彼は顔をしかめる。

「今日はちょっと濃いかな。でも鶏^{とり}の下味がちょっと薄い。野菜はいい味出てるけど、今日はどうしたの？」

ユエはすぐさまスプーンですくってスープを飲むと、苦笑いを浮かべた。

「……やっぱりいつもの香辛料ではないと、オウリ様の舌を満足させられないようですね。見たら無くなってたんで、他のものを使っただんですが…」

……ユエって、こういうときに荒々しい口調で、こういうときに丁寧な口調？

「やっぱりね」と、オウリは言う。

「いつもと違うし。でもまあいいや、ルークよりは幾分優しい味だ」

「~~~~っ！ ちょっと思い出させないでくださいっ！ 吐き気がっ」

(…そんなに美味しくないの？ ルークさんの料理って)

ユエが口もとを抑えているのを見て、優衣は疑問符を浮かべる。

「ええそりやあもう！」と、まるで心を読んだかのようにテーブルを叩いて、ユエが熱弁を始めた。

「ユイさんは知らないと思いますけど、あいつはこれでもかと言うような超甘党なんですよ!」

……甘党と不味い料理ってどう関係があるんだ?

「何でもかんでも砂糖を入れて、自分好みの味にするんです! 普通の紅茶でも、あいつはロイヤルミルクティーに砂糖を五杯! ピリ辛が美味しい野菜スープに、お砂糖を入れたんですよ!」

……マジっすか。

「そうそう。間違ってそれを食べちゃってさ、びっくりしたよ。びっくりしすぎて失神した」

(そこまで?)

優衣は思わず、ひきつった笑いを浮かべる。ルークの甘党ぶりには、全国のケーキバイキングが悲鳴を上げることだろう。

「————じゃあもう一度食べますか?」

いきなり美声が、部屋に舞い込んだ。カツカツという長靴の音と共に、薬品のような甘い香りが漂ってくる。

「噂をすれば何とやら。それにさ、朝風呂もいいけど、もうちっと時間考えてくれない?」

オウリに指摘を飛ばされ、ルークは失笑のまま席に着く。

「シャワーしないとヤバイですよ。いろいろと」

「そりゃ嫌だね。却下」

オウリは手で振り払い、ルークを眺めた。なぜか、探るような目つきで。

それを知ってかしらるか、ルークは全員を見渡した。

「ああそうだ。面白い話がありますよ。食事中ですが」

オウリは興味深そうに頭をもたげ、ユエは訝しげに顎を組んだ両手に乗せた。

優衣は、未だ必死に音を立てぬようスープと格闘している。

「異界の格好をした十代の娘が、その異様な術によって次々に人を殺している。しかも殺された人間は、全身炎に包まれて灰になった、と――」

優衣はスープを飲む手を休め「それってわたしのこと？」と思わず反応した。

速やかに反応をくれるのは、もちろんユエ。

「ユイさんが人殺しなんてするわけがありません！それに、そんな回りくどいやり方よりも、銃で一発！」

「うんユエ、後者の方撤回して。つか今すぐに訂正しなさい！」

きよとん、と、ユエがこちらを見た。そしてそのあと、「ああ」と、手のひらを打つ。

「そうですよね。ユイさんが人殺しなんて、もうユイさんが人を崖

から突き落とすくらい、変な妄想ですよね」

「勝手に人を犯罪者に仕立て上げないで」

平々凡々な性格をした自分が、そうそう簡単に人を殺せると思う？
育ちは別だが。

「いえ。人殺しか崖っていうと、人殺しの方が勇気が必要です」

「そんな勇気はいらんし、しかも二つとも人殺^{ひつしつ}してるし！ 食事中に死亡ネタなんて話すなっ！」

「あっ、すいません。つい…」

（『つい』ってなに？ ついって）

ユエはボケキャラで、優衣が突っ込み役。

これなら漫才界に革命を起こせるかもしれない。

「――ゴホン」と、オウリが大きな声で咳払いをした。

「今から独り言言うよー。いいかい――？」

目を閉じて、彼は大きな声で独り言を言う。

「ユエー？ 君さあ、天然全開で力説なんてしないでくれるー？
あと数秒で止めなかったら君の脳天をぶち抜くよ」

ユエはオウリを睨んだ。

これは……、すごく嫌な予感。

「…………ああもう我慢ならない。クソ餓鬼っ。わたしはユイさんとお話をしているんだ!」

ユエは最初から所持していたのか、ホルダーから銃を取り出した。あきらかに独占欲をさらけ出している。

が、優衣はとりあえず、めんどくさいことになってきた、と思うのみ。

(発砲だけはしないでよ…)

流れ弾がきたら大変だ。

4 (後書き)

ユエ君のせいで、よく話が脱線するのは仕様。

「…あああ、また始まった…」

ルークが無然とつぶやくが早いか遅いか、ユエは銃の引き金に手を当てる。

その目は、嫉妬のような深い感情が渦巻いていた。

「もう我慢なりません。一回死んでください。そしたら、丁寧に墓に埋めてあげます」

「嫌だね。それにコウリの方は未練垂れ垂れだと思うけど」

「そんなの知りません。ユイさんに必要なのはわたしだけで充分です。誰が変態に渡すか」

……訳が分からん単語が混じってる…。

「ユエ、とりあえず銃しまって」

優衣が言うと、ユエは困ったような表情を浮かべた。彼は悩んだ末、渋々といった感じで銃をしまう。

まるで犬みたいだ。

「……………。ユイさんが言うなら、しょうがないですね…………」

ユエが椅子に座ったと同時に、ルークが、はあと息を吐いた。

「ユエ……、感情的になりすぎです。冷静さを失っては、補佐官として失格ですよ」

ユエはちろりと彼を睨んだが、ルークは全く気にしない。ルークは静かに目を閉じ、落ち着いた口調で話を戻す。

「——とりあえず、その噂がユイちゃんとは全く関係がないとも思えません。また無害とも言いきれないのですが、それのおかげで、バロン王国の王城護衛騎士団の方々が、ユイちゃんの身柄を引き渡せと、要求してきました」

(！)

バロン王国、王城護衛騎士団おうじょうごえいきしだん。王族や貴族の護衛、または街そのものの警備を務める団体。

ルカとマキも、その騎士団に所属しているのだ。

ユエが机を大きく叩いた。

「どうしてそういう事になっているんだ！ それに、ユイさんを渡せるわけないだろう！！」

(……噂………)

確かにそうだ。身に覚えが無さ過ぎる。育ち以外は一般家庭と変わらない平凡な自分だ。もしそんな力があれば、火熾ひおこし程度に使いたい。

優衣が内心でそんなことを思っていると、ルークが冷たくユエを見据えた。

翡翠の瞳は、哀れむかのような魅惑を宿している。

「そうですよ。ですが、あちらもあちらで国家というものがありますからね。バロン王国でそういう噂がたった以上、黙って見過ごせないでしょう？」

「だがッ！ こっちには国王継承者である、コウリ殿下がいるんだ！ 易々とユイさんを取り返せると、バロンも思わないはず！」

「落ち着けユエ」

オウリが言うと、ユエは奥歯を噛んで、蹴るように椅子に座った。

（ほんとユエって血の気が荒いね……）

それが自分のせいだということとは、優衣は気付かない。

「……コウリが後見人だと知った上で、バロン王国は彼女の身柄を要求しているのかい？」

静かにオウリが言えば、ルークは再び口を開ける。

「ええ。なのであちらも、国王陛下直々に身柄を引き渡せと。

脅しているわけではありませんが、もし要求を呑まなかった場合、何かありそうですね」

「……今日がコウリじゃなくて良かったよ。もしコウリだったら、すぐにでも出兵命令を出すだろうね」

(せ、戦争……?)

コウリがどれだけ短気なのかは知らないが、とりあえず今日の人格がオウリであって良かった。

それがまた自分のせいだということも、優衣は知らない。

「……身柄か……。無理だね。国王陛下には、丁重にお断りを入れてくれ」

ガタンッと音を立て、ルークが立ち上がった。

「なら、私がバロン王国に出向きましょう」

翡翠ルークの瞳と、真紅オウリの瞳が、一瞬だけ絡まりあった。

優衣は驚いてルークを見つめる。だが、財政とか社交界とかを知らない自分にとって、何かを助言ができるわけでもない。

「君が、？」

ルークは顎に手を添えながら、麗しい笑みを浮かべた。

「公爵家当主が出向けば、それなりの対処と返答があるでしょう。私それに、国王と面会できるほど実力を持った使者は、ここにはいませんからね」

オウリは考える素振りを見せる。

彼の開いた口は、いいだろう、と言葉を発していた。

「ありがとうございます」

胸に手を当て軽く頭を下げたルークに、オウリは「ただし」と厳しい言葉を浴びせた。

「十日だ。寄り道せずに帰って来い――」

（？　なんか、苛立ってる……？）

なんとも言えない負の感情を漂わせ、オウリは唇をきつく引き結んでいた。その理由が、いまいわからない。わからないでいるうちに、ルークが言葉を発した。

「承知しました。我がただ一人の王子のためあらば」

ルークは小さく唇で微笑し、胸に手を当ててもう一度頭を下げた。すぐ踵を翻し、朝食もとらず部屋から出ていく銀髪の麗人。

優衣はフォークで、ぷつりとミニトマトを刺した。



自室でユエと一緒にソファに座っていたときだ。

ユエが何かのボトルを空け、グラスに注いでそれを飲む。

「何て無礼なやつでしょう！ ユイさんは何もしていないのに、たかが噂だけで身柄を引き渡せとは……！」

（ユエったら飲んでるし……。しかもなんでこの部屋で飲むかなお酒）

優衣は思いながら、まああと、ユエをなだめる。

「わたしは召喚されたんだから、しょうがないでしょ。それに、それってただの噂でしょ？」

「ただ、じゃないんですよ！ ユイさんだって気になるでしょう？ なんて自分の噂が悪質なものとして広まっているのか、って」

「そ、そりゃ気になるけど……」

ユエはまたグラスに赤い液体を注ぎ込み、ぐぐつとそれを一気に飲んだ。

「噂は噂をよび、より陰湿なものへと変化します！ これでは、噂を広げた黒幕の思う壺でしょう！」

「え？ 黒幕？ この噂を広めた人が、いるって言うの？」

平凡な家庭に育った覚えはない優衣だが、この世界に来たのはつい一ヶ月ほど前だ。そんな短期間で優衣と出会ったのは、二本の手でも余るほど。

しかしそれが逆にユエを怒らせてしまったのか、憤怒の表情で詰

め寄ってきた。

「こんな噂、故意でなければ広がるわけないでしょう！　言っておきますがユイさん、あなたは無警戒すぎますよ！」

「はあ？」

たぶんユエは、お酒に酔っているのだろう。本人が酒に強いかどうかは知らないが。

「たとえば、わたしがこう近づいて」

優衣はユエと向き直るような体勢になってしまう。なにごとかと、ユエを見上げると、予想以上に彼の顔とが近かった。

「ほら、襲い掛かる隙だらけ。こんな隙だらけな顔、他の男に見せられませんっ！」

「へ？　あ、あのさユエ？　わたしたち、噂の話をしてたんだよね？」

「ほらすぐ話を逸らそうとする。ユイさんっ、少しはわたしのことを見て下さいっ！」

まったくもって意味がわからない。ユエはむしろるように優衣の肩を掴んだ。これでもか、と思うほど整った顔が近づく。

（お酒……！）

お酒の匂いが濃く香った瞬間、ユエの手が自分の後頭部を抑えつ

けた。

続いて、唇を押し付けられる。

「……………っ！」

ぬるりとしたものが、唇を割って侵入してきた。抵抗しようとしたじろくと、きつく後頭部を抑えて抱きしめられ、より一層逃げ場が無くなる。

彼の舌は、口内を侵しながら奥へと進んでいく。

……熱い……………！

彼の水色の双眸の奥に、狂気が見え隠れする。

野生のような、深い色だ。

「っうん！」

無遠慮に、彼の手が足ををなぞる。

このままじゃいけない、とわかっているのに。

身体中に甘い痺れが走って、動けない。

どれもこれも、初めての感覚と感触。

つづいてやっと唇が離れたと思ったら、頬に口づけの雨を降らせる。

音と立てず、彼の唇が這い、首の中心部分に吸い付いた。

ぬるりとした舌で、そこを突^つく。

「可愛い……………」

ぼそりと聞こえたそれは、官能的なほど甘い響きを持った声だった。

叫ぼうと舌を動かすが、声にならない。

「初めてでしょう？　こういうの」

艶めいた甘い声が、ただひたすら自分だけに注がれる。

「あなたにわたしの全てを捧げますから、あなたをわたしにください」

深い。それこそ、蹂躪、という言葉にふさわしい、激しい口づけ。角度を変えながら、ユエは愛撫した。歯列をなぞり、口内を舐め、舌を絡ませる。

何も、考えられなかった。

だが、突き放すこともできなかった。

だから、気絶したのだろうか……………。

猛々しいほど狂った感情が、あまりにも突然に來たものだから。

狂気など、自分が傷つくのは嫌だった。

それがいくら、自分の我ままだったとしても。

真つ向からこつちに向かつてくる化け物・『第六赤蜘蛛』は、確かに目の前まで迫ってきた。

青髪に碧眼の少年は、思わず辺りを見渡した。

どれだけ能力が進化しているのやら、と、失笑交じりにソプラノ声の少年は言う。

「……これはちよつとまずいね。百メートルしか進んでないけど、ここからさらに北にいつてる。このままじゃ、ヴィアム王国の管理局に衝突しちゃうね」

そこにあるのは「死」のみ。あの化け物は殺せない。眠らせるしか、方法は無いのだ。

ビットキャップ
『永久の眠り』—————仮死状態。

「……………今から約三十八分後。地上と繋がる管理局と、ごたいめん」

少年はにやりと、口角を上げた。

楽しい。楽しくって仕方ない。シックス・レッドドラウ『第六赤蜘蛛』が、この先どこへ向かっているのか。

「さあて、ボクも人助けに入ろうかな。そしたら、兄さんに仕返しもできるし」

ペロリと乾いた唇を舐め、その場で座り作業に取り掛かる。光のキーボードそこに出現した。

「ジーターヘキG12壁からF12壁のブロックを閉鎖つと。連絡橋封鎖。1分後にミニ爆雷投下。本部に緊急応援を要請。これで、『ヴィアム王国のみなさーん。怪物が来ますので速やかに避難してくださいさーい』って言えたら完璧なのに」

ガチャガチャ、といろいろな場所のロックが解除され、少しでもシックス・レッドドラウ『第六赤蜘蛛』を足止めできるか試してみる。

だがはるか百メートル先では、巨大な怪物が地響きを鳴らしながらぶ厚いコンクリートの壁を突き破っていることだろう。

「……………ミニ爆雷は効果なし、か」

さつき前方で爆発音がした。が、高エネルギー反応を表す赤い丸印は、まだ進行が続いている。

少年は少々考えた末に、管理局に通信を入れた。

「……………管理員。こちらワウルアです。『シックス・レッドドラウ第六赤蜘蛛』、北北西に進行中。そちらと接触するのが約三十七分後。ただちに局員を避難させて。……………え？　そしたら地上の人間に気付かれる？　そんなの、人の命と比べたらなんてことないでしょ。できるだけ気付かれないように頑張ってね」

ブツ、と、強制的に回路を遮断する。あとは……………。

—————ERROR—————

「なぜエラーが！？　直通回路なのにつ！」

彼に限って、エラーという失敗をすることは、プライド自尊心が許さない。技術者としても成績優秀な彼だ。となると、このエラー表示は……………。

「？　ハッキング形跡……………？　そんな馬鹿な。本部の中央コンピューターに限って、そんな訳ない。ボクだってまだ成功させたことないのに……………っ！」

画面に表示される文字を読み取り、少年は驚愕する。ありえなかった。あのコンピューターは、特殊暗号が十万桁もあるのに……………。

「——高い知能と潜在能力。そして街からの脱走。向かっているのはヴィアム王国……………？　ヴィアム王国に、何があるっていうんだ…

…？ 三ヶ国は王政政治の田舎なのに……………」

ヴィアム王国に何かある。それを確信し、少年は立ち上がった。

「…………エフェム兄さん。ボク、ヴィアム王国に行くよ。あいつにも、会えるしね……………」



「…………イさん…………！ 起きてください…………！」

「…………っ……………」

もぞりと布団の中で少女が動いた。ユエはそれを感じながらも、心を鬼にして彼女の肩を揺さぶる。彼女が目を開いてこちらを見るまで、少しの時間を要した。

「…………へっ…………？」

頭がとろんとしている。一瞬目の前にいた人物が誰なのかさえ、わからなかったほどだ。優衣は落ちそうな瞼をこすり、ユエを見上げる。きよとんとした表情が、妙に可愛らしかった。

「…どうしたの……………」

「どうやら、ソファで寝てしまったようです。すごく頭が痛くて、……あの、昨日、お酒でも飲みました？」

優衣は一瞬、何のことかと首をかしげた。昨日のことを思い出し、「ああ」と言ってから。

「き、昨日さ、めっちゃヤバイほど酔ってたよ！」

改めて弁解した。純情少女にとって、昨日のあれは刺激が強すぎる。

「わたしはお酒に弱いんです。でもカッとなったりすると、ついっ
いお酒に手を伸ばしてしまっ

て。まいったな……、この頭の痛みは最悪です……。

仕事がありますが、コウリ殿下に休みますとでも言ったら許してくれませんか」

二日酔いで社会人は仕事を休めるのか？

15歳の優衣にとってわからない素朴な疑問だ。

「まあ無理でしょうね。ルークが出立したから余計でしょうが、わたしの仕事まで増えるんだから全く……」

いつもユエは優衣と一緒にいると思ったら、そうではないのだ。秘書の仕事は毎日忙しいらしく、同じ年の人なのにオウリの教師をしている。何でも、オウリには哲学と美術を教え込んでいるらしい。そういえばユエは、料理のほかにヴァイオリンを弾けるらしい。

とりあえず、自称「秘書」なのだが、優衣的に「執事」の方が似合っていると思う。

（何となく、「坊ちゃん」って言ってそうな印象が……）

優衣は唇を引き結び、何となく彼を眺めた。

ユエはしばらく何かを考えたふりをすると「あああ！」と、悲鳴を上げた。

（いきなりなに！？）

「ルークがいないから、あいつの仕事全部やらないといけない！今日はゆっくりしたかったのにっ！」

ユエは布団が吹き飛ぶほどの勢いで立ち上がり、思い切り扉の角に当たりながら外へ出ていった。

「……………え……………」

あまりにも、素っ頓狂な状態に。

優衣は、顔をしかめる。

回廊を歩いていると、なぜかいきなりユエがやってきて腕を引っ張られた。どうしてか、と聞く暇さえ無く、いま早足で移動している状態にある。

そろそろ手が痛いな、などと感じ始めたころ、ユエが険しい顔つきのまま話を始めた。

「いきなりなんですか、バロン王国に帰ってほしいんです」

……………は？

優衣はぼかんと口を開けた。だって、そのことについて、昨日あれほど口論をしていたんだよ、この人は。^{ユエ}その人本人から、バロン王国に帰ってほしい？

怒りを通り越して呆然としてしまうのがオチだ。

ユエは何を勘違いしたのか「ルークはそのうち帰ってくるので…
…！」などと言ったのち。

「実は、国王陛下がおこしになるんですよっ！」

(陛下……………?)

金髪。碧眼。傲慢。馬鹿殿。
イコール、コウリの父親。

そんな方程式が、優衣の脳内に出現した。

「――もしユイさんがここにいれば、色々と厄介になるんです。ほら、ユイさんって異世界の人ですから、国王に変な興味を持たれるくらいなら、と、コウリ様がとりあえずバロンの王城護衛騎士団に、ユイさんを預けるそうなんです。それにルカ殿も、王城護衛騎士団の方ですから、コウリ殿下も安心したようで……」

……とある夫妻の夫が浮気していて、バレないように隠し子を他国に移す？

そんなわけないよねっ。

馬鹿な翻訳をしていることユエは知る由もなく、そのまま続ける。

「国王陛下が出て行かれたら、本格的にバロン王国と交渉を再開します。わたしも一緒に行きたいくらいなんです、何しろオウリ様がいるもんで……」

ユエは、残念そうな、苦い微笑を浮かべた。美しいその微笑など、俯いた優衣は知るはずもなく。

（ようするに、バロン王国に帰ってこと――――っ!?!）

たった一週間たらずで、バロン王国へ帰国。
展開が早すぎてついていけない優衣は、ものすごい脱力感に襲われた。

「ザ・イースト・エクシジョン
《魔術式》ツ！」

『ツータンブ
発動詠唱』、のち展開。

紫色の光を放ちながら、地面に描かれる規則的な方陣。
中央に太陽。一回り小さい月。そして、人間を囲うのは幾何学模様。

世界の理ことわりでさえも、歪めてしまうとされてきた術わざこそ、魔術イーストだ。
それを操るのが魔術師ガウスであり、今では数えるほどしかない。

そして、国王継承者であり唯一の魔術師ガウスであるコウリは、ひたすらに魔力を駆使していた。

何度も試しては失敗の繰り返し。そのたびに精神はずたずたに引き裂かれる。それでも、たった一回の《魔術式》を成功させるため、一年間に渡る独自の修行に耐えてきた。ルークにもユエにも力を借りず、ただ己の意志だけををもってして。

（今度こそ、成功させてみせるよ……。ユイ……。――）

大理石の部屋で、地面で描かれる《魔術式》を見やり、コウリは深呼吸をする。千年に一人という確率で魔力を持ったコウリでは、造作もないはずだった。莫大な魔力のため眠オウリった人格が魔力を抑制する。だから魔力を魔術として使うときは、暴走しないよう細心の注意が必要だった。

その抑制のコントロールが、上手く行えない。

「いくよ。オウリ」

片割れに話しかけ、コウリは再び、術を動かす。

ベタベタに甘やかしてやりたいほどの可愛い、ただひとりの妹^{ユイ}のためだけに。



移動だけで何日もかかってしまうのは当たり前だ。優衣はとりあえず、馬車の乗り継ぎで痛む腰をさすりながら、馬車から降りる。そして、白亜の城を仰いだ。

「なんか、久しぶりだなーこのお城……」

街の中心に建つ白亜の城。ノイシュヴァンシュタイン城のようなそれは、豪奢というより清らかで楚々しい印象を受ける。

優衣はすでに、大陸の東にある山脈で囲まれた国・バロン王国に来ていた。馬車などが出入りする門を入ったところだ。王城に入るためには、目の前にある正門を潜^くらなければならない。

優衣の付添人である騎士の方が、なぜかいきなり背筋をのばして敬礼した気配があった。

「あれ、入らないの？」などと考えていた優衣に「あああああ!」

という悲鳴がかかる。驚いてそちらを見ると、少年のような少女がその場で固まっていた。

蜂蜜色の髪。同色の瞳と桃色の唇は開かれ、驚きを隠せないのが痛烈に伝わってくる。白シャツに白い大外套を羽織った少年のような少女……。

右手に持たれた彼女の金剣が、突然近くなった。

「あなた、帰ってきていたの!? いつ!? なぜ!? どうして教えてくれなかったの!?!」

騎士団長五位という肩書を持つ、愛称でマキという少女だ。この世界において唯一の、女の子の知人である。

なるほど。だから付き添い人の騎士が敬礼したのか。

「え? いきなりなに!?!」

マキの驚き様といえば尋常ではない。もちろん付き添いの騎士だって、マキと自分を交互に見比べて困惑している。当たり前前の反応だ。

「だって、私があなたを迎えに行く算段だったのよ。これじゃあ私の完璧な計画が、じゃなくてっ!」

「へ? 計画?」

マキは赤面しながら、コホンッと軽い咳払いをした。風邪でもひいたのだろうか、などと、優衣は見当はずれな答えを導き出す。

優衣はとりあえず、訊ねたいことを訊ねた。

「何であなたがここにいるの？　ここって正門だね？　それに訓練とかは？」

きつとどこかに、訓練場があるはずだ。騎士団の人は、大抵訓練場にいなそうな気がする。しかしマキは、腰に手を当てむすつとした表情で答えた。

「私があんな、むさ苦しい輩がいる場所で、訓練できると思う？　ここに来たのは、………もうっ、何度も言わせないでよ！」

マキは付添人である騎士に目配せした。騎士が敬礼して去っていくのが足音でわかる。

「へ？　どこ行くの？」

「決まってるわ。部屋に行くのよ。牢屋じゃないから安心してちょうだい」

マキが優衣の腕を掴んだ。冷たくて予想以上に手が小さいことに、優衣はびっくりとする。

大きな音を立てて開いた正門を通り、優衣は歩きながら彼女に質問する。

「牢屋って？」

「あなた、自分の立場理解してる？　あなたはあの噂の張本人だよ。まあどうせ嘘だと思うけど、国としては押さえておくべしだし……。だから、軟禁部屋に行くの」

「な、軟禁！？ わたし軟禁されるの！？」

なんとなく、刑務所に入れられる感覚かな、とは思っていた。だが実際に目の当たりにすると、怖かったりする。「監禁とか、牢屋に入れられるより、幾分かマシよ」と、マキが言った。

（そりゃそうだけども……）

たぶん、マキがいるおかげであろう。

普通なら、もっと酷い目に合わされているに違いない。

「後見は……ほら、ル、ルル、ル……」

そしてまた、若干顔が赤くなった。無茶苦茶噛んでいます。

「？ ルカのこと？」

見事正解を言い当てると、マキは深呼吸をしてから「そうよ」と答えた。

「本当の後見人は、ル、ルカだけど、この王城にいる間は、私が守ることができるの」

「ふ、ふむ？」

またルカの名前で噛んだ……。そんな言いにくい名前かな。

そのままどこかへ連れて行かれ、止まったのは大きな両扉の前だった。

「ここ。軟禁って言っても、酷いものじゃないわ。あまり自由に歩けないけれど」

両扉を押し開けると、やっぱりここでも眩しい。またここもスイートルームだ。

ソファに天蓋つきのベット。紅い絨毯に大きな窓。……鉄格子つきだが。

「もう少ししたら、あいつが来るわ。あなた、頑張りなさいよ」

「へ？ 誰が？ 何を？」

マキはさすがに忙しいのか、外套を翻しながら部屋から立ち去っていた。優衣は、外側から鍵の掛けられるタイプの軟禁部屋で、呆然と立ち尽くすしかない。

しばらく呆然としていると、いきなり外側からノックが掛けられた。しかし優衣の返答を待たず、両扉が開かれる。入ってきた男の第一印象が誰かに似ているような気がした。

猫科肉食獣の顔立ちに、鋭く光る金色の瞳。

サラリとした赤褐色交じりの茶髪は短く、シャツの第三ボタンまで解放されたダラけた格好。

強く雄の匂いを感じさせる（見た目）ホストな男は、唇を官能的に歪めた。

（…誰っすか…）

挑戦的に笑みを刻んだ男に、優衣はソファの上で思わず身構える。

「あんたがユイ・ヒサキ？」

身長の高さを理由にして、赤褐色の男は優衣を見下ろす。

「ほんとにちっちゃい。噂どおりだ」

「小さくて悪かったですね……」

優衣は呟き、男を睨みつけた。

すると赤褐色の男は「ふうん」と鼻を鳴らす。品定めをされている感じでいやな感じだ。

「まあいいか。俺はバロン王国第一王子・バイアム・ダ・ジェスワだ。バイアムと呼んでくれてもいいよ」

バイアムという男は、にやりと口の端を上げる。

これで第一王子！？ 第一王子って、次の国王になるもんじゃないの！？

いかにも淫靡そうな顔立ちだ。こう、飄々としている。

「たぶんあんたは、俺が第一王子に見えないって、思ってるだろ？」

優衣は遠慮なく首肯した。

バイアムは「まいったな」と、額を大きな手で覆う。

「言っとけど、この国の国王は生まれたもん順で決まらないぜ。第一王子から第五王子までが国王候補につき、国王が60の生誕祭に

選挙が行われる。候補者が各課題を成功させた点数と、最終選挙において、やっと国王様が選ばれるってわけだ」

「へ、へえ……そうなんだ……」

「独裁政治じゃなくて議会もいるから、国王ってめんどくさそうなんだよねえ」

適当にぶつぶつと言い、「まあ」と言って話を戻した。

「俺は、とかもかくとして、あんたの見張り役。まあどうせ、どこにも行けないだろうぜ」

優衣の方の目をつむって、バイアムは踵を返す。

あの人はいったい、何をしに来たのだろうか。少々疑問が残る。

ちちち……、と小鳥のさえずりが、やけに遠く感じた。

7 (後書き)

ユエ…「ここからしばらくユイさんと会えないのは寂しいです」

コウリ…「しょうがないよユエ。無慈悲で鬼畜で勉強しない馬鹿作者が、僕たちを出してくれないんだ。ここは隣の国の王子という名目で、暖かく見守ってあげよう」

ユエ…「変態のくせにたまには良い事言うんだな。しょうがない。ユイさんと久しぶりに出会ったのち、ベタベタに甘やかしてやりましょう」

コウリ…「ええ？ 君が？ 大丈夫。ユイには僕がいるから」

ユエ…「誰が変態に渡すか。……そういえば、ルークアイツはいつ帰ってくるんだ？ また行方不明か？」

コウリ…「………さあ。オウリ片割れに聞いても、知らないっていったし。どうせそのうち手土産を持って帰ってくるでしょ？」

ユエ…「……今度はどんな、おぞましい物を持って帰ってくるのだろうか………」

———そんなわけで、無慈悲で鬼畜で勉強しない馬鹿作者———
——(ってオイ！ 誰だこんな肩書きを考えたのは！)———
の考えにより、遠い未来で会いましょう、ユエ君・コウリ君。——
え？ 一人足りないって？ ふふふふ。

さあ、優衣はバロン王国に舞い戻って、マキとの感動(?)の再開です。 優衣はバロン王国で、何を思い、はてやどのような行動をするのでしょうか。第二章は、まだまだ つ・づ・く。

今日は朝から外が騒がしい。昨日は色々と監察官に質問を受けたが、今日はなぜか侍女たちが走り回っているのだ。

（走りにくくないのかな……）

ちょうどその時、開かずの両扉が派手な音を立てて開いた。そこにいるのは、白い大外套を羽織る少年のような格好の少女……。

「——マキちゃんどうしたの？ そんなに慌てて」

「どうしたもこうしたもないわよ！」

明らかに怒っている。

しかし、マキに何かをした覚えなどないのだが……。

「議会が馬鹿な決議を出したせいで、王城こうち護衛騎士団は大変なのよ！
西ヴィアムの反乱を抑えるための援軍になってくれ、だって！
何が王城護衛騎士団よ！ これじゃあただの軍隊と一緒にゃない！」

西ヴィアムは、その名の通りヴィアム王国の西にある砂漠の国だ。
ヴィアム王国の東にあるバロン王国にとって、もつとも遠い国でもある。

「——……愚痴ぐらいなら聞いてあげてもいいけど……」

しかしマキの激昂は、尋常ではない。いつも彼女は冷静沈着な印象^{イメ}があるのに、何か意外な一面を見た気がする。そういえばマキは、軟禁されている身の上の優衣と自由に会って良いのだろうか。てか訓練とかは……？

「…騎士団長六位が、五千の軍隊を引き連れて出立したわ。それのせいで、二級騎士と三級騎士の、合わせて四分の一は持っていけた……！」

「……………それって、戦争じゃないよね…？」

戦争なんて響き、好きではない。自分の声は意外に静かだった。冷静、というより、恐々というほうがしっくりくる。

「戦争なんて、するわけないわ。自国を破滅に追い込むだけよ。ただ、西ヴィアムの反乱を抑えに行ったの」

マキは言うだけ言うと、外の見張り番の人に扉を開けてもらい、たったと去って行った。

やっぱり、愚痴を言いたかっただけなのだろうか。

やっぱり外は慌しい。西ヴィアムとやらのコトはあまり関係無さそうだ。

？――ねえ聞いた？ 第三王子のジェル様が、お倒れになられたんですって？

？知ってる知ってる。もう王城は大忙し？

(……出たっ！ ガールズトーク！)

鉄格子の窓の外から聞こえてくる、侍女たちの話し声。下の階でテラスを掃除をしている侍女たちが話しているのだろう。彼女たちはひそひそ声のつもりなのだろうが、風に乗ってここまで良く響く。

？だって今回の国王候補って四人ですからねえ。第三王子ジェル様といえば、一番人気の美少年。お美しいわよねえ？

(……え？ 四人……？)

確かバイアムという第一王子が言っていた。第一王子から第五王子までが国王候補だと。

となれば、五人いなければならぬのだ。

聞き間違いなのかどうなのか迷っていると、矢継ぎ早に侍女たちの話は続く。

？第一王子バイアム様、また今日も修行に行かれたんですって？？

？そうそう。弟思いだわよねえ。行方不明になったミカエリス様を救うためと、幼き頃からの約束を守ってらっしゃるのよねえ？

？兄弟愛だよねえ？

?うん。いいわよねえ?

(…………あの顔で…………?)

いかにも淫靡そうで色魔そうで馬鹿そうな第一王子が、弟との約束を今も守っていることに、意外な一面を見た心地だ。

行方不明になった第二王子……、ちよつと気になる話だ。

?ん? 何かしら、あれ?

?何かしらね。あれ?

侍女たちがテラス越しから何かを見ている。しかし優衣は鉄格子があるため、窓から乗り出して見ることは出来ない。

?人……かしら。黒いマントを羽織ってるわね?

?王城に? あれ不審者じゃないわよね。騎士団に通報しないでいかしら?

?騎士団は王城のいたるところにいるのよ。そのうち気付くわよ?

?そ、そうよね?

侍女たちが部屋の中に入ったのが、気配でわかった。

(不審者見逃しちゃっていいの?)



「きゃあ！」

それは一つの、悲鳴から始まった。王城の中に突如現れた、黒マントの不審者。男か女かも判別できない黒マントは、何かを探すように王城の廊下を駆け巡った。

「だ、誰かきてええええ！」

王城の中で待機していた騎士数名が、黒マントを食い止めようと立ち塞がる。しかし黒マントは嘲笑うかのように、高く跳躍して騎士数名の頭上を舞った。用はない、とばかりに黒マントは着地して走り出す。

小さく、歓喜の声を漏らした。

「わが君主、お喜びください。目標を見つけました……………ッ！」

門番がいたが、武器を使わず手だけで気絶させてやった。

（えっ……………悲鳴……………）

微かに、女の人の悲鳴が聞こえた気がした。開かずの両扉の外で、ドスっという鈍い音が響く。

続いて派手な音を立てて、両扉が壊された。黒マントが、蹴って扉を破壊したのだ。

「だ、……れ……」

黒マントが、にやりと笑ったような気がした。

硬直して、動けない。

逃げろ、という衝動が突き上げるのに、この軟禁部屋では逃げられないと脳内で悟ってしまう。

瞬間、刺激臭が鼻を衝いた。

叫ぼうとしても黒マントは優衣の口を完全に布で塞いでいて、身体から力を奪っていく。

もはや抗う気力も、根こそぎ奪われた。

頭がクラクラして何も考えられない。目を開いているのか閉じているのか、それすらもわからない。　　そんななか一番始めに感じたのは、唇の感触だった。

いくら頭がぼんやりしてようが、馬鹿な頭をもっていようが、好きなアニメ絶賛放送中していようが、おぼちゃんたちの井戸端会議で道がふさがれ通れないと心の中で泣いているおじちゃんだろうが、これがどんなに現実的ではないことか理解できるであろう。

こんがらがって手足をばたつかせることもできない優衣のおとがいを、触り心地の良い布越しに、誰が力強く掴む。口を開けさせられ、舌とともにゼリー状の液体を流しこまれた。

（――――ッ！！）

後頭部は誰かの手で押さえつけられ、逃げることはできない。ほどなく、舌で押されるままの液体をのどで嚥下した。

（……飲んじやった――――っ！！）

得体のしれない液体を飲ませられ、頭の中がこんがらがってしようがない。しかも、しかもだ。この世界に来て二回目。二回目のキスされたのだ。一人目はユエで二人目は誰だかわからない謎の人。頭がぼけていなかったら、みぞおちに向かって蹴りを入れてやるどころだ。

やっと誰かの唇が離れ、優衣はぼやけた視界のなか相手を睨みつけた。一言文句言わないと気がすまない精神で構えたのに、視界が正常に戻り始めたころにそれが玉砕される。

深みのある声が、優衣の耳を打った。

「意識が戻ったみたいだな。まったく。馬鹿面^{ばかづら}引っさげて、貴様は本当に世話の焼ける娘だ——」

柳眉。

瞳。

唇。

そのどれこれ絶妙な位置づけにあり、嫌味なほど造形された顔立ち。黒い騎士服は彼の魅力を昇華させ、筋骨隆々^{きんこつりゅうりゅう}とまではいかないものの、彼の勇ましさを際立たせている。

……そういえば、暗褐色の髪といい、独特の服装と黒い手袋といい、蒼色の目といい、この性格悪そうで意地悪そうな顔といい、よく考えてみれば——

「……——つか何でルカあ——————っ!??」

見ため黒騎士というべき毒舌家・ルカは、条件反射的に耳をふさいだ。右耳に付けた紫のピアスが、小さく揺れる。

「耳元でわめくな」

「わめきたいわよ逆に! ギャーギャーギャー」

ルカが優衣の額を指ではじいた。デコピンってやつに、優衣は唇を引き結ぶ。そこでようやくここがどこなのか、理解することができる。紅い絨毯やクローゼットが見えた瞬間「ここは屋敷だ」と思

うよりはやく、優衣は再び絶叫を上げそうになる。

「な、なんでベットに上がってんのよあんだ！」

「……。貴様なあ。もう少し違う部分に気がつかないのか？ それよりさきに聞きたいことがあるだろ？ 警戒心が高いのか無警戒なのかわからん奴だな」

ルカは皮肉るように言うと、素直にベットから降りた。と、言っても、彼がベットに乗せていたのは片足だけで、半分の足は地面で体を支えているが。

ルカはあるベットからある程度距離を置くと、背中を向けたまま告げた。

「さっきの薬は、貴様が痺れ薬を飲まされていたので、その解毒薬だ。あの男が使用した刺激臭のせいで頭痛はすると思うが、その辺は我慢しろ」

とりあえずあの男が貴様を誘拐しようとして、私が助けてやった、という部分だけ記憶しておけばいい、と、ルカはそのまま続けた。

（……………軟禁……………が）

「———そういえば、わたし王城に戻らなくていいの！？ これでも軟禁されてる身の上なんだけど」

てっきり、戻してくれるのであれば王城だと思った。ルカが軟禁されていることを知っているかどうかは知らないが。

しかし案の定、どこかの博士みたいなもったいぶりかたで、ルカがゆっくりと言葉をつむぐ。

「ああそのことか。それならまず心配要らない。貴様の管理権が王城護衛騎士団から私へと移譲した。根回しをしてくれたのは宰相だが……、一つ借りができたな」

いまいち理解できそうではないが、とにかく王城に戻る必要は無くなったみたいだ。しかし、あの男が誰だったのかがいまいち引かかる。それにあの男はどこへ行ったのだろうか。ルカは男を逃がしたのだろうか。そんな疑問を持っても、目の前にいる彼は言葉をはさませない。

「だが、貴様は未だ、噂される魔術師ではないかと疑っている輩も少なくない。しばらくは屋敷に居てもらうぞ」

自分の立場は、これでも理解しているつもりだ。バロン王国でそういう噂がたった以上、国として何らかの策を練らなければならぬ。今はとりあえず、大人しくしろということだ。ヴィアム王国に帰る方法は、ユエたちが何とかしてくれるはず。

そこまで思い、優衣ははっとした。

「ああそうだ。わたし、ユエが迎えに来たら、ヴィアム王国に帰るからね」

バロン王国との交渉が成立すれば、ユエは迎えに行くと言っていた。それを思い出してルカに伝えたのに、彼は長い間黙り込んでいた。それほど長くはないはずなのに、いったいどんな表情をしているのか、不安になる。

「―――残念ながら、それは無理な話だ」

振り返ったルカは、冷たい表情をしていた。

皮肉げでありながら、自嘲げに笑みを刻む唇。それでいてなお、蒼い瞳は水晶のような光を放っている。

優衣は、「また」とうんざりした。なぜ彼とよく反発するのだろうか。それが気がかりでならない。いつも自分は負けてしまうのだ。しかし今度は、引き下がるという行為もできない。

沈黙で先を促すと、ルカは冷めた目で抑揚も無く言った。

「ヴィアム王国国王とコウリ殿の大喧嘩。婚約の話が持ち上がり、コウリ殿はその内容に激怒した。」

国王は『コウリをたぶらかした娘を処刑する』と、バロン王国に脅してまできた。未だ必死に貴様のことを隠しているらしいが、それもすぐ無理になる。もし貴様の手配書でも作られれば、ヴィアムへの入国は永遠に無理な話さ」

やっぱり彼の言葉は、巧みで、正論だった。

コウリは次期国王継承者でありながらも、まだ正妃を娶っていないのだ。それどころか、側室もない。それは対人恐怖症であるコウリのためを思って、国王が考えたものだった。しかしコウリは、すでに19歳。対人恐怖症などと甘えたことを言える年頃ではない。

優衣は深呼吸した。コウリが怒る理由はわからないが、自分がこ^ン王^国に居続ける理由もない。だから優衣は、彼に歯向かう。

「オウリと、約束したんだ。わたし」

ルカはすうと目を細めた。窓から差し込む光が逆光となり、彼の表情を隠していく。

「ずっと、コウリの傍にいる、って……。ただ傍にいるだけでも

いいからって、言ったから、オウリと、わたし約束したんだよ……！」

『一緒にいるだけでいい。共に暮らすだけでいい』

オウリは、そう言っていた。

コウリの妻でもなく、恋人でもなく。

ただ一人の家族として、傍にいてはくれないかと。

「だから、何が何でもヴィアム王国に帰るよ！ わたしだって、人の役に立ちたいもの！ だからわたしは、わたしは……っ！」

母から、真逆の愛情を受けてきた自分は、人の役に立ってほしいそう
で、たつてない。

別に要らない子、と言われたこともない。だが、そばに居てほしい
だなんて、誰も言ってはくれなかった。

ルカが眩し闇が濃くてそうに自分を見つめていることなど、優衣は知らない。
だって逆光のせいで、見えないから。

「貴様は……、ただ約束を守るためだけに、命の危険があるヴィアム王国に戻ると言うのか———？」

「そうだよ！」

子供のころ、とある女の子と遊びに行く約束をして、守れなかったことがあった。女の子はひどく傷つき、ずっと泣いていた。さびし
そうに、泣いていた。それから、あの女の子とは会っていない。

突き放すでもなく、憐れむでもなく、ただ純粹に、ルカは疑問を
投げかけた。

「それは、ただの我がままではないのか？ コウリ殿が、危険を冒してまでも戻ってきて欲しいと、貴様は思うのか？」

「わかんない。それはわかんないけど……、でもだからって……！」

「それより時期を待ってから、安心して帰ってきて欲しいと、コウリ殿は思うのか？」

「でも………っ！」

ただ、約束を守るために、行きたいだけなのに。
彼はそれを、阻もうとする。

自分の非力さに、吐き気を覚えた。

（わたしの力じゃ………ルカを説得させられない………）

どんなに足掻いても、彼は自分をヴィアム王国へ行かせてくれな
いだろう。

ルカはゆつくりと、瞳^めを伏せた。

優衣は今だ、行動を起こせず屋敷にいる。いつも通りご飯を食べて、散歩して、お風呂入って、ベットで寝て。満たされたようで、満たされない生活。

自分は優柔不断だ。

ただ自分を貫いてヴィアムに行くか、ルカの言うとおりにここに留まるか、迷っている。

（わたしは……何て馬鹿なんだろう……）

決定的な、何かが足りない。

……ガキイイイインツ……ツ……

「……………なんだろう」

鉄が擦れる様な音が、絶え間なく響いている。たぶん中庭からだろう。何かに操られるようにして、ふらふらと歩きだす。壁を手で伝いながら歩くそれは、盲目の少女のようだ。

外を出て、広い中庭に来たときだ。芝生が緑の絨毯に見える、その先で――――

（……………！）

黒と白。

金と銀。

黒い軍装に黒い手袋。銀色に輝く剣を操るのは——ルカ。

白い軍装。金色に輝く剣を操るのは——マキ。

まるで舞を踊っているかのように、二つの対照的な色は、交錯する。

マキは速攻型だ。金剣は、あの細い腕で支えているとは思えないほど素早い動きを要している。

しかし、その全てをルカは受けきっていた。

斜め。横。上。下。

少しでも相手の不意をつこうと、目で追えないほどの素早さでマキが金剣を振るうが、一向にルカに当たる気配は無い。もともと速攻で相手を叩きのめす彼女にとって、長期戦を狙うルカは相性的に不利だった。身長之差も歴然としている。

(……………鈍い……………遅くなってる……………?)

わずかにズレが生じているのだ。たぶん、疲れているのだろう。特別こういうものに見慣れたわけでもない優衣だが、何となくそう感じた。

「……………! しまっ——」

マキのリズムが、ついに崩れた。ルカが銀剣で一ミリの場所に叩き込み、柄が彼女の手から離れた。金剣が、空中でくると弧を描き地面に落ちる。

(すごい………)

剣など見たことも無いが、それがどれだけすごいことぐらいはわかる。

ルカは無造作に彼女の金剣を拾い上げると、マキにそれを手渡した。

「ほらよ」

「……ッ。負けたわ……見事にね……」

屈辱は感じていないのだろうか。負けを認めた顔をしている。金剣を鞘に納めたころ、ほぼ同時にルカも銀剣を鞘に納めた。

「ほんとに。騎士団長の名でも返上しようかしら」

カツカツカツと、気丈に振る舞う少女。

ルカは相変わらず無関心だ。ていうか、無表情。

(なぜに?)

そういえばマキとルカは、いつから知り合いなのだろうか。微妙な知人関係、というのか何というのか…。

「……時間だ。さっさと行けよ」

優衣は驚いてマキを見やる。

「…バレてたのかしら？」

「……………どうせ訓練場が男ばかりだから抜け出して来たんだろう」

……抜け出してきたんだ。マキちゃん。そういえば、むさ苦しい輩、的な発言をしていたような気がする。

「悪かったわね。暇だから来てやったのよ」

ありがたく思いなさい、オホホホ……、まではいかない。優衣の脳内で勝手に補正された文章だ。

ルカの冷めた目線に、マキは怯まない。

「まあ帰るわ。久しぶりだから負けたけど、またお手合わせ願える？」

「却下」

美少女の申し出を断った！？ しかも無表情で！？

「ま、また却下？ さっきはしてくれたじゃない」

「暇だから」

（うわゝ性質たちわるゝ）

ついつい思ってしまう。彼の性格の悪さは、見ているこっちまで思ってしまうほどのものだ。マキは「はあ」と息を吐いて、てくて

くと歩く。優衣はわかっていないが、複雑な乙女心だ。背中が痛々しいほどさみしげ。しかしルカは、物憂げに前髪をかきあげながらこっちに近づいてくる。

ふとした瞬間には、黒い手袋の嵌った手は優衣の髪をなでていた。

「あのさあ、何で頭撫でるわけ？ わたしの身長が低いせい？ 認めたくないけどさ」

ユエも、ルークも、みんななぜか頭を撫でるのだ。ルカは無意識だったのか、失笑気味に手を見やる。

「ああ。ただ単に、こういう柔らかそうなものをみると、触りたくなるだけだ」

「…お気楽でいいね。うらやましいよ」

明らかに自分より彼の方がサラサラだろう。自分の柔らかいかもしれないが、何だか変な気分になる。明らかに毎朝寝ぐせと奮闘している自分だ。

「……………温かいな…………」

「へ」の字に口を曲げている優衣など、ルカは気にしていない。最後は叩くように、ぽんぽんと撫でつけた。そのあと優衣は、全速力で彼から逃げることになる。

「——貴様、聖祭の対抗戦に出てみないか」

すごい速さだった。中庭の規則的に植樹された木まで後ずさり彼

を睨みつけた、までの時間、約0、87秒。対抗戦、という単語に反応したわけでも、聖祭、という単語に反応したわけでもない。

ルカのその表情に、思わず後ずさってしまったのだ。

（なんか………すつごく嫌な予感がする………）

ルカは猫のような足取りで、一歩ずつ近づいてきた。それがやたら、優衣の『嫌な予感』警告を駆り立てる。逃げようと横を向いた瞬間、覆いかぶさるように彼の手が顔の真横をついた。切れ長の美しい瞳が、かなり近づく。

「バロン王国で二十年に一度ある聖祭だ。101人の乙女の中から、たった一人の清らかな魂もった乙女を探し出す。その？101人の乙女？の候補として、貴様が出てみるよ」

「なにそのムチャぶりっ!？」

（ていうか、清い魂を持ってると思えないんですけど……）

「いや、もう候補として出した。どうしても嫌だと言うならば………」

ルカは、若干愉しそうな笑みを浮かべた。いつもは見せないその肉食的な笑みに、優衣は思わず唾を飲み込む。

「ど、どうしても嫌だと言ったら……」

「………その時考える」

（この人悪魔だあああああ！ 究極のサディストだあああああ

！
）

ルカは「死にはせんから安心しろ」と更なる追い打ちをかけてきた。目がくるくると回り大混乱をしている優衣に対して、ルカは小刻みに震えだす。優衣が気付いた頃には、声を立てて笑い始めていた。

「へ？　なにになに？　何でツボにはまってんのっ？」

超美形のくせに腹を抱えて笑いこける彼に、優衣はいっそ「頭大丈夫？」と思ってしまう。笑いが治まらない彼は、それでも必死に言葉を紡いだ。

「貴様が、そんな行動を取るからだろう？　しっかしなあ、貴様、ころころと性格、変わりすぎだろっ？」

優衣は「そ、そんなの知らないわよ」と、ルカの体を押しのけた。笑いが治まって間もないルカは、目じりにたまった涙をふき取りながら、優衣の肩を掴む。

「騙されたと思って出てみろよ。どうせ暇だろう？　暇そうな顔してるぞ」

麗しい笑みをうかべ、ルカは言う。優衣はジト目で彼をにらんだ。

「あなたに騙されて、良いことなんか一つもないと思う……」

素直な感想であった。

ルカの頼み事ムチャぶりのせいで、優衣はその対抗戦に出る羽目になった。どうせ暇だから、別に嫌という訳ではない。だからといって、候補に選ばれそうとも思えない。

101人といったら結構多いと思うかもしれないが、その乙女の候補になるために万単位の少女たちが集まるのだという。しかも、その対抗戦の内容が、色々と大変そうなのだ。

まず自分は、この世界の人間ではないというのに……。

「とりあえず、世界共通のロヴィア語を覚えろと？ 英語だって完璧じゃないわたしが、なんで余計なロヴィア語まで……」

優衣はぶつぶつと文句を言いながら、ぶ厚い本を広げる。

……あれ……おかしいな……。これって、本当にこの世界の文字？

「……これって、日本語で書かれてるよ……しかも漢字つきで……」

優衣ははっとして、本棚にある本をしらみつぶしに読んでみた。するとすべてが、日本語で書かれている。背後でカツンと長靴が鳴った。

「——意思疎通いしそつう、語源変換機能ごげんへんかきのうである《赤の指輪》。肉体保持の役割を担う《黒の指輪》。バロン王国現時点において、すべて不可

能とされてきた《誓約》^{イベル}の完成形さ」

「！」

黒いズボンに白いシャツ。そして黒い上着を羽織ったルカが、国語辞典より厚みのある大きな本を脇に抱え、両扉を閉めた。唇は、綺麗な曲線を描いている。

「それが使えるのは世界でたった三人。その一人であるのが、ヴィアム王国の国王継承者、コウリ・ヴォルス殿下だ。残りの一人は西ヴィアムにて牢獄中。もう一人はフムユスト皇国^{こしこく}で消息を絶ったと噂される」

優衣はうんざりしたような顔でルカを見やった。彼は本を無造作に机に置いて、優衣と視線を合わせるため腰を落とす。シャツの間から白い布のようなものが見えた。

「貴様が生まれた国の語源に見えるのは、その指輪が勝手に解釈を起こしてるからさ。だから貴様には、私が喋る言葉も、字も、その語源に聞こえたり見えたりする」

ここに来た時から優衣の右手薬指には、赤と黒の指輪をクロスさせたような指輪が嵌っている。絶対に抜けないのだから、いまの今まで忘れていた。優衣は改めてその指輪を見やる。

赤い指輪には規則的に方陣が彫られ、黒い指輪には流麗な文字が刻み込んである二つの指輪。

「……そういえば、何で一番最初に教えてくれなかったの！？」

一番最初から、ルカは何もかも知っていたような口調だ。何にも

情報を教えてくれなかった彼に対して、今さらだが怒りの感情が湧き上がってくる。

しかしルカは、いとも優美な笑みを浮かべながら。

「貴様には、時期が来たら教えるつもりだったんだ。最初に教えていても無駄だと思ったからな」

と、軽くけなしてみせた。

「……………あなた、ほんと良い性格してるね…………」

「よく言われるな」

ルカは笑みで軽くけなすと、馬鹿ほどデカイ本を広げた。一番最初のページには、日本語で【「バロン王国千年の歴史」】と書き記されている。

「課題科目は歴史だ。バロン王国千年という問題。最初に応募した数万人というなかから、五千人だけ第一次試験を通過できる。第一次試験は筆記問題で、第二次試験は口頭問題。第三次試験の時点で、応募数の9割が落とされる」

「もし運が良かったとしても、第一次の時点で落とされるかもしれないんだけど…………」

数学の成績は高いが、それ以外は上の下程度だ。しかも国語は最悪的に悪い。歴史。暗記は得意だが、この世界の歴史って…………エリザベスとか出る…？

「貴様なら出来るさ。自信を持ってよ」

「……………何かあなたに言われるとムカつくわ……」

彼のそれは逆鱗に触れる言葉だった。優衣はイラッと頬をひきつけ、絶対鼻を明かしてやる、と固く決心する。

「候補に選ばれれば、これほど名誉なことはない。まあ最終目標は『太陽神の乙女』になることだが、そこまで尽くせとは私も言わん。だから、せいぜい頑張れよ」

優衣はしっかりと頷く。名誉だろうが何だろうが、一度決めたことは、とことんやり通したいものだ。約束を守れなかった、コウリのためにも――

「――なあ。貴様は、何故そのような考えができるんだ？」

「……………へ？」

唐突投げかけられた質問に、優衣は立ち上がった彼を追うように見やった。

「101人の乙女。普通なら『自分だったら絶対に選ばれる』と自信過剰になるか、『絶対に選ばれないから出たくない』と思うか、誰かに言われて渋々出るかのどれかだろ。だが貴様は、態度を見てもこれら三つの枠には当てはまらない。確かに私は強いて貴様を押しやったが、今こうして試験のために努力をしている」

褒められているのか貶されているのか不思議がっているのか、いまいちわからない言い方だ。優衣は思ったことをそのまま述べてみ

る。

「だって、もう参加登録とかしちゃったんでしょ？ 確かに自分が選ばれるとはこれっぽっちも思っていないけど、選ばれるための努力はしたいしさ。……それで、その、……、これをやったら、……」

ヴィアム王国に行くことを許してくれるか、と言おうかどうか迷う。

予想に反して、ルカは真顔だった。

「……。まあ、いい。ある程度の努力をしたら、それだけ結果が実となってついてくる。101人の乙女に選ばれば、先代の《アルミス》が乙女たちに試練を与える。その試練に成功して『証』を手に入れた乙女こそ、晴れて当代の《アルミス》になれるんだ」

説明をするだけすると、ルカはぱっと離れた。

「——美しく賢く、麗しい小鳥のようなさえずりで皆を癒し、太陽のごとき眩しい笑みで皆を魅了し、導くとされるのが太陽神の乙女・アルミスだ」

彼の皮肉げな笑みに対して、優衣は思う。

（……美しく賢く、麗しい小鳥のさえずりでみんなを癒して、太陽のような眩しい笑顔でみんなを魅了し、導くとされるのが太陽神の乙女・アルミス？——っ!？）

……候補になれるほど、自分は美しくないしそれほど賢くもない。まして小鳥のようなさえずりなど、そんな声出せるわけがない。笑顔なんて、そんなビジネススマイルできるわけない。

「——あなた、とんでもない聖祭（も）に参加登録してくれたわね——
——っ!!?」

心の底からの、叫びだった。



太陽神の乙女・アルミスの聖祭。太陽神の乙女を決める前に、その候補を101人だけ決める聖祭だ。参加対象は10歳〜17歳までの少女全員。候補に選ばれるだけでも名誉なことで「我が娘こそは」と、応募人数はなんと五万人。メイルの街からという少女たちが圧倒的だ。五万人という大規模な応募数から、第一次試験に上れるのはたった五千人。

「……………」

のはずだ。？ たった？ のはずだ。
長い足を優雅に組む彼を見上げて、床に正座しながらため息をついた。

「悪運と言うべきか、それともただの幸運と言うべきか……」

優衣は頭を押さえる。さっき彼の口から発せられたのは「不合格」

ではなく。

「なんでわたしが「合格」なの？　これって幸運？　不運？　それとも悪運？」

そう、合格というか、入った、という報せだった。どうやって応募者から五千人を選ぶのかは知らないが、とりあえず今日の第一次試験に行かなければならないらしい。

「？神の理は神のみぞ知る？。偶然か必然かは、後で考えればいい。ともかく貴様は、乙女候補になれる可能性がある。せっかくこういう機会に恵まれたのだから、真剣にやれよ」

「そ、そりゃ、わかってるけどさ……っ！」

正座をしてるから足がそろそろ痛くなってきた……。

「ああそうそう。第一次試験と第二次試験ならそうだが、第三次試験は正装を身に纏わなければならない。普通なら誰しも持っているものだが、貴様の分はとりあえず私が用意した」

……這ってでも第三次試験まで行けとっ！？　んな無茶なっ！

「まあ。落ち着いてやれよ。第一次試験程度なら、楽勝だろう？」

「いったいどこからそんな言葉が出てくるの。確かに、国語以外なら成績も良いけど……」

国語だけいつも「3」がつくのが現状だ。国語じゃないから、あの程度は頑張れる気がする。

優衣はもぞもぞしながら、拳をつくった。

「最大の努力はする。それだけは、約束できる。たとえば、落ちたとしてもね」

「ああ」と、深くルカが頷いた。そのあとに「貴様なら」と、小さく呟く。

第一次試験。筆記問題。

優衣は羽ペンを持つ手を休め、今とさほど変わらない問題用紙の解答欄を睨みつけた。全部埋まっている。これが全て正解なら満点だ。ほぼ確実に第二次試験に進める。

優衣は深呼吸した。



美少女から美女。美醜びしゅう関わず街の掲示板に群がるそれは、高校受験を体験したかのような心地だ。

番号、ではなく、順位で挙げられている掲示板には、選ばれし者たちの名前が挙がっていた。五千人から一気に千人にまで絞り込まれる第一次試験。一位から千位まで桁のあるその中に、優衣の名前は挙がっていた。

「……………154位……………」

満点中9割を正解でおさめたのに、二桁には至らなかった。その前に第一次試験を通ったことに、驚くべきであろうが。

（ここまで来たんだから……………、第三次試験まで行きたいよね……………！）

第二次試験は二日後。確か、試験官の前での口頭問題のはずだ。
筆記問題より、さらに難解な問題が出てくるであろう。



「受かったんだって？　とりあえず、おめでとう、とでも言っておこうかしら」

さっそくルカに報告しようと思っ彼の部屋を訪れたら、そこにはマキの姿があった。いつも通り白い大外套を羽織る、栄えある騎士団長の姿に、優衣は目を見開く。

「マキちゃん！　また訓練さぼったの！？」

「えっ？」

向こうの方で本を読んでいたルカが、笑いを堪えているのが気配でわかった。

「訓練をしたくないから彼の部屋を訪れたわけでも、彼に会いたいからこの屋敷に来たわけでもなくてよ！　あ、前者の方を撤回よ！

——あ、いえ、その、後者の方も撤回よ！」

みるみるうちにマキの顔が真っ赤になる。

（……どっちとも正解ってことでしょ……？　なのに何で顔あかくするかな……）

まさか、やっぱり風邪でも？　などと、優衣は見当違いなことを思う。マキは小さく咳払いすると「とりあえず」と気を改めさせた。

「第一次試験、合格おめでとう。結構良い滑り出しだわ」

「あ、ありがとう。……あれ、でも何で知ってるの？　わたし、それを報告しにここに来ただけだ」

まだ誰にも報告していないはずだ。すると向こうの方で、ルカが立ちあがった。古い本を持ったまま、こちらに近寄る。

「私が教えたのさ。貴様の合格通知は、すでに知っていたからな」

「し、知ってたのっ？　何で？」

合格のやつは、街の掲示板だ。ついさっきそれを見てきた優衣に対して、彼は一步もこの部屋から出ていないだろう。マキがいるから余計だ。

しかし彼は、本を軽く空中に投げながら笑みを浮かべる。

「保護者には、先に通知される仕組みに、なっているからな」

優衣は本を掴み取るルカを呆然と見やった。確かにそうだったような気がする。

（せっかく鼻を明かしてやれると思ったのに……………！）

（こうなったら、何が何でも……………乙女候補とやらになってやろうじゃないの……………！）

優衣は勝手に決意し、ルカを人差し指で指した。

「第二次試験も、絶対合格してやるんだからね！ 覚えておきなさい！」

「……。何があったのか知らないがやる気だな」

ルカは笑みを浮かべて言った。皮肉さはなく、何故か若干嬉しそうな笑みで。

「まあせいぜい頑張れよ。全力でな」

わかってるわよ、と優衣は言いかけ、ふと思い出す。

「……あ、そういや、第二次試験って、口頭問題だよね？」

「そうだが」

「早押し、クイズ形式だから、……。どこでやるの？ どこかにスタジオでもあるわけ？」

「……貴様、場所を知らないのか？」

冷たい視線に、優衣は思わず「うっ」とうなって縮こまる。やっぱりルカに対しては、どんな発言でも嫌味が返ってくるらしい。これから気をつけないと。

「だって、何も聞かされてないし……。ルカだったら何か知ってるかなあって」

「第二次試験からは王城内での試験だ。十人ずつに分かれて、各部屋で口頭問題を行う。各部屋で生き残れるのは二人のみだ」

呆れた顔ではなく、ルカは小さく吐息を吐いて告げた。うしろのほうで、何やらしかめ面をするマキがいる。

「上位二位ってわけね。……よし」

優衣は心の中で、今まで覚えてきたバロン王国の歴史の文章を繰り返す。勝つためのことはやってきた。あとは、全力でやるのみ。



「――第26問目。バロン王国、7代目暴君の名を述べよ。ただし、略式は誤答とする」

（きたっ！）

髭を整え黒い礼儀服を着込む二人の試験官。自分の左右に居る九人の少女たちを見るわけではなく、優衣は真っ先に手を挙げた。

「ユイ・ヒサキ。申してみよ」

「――7代目暴君は、ジョップ・ザイエル・キコウスですっ！」

「うむ。ユイ・ヒサキの解答は正解である」

隣の方で、小さな舌打ちが聞こえた。優衣はそれを感じながら、ぎゅっと拳を作る。

(……まさか、ここで二位の子と当たるなんて……)

自分は木の柵に囲まれている。他の九人の少女もろともだ。まるで裁判を受けているかのような心地になる。優衣が気にしているのは、部屋の端で余裕げ微笑を湛えている少女だ。第一次試験で二位通過した彼女は、容姿端麗・成績優秀・実家富豪というお嬢様。大きくてパツチリとした碧眼と、サラサラストレートな金髪は見る目麗しい。

(フェルシア・バイトン……。戦乱の時代を生き残った唯一の貴族……)

彼女ははすでに一位確定だ。16ポイントを取っているため、早抜けしている。だから優衣は、二位を狙っていた。

(これで点をとったから、三位と同点。次でポイントを取れば、二位の子と並べる……！)

試験官の言葉に、耳を澄ます。

「――第27問目。バロン王国の山脈地域咲く「ミワン」は、特にどのような薬として重宝されるか、述べよ」

(…………え…………?)

知らない。知るわけがない。だって、課題科目は歴史。植物なん

て、聞いてない。

「——「ミワン」は特に、ミクシン病という恐ろしい病気に適すると言われていました」

現在二位の子だった。彼女は貴族ではないものの、父親が大商人だから大金持ちらしい。

(……連続で正解しないと、二位になれない………！)

次も植物問題が出たら終わりだ。優衣が答えられる可能性は極端に低い。いや、不可能と言っている。

「——第28問目」

試験官の朗々とした声が、優衣を我に返らせた。ものすごく焦りを覚える。

「特別問題。二千年前、世界破滅の危機を乗り越えた英雄・ミカエルの、弟の名前と、その汚名を述べよ」

(！)

少女たちにざわめきが走った。たぶん、みな名前だけは答えられるが、汚名は知らないということだろう。優衣は、それを聞いている。だって、その名前は……。

「——ルカヴィンド・サラシュタ。汚名は、「影の覇者」………」

手は上げていなかった。しかし試験官は「うむ」と、頷きを見せる。

（ルカ……………）

血が出そうなほど、唇を噛みしめる。似ているのだ。その英雄の弟と、彼の名前が。

「――以上をもってして、第二次試験を終了とする。なお、一位のフェルシア・バイトンと、二位のユイ・ヒサキは、たった今をもって、二日後の第三次試験を行える資格を、もつ者とする―――！」

優衣はその場で崩れるように座り込んだ。三十問、一時間に渡って緊張状態が続いていたのだ。無理もないだろうが。

（なんで27問目で、植物の問題が出てきたのよ……………！ 歴史だけのはずでしょう！）

出てきたのは27問目だけだったから、優衣は一点差で二位に登りつめた。もしそのまま植物問題が出ていたら、間違いなく二位にはなれなかっただろう。

優衣の脳内で、さきほどの試験官の声が再生される。

『特別問題。二千年前、世界破滅の危機を乗り越えた英雄・ミカエルの、弟の名前と、その汚名を述べよ』

『————ルカヴィンド・サラシュタ。汚名は、「影の覇者」……
…』

(……………これって、偶然なの…………？ 彼の名前と、英雄・ミカ
エルの弟の名前が、似てる、って……………)

この問題は、ルカ自身に聞いていた。だから優衣は、汚名の方も
知っていたから、答えることができた。

「……二日後の第三次試験。まだ情報が与えられていないけど、い
ったい何をするんだろう……」

優衣のつぶやきは、乙女たちが部屋を退場する足音で————
———かき消された。

ぼんやりと星空と眺めていた。綺麗な夜空だ。この世界でも月は美しい。

そして、散りばめられた星も綺麗。

「こんな夜景、都会じゃ見られないもんなあ」

第三次試験は、明日の昼から行われる。だから優衣は、自室のテラスからそれを覗いていた。

下を見下ろせば屋敷の中庭と、向こう側には静まり返ったメイルの街並み。白亜の城でさえ、この星空には敵わない。

(……………寒いなあ。……………)

優衣は長袖のワンピースを手繰り寄せた。この街の夜は冷える。

「――馬鹿だな。風邪を引いたらどうする」

「!？」

ばさりと、暖かいものが身を包みこんだ。これは黒い上着だ。しかも大きい。

「な、何でそんなとこにいるの!? 危ないよ!」

いつの間にかルカは、欄干の上に悠々と立っていた。月の光が、彼の顔を淡く照らす。

「……静かにしろよ。夜は、そういう一時だ」
ひんがし

「だって……！（ここ二階だよ……！）」

優衣が小さな声で言うと、ルカは皮肉げに笑ってみせた。

「面白いだろう？　ここに立つと、街が一望できるのさ」
マイル

彼は街を見下ろした。

その姿は、月からの使いにも見え。

——「影の覇者」と思えるほど、皮肉なまでも美しい。

優衣は彼の上着を手繰り寄せた。冷たい表情をしているのに、馬鹿げたほど上着は温かい。

変な感じだった。冷たいはずの彼が、こんな温かい体温を持っているなんて。ほんと。

「夜はな、人を癒す」

「え………？」

優衣は確かめるように彼の横顔を窺った。

「太陽は人を縛り、月は人に安らぎを与える。…私はそう考えている。」

——馬鹿げた話だろ？　自分勝手だと思っているさ」

彼は、自嘲げな微笑を浮かべていた。

優衣は言う言葉が見つからなかった。言葉を探すうちに、彼は言葉を紡ぐ。

「太陽は嫌いだ。輝くのは表、裏は影しか残らない。それに比べて、月が良い。全部が均等だ。裏も表もない。闇は、……私の色だ」

彼は星空を見上げた。闇に似た暗褐色の髪が、サラサラと音を立てて流れる。

「——ルカヴィンド……」

「えっ？ いま、何て……」

彼は、こっちを見てはくれなかった。蒼い瞳を、こっちに向けてはくれなかった。

「——私の名前汚名さ。偽名だが、私はこっちの方が気に入っている」

「……本当の名前は、何て言うの？」

「——……」

風。それも突風だった。優衣は髪を押さえながらも、ルカを見上げる。しかしもう、彼の美しさを見ることはできない。彼は一足先に部屋に入り、自分を待ち構えていた。

「……………風邪を引く。部屋に戻れ」

優衣はひっそりと「教えてくれないんだ」と、物淋しげにつぶや

く。無意識に苛立ちがまざっていたのは、まだ気付かない。



「これより、101人の乙女候補の、最終試験を執り行いたいと思う―――！」

長官による開会式の宣言により、正装を身に纏った優衣は王城の地下へと進んでいた。

岩肌にかかげられる松明。ぬるりとした地面。木の柵の向こうは崖であり、そこは地の神が住まう場所だといわれている。

200人の少女と七人の神官の列。一列の徐行行進であった。

「……この正装着、ちょっと重いかも……」

赤色の塗れば完璧に巫女さんだ。まあこの世界はヨーロッパだから、全身幽霊のような白衣なのもうなずける。しかし何枚も重なって着ているから、ちよっと肩に食い込んだ。

（……長いなあ。もう何十分くらい歩いているんだろう）

歩くのはいいが、いったいどれだけ地面に潜り続けているのだろう。この地下を掘ったのは大昔の魔術師らしい。微かに魔力を帯びているらしいが、優衣にわかるはずもない。ましてや魔術師どころか、魔力をもつ人間でさえ激減しているし。

そろそろ、この王城の敷地内にある三つの聖域のうち、一つにたどりつく……。

「……下り坂が平面になってきた……」

壁がくり抜かれたような大穴があった。その奥に、先頭の乙女たちは入っている。冒険気分とまで優衣は幼稚ではないが、何だか胸が高鳴る。大量に焚かれた松明のもと、その空間が優衣の眼前に広がった。

(……うわぁ……！ 綺麗な水……！)

泉、または地底湖、とでも言うのだろう。面白いほど透き通った水から察するに、水底は五十センチも無さそうな深さだ。どこから湧いているのか探してみると、何やら中央部分から水を噴き出しているような感じだった。地下水脈でもあるのだろうか。

その脇を通るように列は進む。入口の反対側に位置するそこには、ここから見えるが限り、何やら金の大皿のようなものが置かれていた。

「前半の乙女たちよ。こちらへ」

「後半の乙女たちは、静かに水に入りなさい」

二人の神官が言うには、前半の列は陸で待機、後半の列は水の中に入れということだ。

今思えば、前半の列の子のほとんどが、貴族バイトン家や大商人といった金持ちの娘。優衣のような後半の乙女は、運よく選ばれたような子たちばかりだ。

(つめ、冷たい)

水泳で感じるような水温、どころではない。冷水だ。こんな中に

ずっと入ってれば、手足の感覚が麻痺するに違いない。しかし左右には何も言わず唯唯諾諾と入っていく乙女たち。優衣は覚悟を決めて水の中に入り、金の皿に近づいた。今思えば、水の中に入っても大丈夫な服の素材だろう。

最後尾から見える限りでは、遠くから見えたあの皿は、皿ではなかった。

「？ 金の鏡？」

金色の大きな丸い鏡。装飾もさることながれ、少しも粗野なイメージを与えない。

「今から選別の儀式を執り行う。心して待たれよ」

神官はある少女の名前を呼んだ。その名前が試験二位の「フェルシア・バイトン」だということにびっくりする。神官が言葉を発した。

「代々の太陽神の乙女・アルミスの力を受け継ぐ、金の鏡よ、かの者は太陽神の乙女になるに相応しい叡智を秘めておる。かの者は、太陽神の乙女になれるか、なれまいか」

（うそう！ こんな感じでやってくの！？ 無茶苦茶時間かかるじゃない！）

神官の唱えに、金の鏡はぴかりと輝きを放った。一瞬の閃光のあと神官が「腕を差し出すが良い」と命じる。言われるがまま彼女が腕を金の鏡に差し出した。まばゆい光が彼女の腕を覆い、やがて……。

「おお………！ 一人目の乙女候補だ………！」

上級神官たちの歓声のもと、彼女の腕には何やら刻印があった。ここからじゃ見えない。

フェルシアはいそいそと自分の場所に戻った。勝ち誇ったような微笑が、口もとに湛えられている。

そのあと何人もの乙女が金の鏡へ行き、ある者は落とされて泣き崩れ、ある者は刻印を手に入れ喜んでいた。

「――ユイ・ヒサキ。前に出るが良い」

名前を呼ばれ、優衣はびくりと背筋を伸ばす。乙女たちが金の鏡へと誘う道を作り、視線は優衣に向けた。落とされた者の嫌悪と、選ばれた者の冷視線が痛いほど伝わってくる。感覚の無い足をやつのことで動かし、優衣は身の凍える思いで金の鏡の前に立つ。寒さで血の気が無かった。

「かの者は太陽神の乙女になるに相応しい叡智を秘めておる。かの者は、太陽神の乙女になれるか、なれまいか」

金の鏡がぴかりと光った。神官に命じられ、優衣は震えながらも腕を差し出す。

（ここに刻印ができれば、……乙女候補になれる……）

刻印が彫られなければ、すべてが無と化す。しかし、優衣としてはどちらでも良かった。101人の乙女候補に選ばれればそれはそれで良い。選ばれなかったとしても「あああ」と思うだけ。その時は落ち込むかもしれないが、受験に落ちたわけでもあるまいし、か

なり樂觀的であつた。

「！」

眩しいとまではいかない。それでも、腕を包み込む金色こんじきの輝きに、優衣は目を細めた。

(……………！　これが……………——刻印……)

上級神官の中で誰かが優衣に鋭い視線を送った。安堵とも苦悩ともとれるその視線に、優衣は気付かない。ただ太陽の刻印が持つその熱に、優衣は息を吐き出した。温かい。

(太陽神……の、乙女……)

幼稚園児がクレヨンで描くような、あんな太陽ではない。もっと文明的で芸術的な太陽の刻印が、優衣の右腕にはあった。色は褐色だが、明るい色ではない。そしてそれが、入れ墨のようなものだと知った。

「うむ。これですべてじゃ————」

「えっ？」

思わず隣に立つ神官を見上げてしまった。優衣など気にもせず、神官は朗々と宣言する。

「101人目の乙女候補は、ユイ・ヒサキであるということを、いまここに、長官として申し上げる。なお、101人の乙女候補は、明日、王城の《最聖域》にて、儀式を執り行う————！」

最後の、一人。自分が、101人目の乙女。

(……………ほんとに、選ばれちゃったよ……………。?101人の乙女?に……………)

神官の「なお、選ばれなかった乙女たちには奨励金が出る」などの声は、優衣の耳に入ってこなかった。勝った負けたそれぞれあるものの、乙女たちは、この聖域から出ようとしている。

前半の列の乙女の子がこの空間からいなくなり、優衣は金色の鏡を見てから一步足を踏み出して……………。

「……………うわっ!」

踏み外して浅い泉にダイブするところを、とある神官の方に救ってもらった。助けてもらった拍子に顔が胸板に当たり、かすかに甘い香りがする。

「あ、ありがとうございます……………」

「……………風邪を引いたら大変ですよ。地上に戻ったら、早くお体を温めて下さい」

(……………あれっ?)

相手の顔が一瞬だけ見え疑問を感じたそのあとに、青年は優衣から離れた。後姿は誰かに似ていて、神官が着用する白い帽子の中からちらりと銀色が見える。

「…………………………」

優衣は再度青年を睨むように見つめて、乙女たちの列に加わった。

14 太陽神の乙女・アルミス 前編 (上)

バロン王国王城、最上階の式場《最聖域》。パルテノン神殿を思わせる大理石の柱。古代より残された永久不滅の魔術により？101人の乙女？たちが進む道以外は、暗黒の世界とも呼べる真っ黒な闇。縦十列横十列という、正方形のかたちを維持しながら乙女は進んでいた。

ゆっくり、一步一步確かめるように進む乙女たちは、一週間前の白い正装よりさらに豪華な服である。最高級シルクをふんだんにあしらわれた、純白のドレス。そして胸元には、太陽を表すルビーがあつた。

(101人分も、よくこんだけ……！ お金かかってる……！)

ルビーというのは、そうそう簡単に手に入るものではない。まして101人全員分だったら、どれだけお金がかかるだろうか。ルビー一個で車を買える値段だとすれば、落したり壊したりする前に早々返還したいものだ。……いや、気分的に放り投げたい。

優衣は上級神官たちを横目でうかがう。乙女の両端に、一人ずつ配置されている神官たちも、何やらルビーを付けている。そういえば、この乙女たちの先頭にいるのは、神官ではなくフェルシアだったような気がした。

先導を行う彼女の右で、神官が深く礼をとった。

「……神官長様。いまここに太陽神の乙女・アルミスとなれるやもしれぬ、101人の乙女たちと共に参上いたしました」

続けざまに、フェルシアが頭を下げた。波のように、101人の乙女は深く礼を取る。一番後ろにいる優衣も例外ではない。

「――うむ」

祭壇の上で畏怖たる威厳を漂わせながら、神官長は深くゆっくり頷いた。お腹まである立派な白髭が印象的だ。

「ではこれより、バロン王国37代目国王に、太陽神の乙女・アルミスとの儀を、宣言してもらう」

前列の乙女たちが真っ二つに分かれた。右端に五列、左端に五列。国王を通すための道を作るためなのであろう。優衣はみなと同じような行動をし、軽く頭を下げながら入り口を窺った。入口、というより光しかみえない。

ほんとうはあそこに階段があるのだが、古代魔術にのせいで空間が捻じれ、それを見ることはできないのだ。しばらくすると、国王と思われしき50代後半の男が、ゆっくりと進んできた。

（あれが、国王陛下……………？）

赤褐色の髪。微弱な光を放つ金の目に、若々しくしつかりとした体躯。金や銀の刺繍がたくさんほどこされ、肩からさげる皮ベルトには大きな宝石が三つもついている。

その傍らには、太い白眉のせいで目が隠れた、ほっそりとした男が付き添っていた。宰相である。

……国王陛下はともかく、あんな細々と皮と骨しか無さそうな人が宰相って……。

祭壇に立った国王は、まだ若々しい洪い声で朗々と語る。

「太陽神の乙女・アルミスの儀式を執り行う。先代アルミスよ、あなたは、新しい乙女の誕生を、祝福してくれるのか」

国王は後ろに振り返った。みんなの視線の先には、女の人が立っている。

「……。ええ。わたくしは、乙女の誕生に賛同します」

綺麗な女性だった。美女というより、女神という方がしっくりくるような金髪の女性。優衣たちと同じように白いドレスに体を包み、まだ三十代半ば程度だろう。……うーん。なんか目がちよつと赤っぽくて怖いなあ。

「うむ。先代アルミスの同意を得た。

——これより、新たな当代アルミスを見つけ出すため、この空間で試験をとり行う。

なお、ここは古代魔術によって成るため、空間が度々作りなおされる」

国王が下がった。すると今度は、先代アルミスが弱弱しく紡ぐ。

「——今回の試練は、太陽神の乙女の『証』を見つけ出すということです。そしてこの空間は、いまわたくしが支配しています。ですから、永久に出られなくなっても不思議はありません」

「っ!?!」

ざわめきが走った。国王と傍らにいる宰相が「予定外」というよ

うな顔をしている。

(永久に、出られなくなっても……——ッ!?)

彼女は確かにそう言ったのだ。それはまるで、ここで死ねと言っているかのよう。

先代アルミスは、みな驚愕しきった顔を見渡し、満足げな微笑を湛えた。

「お許しくださいませ陛下。この空間を保持する「まもりいし戍石」は、わたくしが頂戴いたしました。わたくしは微弱ながらも魔術が使えます。ですから、魔力のない陛下と、ここにいらっしゃる123人の方々には、————死んでもらいますわ」

一瞬で先代アルミスの姿が消えた。「わたくしは、永遠不滅の麗しきアルミス」という声が、入口である光の方角から聞こえる。それが逆光となって、先代アルミスの表情を隠した。

「それではみなさん、ごきげんよう………!」

彼女の姿が、光の中に入って消えていく。そして、唯一この空間の入口が、見る間もなく閉じられていく。

「っ!」

闇が。

完全に、この場にいる者から、光を奪^{出口}った。

そして、優衣は、次の瞬間には。

「! ど、どこ……ここ……」

どこかへ、移動していた。

周りには誰もいない。そのかわり、何故か本で埋め尽くされていた。右も左も本。本。本。本の山しかない。

「閉じ込められた……」

誰もいなかった。静寂だった。暗かった。

なぜか自分の周りだけ明るくて、数メートル先は真っ暗だった。まるで自分だけに、スポットライトが当たっているように。

(……………)

怖くはなかった。それとともに、楽しくもなかった。

思い出すのは、トイレの個室。母親に投げ込まれ、日が暮れるまで泣いていた幼い頃。

真っ暗だった。ただひたすら、真っ暗だった。

真っ暗で、真っ暗で。

真っ暗で、真っ暗で。

真っ暗で、真っ暗で。

真っ暗で、真っ暗で。

真っ暗で、真っ暗で。

真っ暗で、真っ暗で。

真っ暗で、真っ暗で。

光が恋しかった。

雑音がほしかった。

温かさに飢えていた。

怖くて憎くて。それでも、あれは演技なのではないか、と、期待もしていた。

——狂っていても、母は自分だけの母だから。

母が死んだときには、何か切れた……？

忘れる。ただそれだけに、本能は尽力を尽くした。

忘れる。

忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる。
忘れる忘れる忘れる忘れる忘れる。

でも……

たまに、ふとした瞬間に、母親を思い出してしまいそうだった。つい最近では、ルークと話をしたときであった。

防衛反応が働き、優衣はまたすぐにそれを忘れた。そしていま、再び思い出した。

(……お母さん……)

そして優衣は、光と出会った。
眩しいと感じるまでの、強大な光を。

「わたしには……………遠すぎるよ……………」

闇にのみこまれる自分。

光に心を魅せられた自分。

母親を憎み、恐怖さえ感じる自分。

(……………光は、誰の味方……………?)

優衣は、眩しさに目を細めた。

14 太陽神の乙女・アルミス 前編 (上) (後書き)

15 太陽神の乙女・アルミス 前編 (下)

「なんだろう」

円形の空間、とても言うべきだろうか。四方八方が大きな扉になっており、どこから入ってきたのかはわからない。ぐると一周し、それとともに扉が開くかどうか調べてみたが、扉は堅く閉ざされて開かない。

まさかここで絶賛迷子発売中になるとは思わなかった。そんなもの買った覚えはないのに自分は迷子である。人が来るまで待つてみようか。

(でも………^{みんな}101人の乙女がどこにいるかわかないし、ここがこの空間のどの位置に位置するのかわかないし……)

先代アルミスの言った通り、やはりこの《最聖域》は彼女に支配されているようだ。「成石」とやらは知らないが、現に優衣は迷子になっている。この空間は度々作り直されるらしいし、歩き回るのも無謀だと思って床に座り込む。天井を見上げて目を見開いた。

(なんだろう………? 月と、太陽と、ヒト………? 数式的な図形………?)

中央に太陽。その左に一回り小さな月。太陽を拝むのはヒト。方陣だ。

何となくこれに似た、サークルなら見たことがある。テレビの番組だ。しかしここは異世界。これが何なのか検討もつかなかった。地響きのような音を立てて扉が開いた。あわててそちらを見やる。扉から出てきたのは綺麗な顔立ちをした青年であった。たぶん上

級神官の一人であろう。神官の服装と、それ相応の白い帽子が彼の身分を示している。

（まさか………！）

第三次試験のときに泉に落ちそうになったところを助けてもらった、あの青年ではないか。一瞬だけ見えた色の薄い緑の瞳。間違いない。あの時に助けてもらった青年だ。

上級神官の青年は、こちらを見て驚いたようだ。すぐにこちらに駆け寄る。

「大丈夫ですか？ 色々大変だったでしょうに」

「は、はい。ありがとうございます」

（あれ……っ。何か、どこかで聞いたことがあるような………？）

なぜそう思ったのかはわからない。

「それは良かった。実は、国王陛下を探しているのですけれど、貴女は見ませんでしたか？」

国王もこの世界のどこかに居たのだとすれば危ないな。衛兵たちが「国王さまー」と叫びながら走り回っているだろう。優衣はもちろん頷く。すると彼は「一緒に行動を共にしませんか」ときた。

否定する理由もへったくれもないから即答である。

青年は神官なのだから、色々と知っているかもしれない。それにいま、優衣が頼れるのはこの青年だけだ。

「……あの、どうやったらここから出られるか、わかりますか？」

そのとき、青年が入ってきた扉が音を立てて閉じていった。いったいどこに繋がっていただろうか。

「……とりあえず、先代アルミスが言っていた通り『証』を探す必要がありますね。手がかりになりそうな文章は知っていますよ」

確かにそうだ。先代アルミスは、試練はアルミスの証を見つけることだと言っていた。ヒントを与えるような言葉を言ったのは、それだけ彼女に自信があつたからだろう。

優衣が頷くと、青年は目を閉じて文章を読み上げた。

「――？太陽の神　いずれこのとき

三千と二百の月日経ちて乙女を集える

清き乙女　現れれば

その瞳　悪しき宝を封じらん

証を欲しいものよ

清き黒の術わざを操るものと共に

聖なる証が現れん？――」

青年の声に反応し、扉が一つだけ開放される。まるで、中に入れと言うかのように。優衣と青年は互いに顔を見合わせた。青年が苦笑気味に「行きましようか」と誘ってくる。もちろんノーとは言わないし言えない。扉の中に入ったら、周りの景色ががらりとかわった。

がらがらと背後にある扉が閉まっても、優衣は振り向けない。まるでパラレルワールドだ。

闇の空間にボールといえる大きな球が無数に浮いている。カラフルであったり赤一色であったりと、色はバラバラ。サーカスで使う球みたいだ。

「道が無いですね……」

見たところ、一步踏み出せば漆黒の闇。もしかしたら落ちてしま
うかもしれない。踏み出す勇気などあるわけなかった。

（ここからどうしろと……。まさか、ボールに乗り移れと？）

「――しき」

（え………?）

青年が小さく呟いた。と同時に、どこかへ導くかのような道がで
き始める。空中に出現した薄暗い光の道に、青年が一步踏み出す。

「すぐにこの道が消えるかもしれません。行きましょう」

優衣の有無を確認するまもなく、なぜか薄暗いこの光りの道が、
陽炎のように揺らぎ始めた。この道が消えてしまうと悟るより早く、
青年が優衣の腕を掴んで引っ張った。

「走って」

「っ！」

走ってある程度離れると、さきほど優衣たちがいた場所が崩れ始
めた。しかもその崩れが、連鎖のようにこちらに伸びてくる。明ら
かに崩れるスピードの方が早い。

青年の左腕が熱を持ち始めているのに気付いたのとはほぼ同時だっ
た。

（百メートル走、わたし何秒だっけ？ 16秒だっけ？ で、あつちは、12秒くらい？）

その差4秒。たったと思うかもしれないが、結構大きいのだ。その差は。

「……っ……痛いのは嫌いですが、仕方ありません……っ！」

青年が何事かと呟いた。優衣がそのことに気付くより、左腕が熱くなっていることの方が気になる。優衣は後ろの振り返ってみると、光の道が崩れるのが遅くなっていた。しかしさっきより光が弱くなっているような。

「！ 扉だ！」

優衣は喜びに声を上げた。大きな扉が、おかえりと言うかのように開いて待っている。

あと十メートル。

……五メートル。

……一メートル。

「う、うそでしょ！」

扉に飛び込んで出てきたのは扉の空間であった。永遠に繰り返してしまいそうな扉のループ。

「根本的な解決には至らなかったようですね」

青年が苦笑。のち真顔に戻り、優衣と向き直った。

「どうやらこの扉は、声に反応して開くようです。神官に伝えられる秘文といえはこの程度でしょうが——」

(なにさ……………?)

不自然に声が途切れる。驚いて見上げると、青年が顔を歪めて左腕を押さえつけていた。

かたちのよい唇から、熱い、と、こぼれ落ちてくる。

「だ、大丈夫ですか!？」

青年が膝を地面に付けた。彼の左腕が、まるで己^彼の手ではないように、ひきひきと動いている。見ることにできない優衣とは違い、青年の左腕には焼けるような熱と痛みが走っていた。

大丈夫ともいえない激痛のなか、青年は自身の左腕を押さえ込む。いや……抑えこんでいる。

ふわあと、光が視界の端でちらついた。

「扉が……!」

光が花のように舞い。

導くように扉が開く。

彼の左腕に、一瞬だけ蜘蛛のかたちが浮かび上がった。

「行きましょう。もう、治まりましたから……」

憔悴した顔で青年は弱弱しく微笑する。先導するように立ち上がり、優衣の背中を軽く押した。

「えっうん」

青年が先に行ってから、優衣は扉を潜る。

――――扉が――――またゆっくりと閉まっていた。

15 太陽神の乙女・アルミス 前編 (下) (後書き)

16 太陽神の乙女・アルミス 後編 (上)

「――？太陽神の乙女の証？とは、すなわち、この空間の中央部にある至宝のこと。

そこにたどり着けるのは、真のアルミスのみですわ」

(！)

凜とした少女の声。100人の乙女候補たちと、祭壇には国王陛下がいた。

最初の場所だ。自分は最後尾にいるし、うしろには上級神官の青年も立っている。優衣は辺りを見渡した。

(ど、どうなってるの……？ まさか、あそこに迷い込んだのは私と彼だけ……？)

疑問に答えてくれる者など誰もいない。凜とした乙女の声は、試験二位のフェルシア・バイトンであった。

「国王陛下。後のお話はお任せしてもよろしいでしょうか」

祭壇の上に佇む国王陛下を彼女が見上げる。

「うむ。本来であれば、先代アルミスがそなたらに試練を与え、その合格者が当代のアルミスとなれる手はずであった。緊急時に備えてある【神の選定】を執り行う。これは古代魔術ゆえ、どのような

ことが起きてもおかしくはないが、みな異論はないな？」

全員が一世に首肯した。ここから出られるか出られないかがかかっているのだから、当たり前前の反応であろう。

「【神の選定】ののち、真のアルミスにはその証を取りに行ってもらう。みな心して待たれよ」

静かになった。神官長が祭壇の上の中央に立ち、何も無い闇に向かって深い礼をとる。祈りを込めて、詠唱を言葉にした。

「―― 太陽の神 いまここに

乙女とならん清き101人の少女は集えた

選定をしよう 神よ

このなかの 聖なる乙女は誰なのか ――――」

「っ！」

衝撃であった。右腕の、あの太陽の刻印が、熱く、熱を持っている。灼熱の炎に入れたように熱い。

少しずつ金色の光をまといながら、優衣の意思に反して太陽の刻印は熱を持つ。だんだんと大きな金色の光をおさえようと、腕を隠して圧迫しようとする。が――

「な……………っ！」

その声は、優衣ではなかった。優衣の方が口を開けたまま固まっているというのに、青年が驚愕に目を見開く。緑の瞳に、一瞬だけ自己嫌悪が走った。

彼のその手で、優衣の右腕を掴みあげているというのに。

「…………ユイ・ヒサキ。前に進み出よ」

国王が呼ぶ。行かなければならない。何はともあれ、国王が直々に自分と呼んでいるのだから。
でも。

何だと言うのだ。目が、離せなかった。緑の瞳が、どこことなく、罪悪感が滲んでいて。

（……………！）

まさか、と優衣は唇だけでつぶやいていた。その時には、青年は優衣の手を離している。

罪悪感と憂いの混じった色の薄い目を、青年はゆっくり逸らした。

「！」

「ユイ・ヒサキ。前にでよ」

国王が再度呼ぶ。動けかせない思っていた足を無理やり動かし、青年を再度見つめてから、祭壇へ向かった。乙女たちの視線が、羨ましさと、憎悪などが含まれているのを、感じながら。

「——腕を見せよ」

言われるままに腕を見せた。腕まで隠す手袋を外すと、金色に光る太陽の刻印が、自分の右腕にある。

国王は朗々と宣言した。

「【神の選定】により、太陽神の乙女の証との契約を行うまで、ユイ・ヒサキを暫定的に当代アルミスとして扱うことを、ここで事前に宣言する———！」

「っ！」

美少女でも、ましてやこの世界の人間でもない優衣は、暫定アルミスだと。何かの間違いではないか。いまここでネタばらしという看板が出てきてもいいのではないか、と思った。

……チツ……ツ……

舌打ちが聞こえた。優衣はそれが誰なのか気付く———フェルシアだ。

彼女は自分とは違って、綺麗で、頭も良くて、家柄もあるお嬢様だが、彼女は選ばれなかった。

憎々しげに自分を見つめる視線は、「あなたは相応しくない」と言っているよう。

ここで勝ち誇った顔をできたらどんなに気が楽になるだろうか。101人の乙女候補にはやる気満々でここまでやって来た優衣だが、アルミスになろうとはこれっぽっちも思っていなかった。ましてさすがのルカでさえ、そこまで頑張らなくていいと言ってくれたのだ。この場に見知った人間がいたら、少しは落ち着けるかもしれないのに。

「暫定アルミス、ユイ・ヒサキよ。証を見つけよ。さすれば、先代アルミスの言った通り、この《最聖域》から脱出も可能。まきりいし「戌石」は後で取り返せば良い」

国王と宰相の期待。100人の乙女からの視線。上級神官の青年の苦悩。

（『証』って……！ そんなこと言われても、わかんないものはわかんないじゃん！）

心の中で叫ぶが、打開策は見つからない。魔法みたいに空から『証』が降ってきてはくれないだろうか。無理だ。その言葉が頭の中でぐるぐる回る。

「———本物のアルミスは、このわたくしにこそ相応しいもの———！」

フェルシアがこっちに来る。神官たちの制止をきかず、国王の御前なのに無視して通り過ぎ、優衣の目の前に現われた。

「祖母から母へ、そして母からわたくしへ。アルミスの代は我が家系で受け継いでいくはずだったのに……！ それを！」

（…まさか、先代アルミスは、あなたの、母親……？）

先代アルミスの顔と、自分の母親の顔とが重なって。

乙女たちの悲鳴と、誰かが駆け出す音が聞こえ、優衣の目の前で赤い鮮血が華をちらした。

………ぼた………

「あ………」

自分の右腕に———金色に輝く太陽の刻印に、まるで胸元にあ

るルビーのように赤い血が包み込んでいく。腕を刺したナイフと、少量ながらも真っ赤な血が、優衣の視界に入った。

「ほら真っ赤。ふふふ。みじめね……、せっかくの綺麗なドレスが、台無しですよ…」

少女の声も。

「神官！ この者を取り押さえるのじゃ！ 暫定アルミスを傷つけたものとして、極刑の罪に値する！」

宰相の声も。

「……あ……。……あつ！」

優衣の耳には、届かない。

ただ衝撃だけで、言葉にならない声が発せられた。

「ああ……… ああああああああああああああああ
ああああああああ！ 」

優衣の体を、上級神官であるあの青年が真つ先に支えるが、その感覚すら優衣にはない。彼は自身の衣服である神官の裾を口に銜えてちぎり、彼女の腕に止血を施す。暴れることは無かったが、目は虚ろで焦点が合っていなかった。

[illegible]

頭の中に流れ込む感情と母の顔。死んだはずなのに、母は優衣を

苦しめ続ける。

克服しないと、思っていた。忘れるなら、完全に忘れてしまおう、と。

——でも、目の前にあるのは、……真っ赤なわたしの血……

……

死にたくない死にたくない。死にたくない死にたくない！

「いやっ！ いやいや、いやあああああああああああ！」

一緒に死ぬとか、言わないで………！

「……貴女は」

小さな声だった。優衣の心の中に、ほんのちよつとだけ、彼の声が浸透する。叫びすぎて声帯を痛めてしまったのか、叫ぶの止めた途端のどに違和感を感じた。

「貴方の母上が、本当に憎んでいらしたのか、貴方はわかりますか———？」

(………え———？)

さっきまでの青年とまるで違う、若干高めで丁寧な美声。耳の奥まで注ぎこまれるその声に、なぜか優衣は耳を澄ませてしまった。

16 太陽神の乙女・アルミス 後編 (上) (後書き)

17 太陽神の乙女・アルミス 後編 (下)

「もし貴女を憎んでいたのなら、一緒に死のうなどという言葉は言いませんよ。貴女だけを殺して、彼女は生きるはずです。そこでもう一度問いますが、貴女の母上は貴女を憎んでいたと、本当にお思いですか？」

(わたしを……、憎んでいる……か……)

母は憎くて怖い。だが、母が自分をどう思っているかなど、いまの今まで考えたことがなかった。

母と一緒に死のうと言ってるから、自分を憎んでいるのだと思っていた。

しかし、今になって思えば、一緒に死のうというのは、おかしいのではないのか。

「じゃ、じゃあ、お母さんは、わたしを……、愛してたって言うの……？」

他人がわかるはずもないその疑問を、優衣は彼に問いかける。家族の関係を相談したのは、この青年が初めてだ。

「母上は貴女に対する愛情を狂わせてしまった。まるで年をくった時計のように。」

——それに、もし母上が貴女を憎んでいたのだとして、なぜ貴女が母上を憎まないといけないのですか？」

「だ、だって、こ、怖かった、から……………」

かすれる声に、青年はエメラルドの瞳を細めながらも、厳しい声を浴びせる。

「貴女が逃げてどうするのですか。貴女が、時計を正常に^{母上}戻してやれるほどの勇気があれば、良かったのです。そのことについては、貴方にも非があります」

家族関係についての、初めての相談と、初めての説教。
逃げた、という言葉が、ぐるぐると頭の中で回った。

「他人にも頼らず、自分の力だけで突き進むのは、はたしてそれが強さだと言えるのですか？」

「……………わ、た……………し、は……………」

逃げてしまったのか。

母は怖くて憎い、だけの言葉で丸めて、現実から逃げて、自分がこれ以上傷つかないよう隠れて。

「せめて、貴女が母上を受け入れてください。狂った時計が、少しでも正常な時を刻むように」

『こんなお母さんで、ごめんばさいね…』

記憶の断片が、掘りおこされた。手紙に書いてあったのは、飾り気もない母の文字。そのときはむしろしゃしゃっていて、手紙を丸めてごみ箱に捨ててしまった。

なんで気付かなかったのだろう。

なんで母の愛情に気付いていなかったのだろう。

なんで母を救わなかったのだろう。

なんで……自分なんかのために、死んだのだろう。

事故だって、思ってた。自分を守ってくれているかのように見えた、そう思ってた。

あのとき響いた、救急車とパトカーサイレンが、遠くの方で鳴っている気がする。

「……わたしは、やっぱり馬鹿だよ……っ」

ぽろりと、大きな涙が目からこぼれおちた。

意味に無い嗚咽。いままであまり泣いたことのなかった自分が、母のことで涙を流すなんて思いもなかった。

ぽろぽろぽろ。涙が流れる。腕の痛みなど、感じはしなかった。

優衣は静かに、彼の傍で泣いていた――――

優衣の泣き声が、ようやくおさまった頃。

青年がカッと目を見開いた。彼の左腕が痙攣を起したように^{しな}撓る。まるで蛇のようだと、優衣は腫れた目で青年の顔を覗き込んだ。

国王がただならぬ顔で一步詰め寄るのが足音でわかる。しかし優衣は、ただ呆然と彼を見つめていた。

(……………うそでしょ……………)

はらりと、神官が正装として被るあの帽子みたいなものが、地面に落ちる。

薄い緑色の瞳は、だんだん深みある翡翠へと姿を変え。

光が彼の体全体を覆い、肌はより白く、銀糸は輝かしい光を放った。

彼が、優衣の首もとに指を這わせ、ゆっくりと顔を埋める。薬品のような甘い香りが、鼻腔をくすぐった。

「……貴方は悲しむだろう。私がどのような者か、知った時は……」

苦しげに、切なげにつぶやかれる美声に、優衣はうつすら恐怖さを感じた。甘い香りが姿を変え、血のような鉄錆びたにおいが、鼻を衝く。

痙攣と熱を起こす左腕を、優衣の後頭部に回し、彼は優衣と向き直る。翡翠の瞳に、赤い色が走った。

「——……でも、もう？ 狂った時計？ が正常に時間ときを刻むことはない。私は、貴女を裏切ることになっても、時計を無理やり、戻したいのです」

——やわらかな唇を、押しつける。

ユエの時は、とても熱くて、何も考えられない野生のものであった。

ルカの時は、ただひたすら事務的で、冷たいものであった。でも、彼のそれは。

「……………ユイちゃん……」

ルークのキスだけは、なぜかひどく、罪悪感を感じさせるものだった。そしてこの血のおいが、なぜか、甘く感じられて。

「る、ルークさ、さん……っ」

かすれ声で優衣は彼の名前を呼ぶ。目の前でルークが、淡く微笑を刻んだ。

「…空間が縮小を始めています。証なら、ここに」

彼が後頭部を押さえていた左手を振りかざすと、空中から何かが出現した。ストンッと重力に従って落下してくる。

「魔術ではありませんよ。そのような高貴で聖なる術^{わざ}を、私が使えるわけがないのですからね」

ほんのり赤く、岩石のような石。あたたかいと思ってしまうほどに、ちょうどいい熱を持っている。

「私は愚か者なのですよ。自分の欲望のために、こんなことまでしてしまっ……」

ルークが優衣を立たせる。腰が抜けていて立ち上がれない優衣を、彼は支えてくれた。

「――申し訳ありません陛下。私^{わたくし}がこのときに行ったことは、すべて私の判断。コウリ様や、父であらせられる国王様には、一切何の関与もございません。処罰等は、すべて私一人が受けます」

優衣は国王を見た。その背後で、神官たちに取り押さえられたフェルシアが見える。

「……私一人で決められることではない。お前は暫定アルミスを守ってくれた恩もある。今回の件は、処罰を保留することにする」

「ありがたき幸せ」

ルークが軽く一礼をとる。続いて優衣と向き直り、ルークは「『証』を掲げてください」と言う。

疑問は感じたが、右腕の小さな傷も治まり、優衣はあまり気にならずそれを空中に掲げる。

赤と金の混じった聖なる光りが、この空間を一瞬にして包み込んだ。

「！」

「――神官としての礼儀は、国を越えて尽くさないと駄目ですからね」と、ルークが失笑気味に言ったのち。

「――先代アルミスの力を刻み、新たな乙女が当代のアルミスとなり王国に永遠の祈りを捧げよう。

古より伝わる古き術により、汝 栄光の光りをもって世界を照らす――」

宣言通り本来最高神官長が行うはずだった儀式を、他の国の出身である公爵家当主が行う。ルークの言葉に古代魔術が反応し、闇の空間は言葉通り太陽の光に照らされ、美しい白の世界が出来上がる。

「見よ あれぞ世界の始まり。時は刻み輪廻は廻ること、世界の時計の中心ぞ」

白い世界にある白い光。彷徨った洞窟で出口を見つけたような達成感が、優衣の胸にじーんと広がる。だが、それとともに妙な引っ掛かりを覚えた。

なぜ第二次試験で植物問題が出たのか。

なぜ先代アルミスは国王までもこの異空間に閉じ込めようとしたのか。

そして、なぜルークが上級神官としてこの儀式に参加していたのか。

（第二次試験の植物問題。フェルシアさんが用意したものとしても、何で27問目で……？ 彼女はとくに一位獲得で、早抜けをしているというのに……）

（先代アルミスは国王を殺そうとした？ 自分の今ある地位を守るために？ 本当にそれだけ……？）

（それに、なんでヴィアム王国にいるはずのルークさんが……）

そこまで思っ、あることに気付く。

ルークがここに理由。たしか、ルークと最後に会った時、彼は言っていたではないか。

『公爵家当主が私が出向けば、それなりの対処と返答があるでしょう。それに、国王と面会できるほど実力を持った使者は、ここにはいま

せんからね』

彼は優衣の身柄の件についての話し合いをするため、バロン王国に来ていた。

（でも、この儀式に参加する理由になってない。しかも独断？ 誰の命令でもなく、自分の意思でこの儀式に参加した……？）

いつのまにか、自分は右腕を押さえつけていた。そこには、応急処置としてくくり付けられた衣がある。

（第二次試験と先代アルミスのことは、あの親子が関連づいているとして間違いないけど、ルークさんが上級神官に紛れ込んでいた理由なんて、わからない……）

最後に。

（ルークさんの、左腕……）

何度か熱を持っていたし、彼の腕ではないかのような動きもしていたし、すごく痛そうで辛そうだった。

激痛に耐えるルークの顔が、頭の中で浮かんではまた消える。そういえば、あの時彼から香った血の鉄錆びたにおいも、そのことに関係があるのだろうか。

優衣の疑問に答えてくれる者は誰もおらず。

ただただ疑問を深めるように、ルークが静かに微笑していた。

17 太陽神の乙女・アルミス 後編 (下) (後書き)

18 (前書き)

詰め込んだせいで文字数が多くなってしまいました……。すみません。

優衣は、この世界で二つの肩書きを持った。

一つは、バロン王国の混乱の元である、魔術師。もうひとつはバロン王国の聖なる称号、太陽神の乙女・アルミスだ。まだ暫定であり、正式な発表には至っていないが、王城内ではある意味すごい噂になっている。

『魔術師であり当代アルミスでおられるあのお方は、きっと天と地を統べる本物の神の娘だぞ!』

その噂はメイルの街を駆け巡り、今やバロン王国中に広まっている。

優衣は自分の右腕にある包帯と、その包帯の隙間から見える太陽の刻印を見ながら、廊下を歩いていた。しばらくして人がこっちにやってくる気配がある。

「――ユイちゃん」「貴様、ここにいたのか」

目の前に現われたのは、神官服ではなく簡略化した僧服に身を包むルークと。

白シャツに黒い外套を羽織ったルカであった。手にはもう一つの黒外套を持っている。

あまりにも異質のツーショットに、優衣はおののいてしまう。

「ど、どうしたの二人とも?」

「先代アルミスを捕獲しに行くのですよ」

「!？ 先代アルミスが見つかったの!？」

ルカが優衣に向かって外套を投げつけてきた。

「ああ。先代アルミスの根城を騎士団が発見した。私は後見人として貴様を連れていく。ルーク殿は国王に正式な謝罪をしに行くそう
だ」

外套をあわててキャッチした優衣に、ルカは皮肉げな笑みを刻みつける。

「――そして、暫定アルミスとして、貴様を、正式にヴィアム王国に嫁がせるためにな」

「ぶっ！」

優衣は思いっきり噴き出した。ルカが思わず一步身を引いたのが気配で察せられる。ルークは優衣と視線を合わせ、「大丈夫ですか」と尋ねてきた。

「嫁がせる!？ それって、どゆこと？」

ルカは自身の顎を撫でながら「ああ」と余裕たっぷりな笑みをうかべ、優衣に言った。

「正式には、嫁に行くのではなく、貴様が妹になるんだがな。約束をしているんだろう？ コウリ殿の妹になると。だから、暫定^貴アルミスがヴィアム王国に行くかわりに、ヴィアムはバロン王国との交

渉を吞む、というものだ」

見方を変えれば人質だろうが、ルークたちがいるので違うと思う。しかし暫定アルミスという身の上で、ヴィアムに行っても良いのだろうか。

「国王に正式な署名をもらえさえすれば、すぐにでもヴィアム王国に帰れますよ」

にっこりと、ルークが微笑する。確かに、ヴィアム王国に帰りたいとは言っていた。

しかし、何だろう……。この、変なもやっとした嫌な気分は。アルミスはバロン王国にとって、神様のような存在であるはず、今思えば逆にヴィアム王国に行けなくなるのではないか。

自分が汚名として持つ、魔術師と関係があるのか。それとも、ただ単にバロン王国はヴィアム王国の機嫌を取りたいだけなのか……。

「――まあとりあえず、先代アルミスの根城に行くぞ」

ルカが優衣の横を通り過ぎ、彼の外套が大きくはためいた。



「――どうだ、先代アルミスの様子は」

「ええ。まあ、何故かは知らないけど落ちついてる」

長い廊下を歩く。前を歩くのは騎士団長マキとルカ。後方を歩くのは優衣とルークだ。この大きな屋敷が先代アルミスの根城らしい。

「ちょっと、聞きたいことがあるんだけど……」

「何でしょう」

聞きたいけど、聞きにくい話。

「……あの、どうして、ルークさんが、上級神官に紛れ込んでいたんですか……？」

ルークが静かにこちらを見つめた。その視線が怖くて、優衣は俯く。

「——これは、私の独断です。真実を見極めるため、私はバロンに侵入しました」

罪悪感を滲ませながら、強い決意を感じさせる口調。優衣の声を挟みせず、ルークは強い口調で断言する。

「何を失おうが、私は、この狂った世界を救います。例え——」

綺麗な翡翠の目だった。深みのあるその瞳に、優衣はしばし、言葉を失う。

彼が前を向いているのに、自分は彼の姿に見惚れていた。

（…………ルークさんは……）

決意したもののために、すべてを捨てるほどの気持ちを持っている。

自分とは違う。

自分は自己チューだ。そんな、自分を捨てられるような気持ちなど、持っていない。

「わたしの周りには、どうしてこんなに、キレイな人ばかりいるんだろうな……」

ルークが唇だけで「誰を、失おうか」と言っていたことに、優衣は気づかない。

一番先頭で歩を進めるルカが扉の前で立ち止る。そこに先代アルミスが拘束されているのだと知ったのは、部屋に入ったときだった。

「――ほう。従姉妹ぜんいんも揃ってるな」

ルカが感嘆ともつかぬ声でつぶやく。部屋の奥には、縄でぐるぐる巻きにされた先代アルミスの姿があった。豊かな金髪が血で汚れ、同情してしまうほど醜い姿に成り果てている。部屋の両端には、二人の騎士がいた。真っ先にこちらに気づいたのは、彼女の傍に居た先代アルミスの娘だ。

「……マキっ！　あなた、わたくしたちを裏切ったのね！」

（ええええそういう関係！？　いまの今まで気付かなかった！）

フェルシアは拘束こそされていないが、武器等はすべて剥ぎ取られているだろう。

マキとフェルシアの関係。マキは、ユマキスカル・バイトンと呼ばれている。そしてフェルシア・バイトン。そう。マキは騎士であ

りながら、貴族の出身なのだ。名前は聞いていたのに、今まで気付かなかった自分の情けなさに泣けてくる。

「私は、騎士団長としての仕事をやったまでよ。たとえあなたが、私の従姉妹だとしても。家族だからって、不正を行うことはしないわ」

ごもつとも。

「……………せっかく、お母様に頼んで、予言をしてもらったのに……………」

「マキ—————全て吐かせろ。起訴はその後だ」

「わ、わかってるわ」

ルカの口調は冷淡であった。口端だけで笑みをつくっているのが見える。

（どこのサスペンス劇場だ…………）

「フェルシア。すべて話してちょうだい」

マキが切羽詰った顔で言うと、フェルシアはその場に崩れ落ちて、静かに話し始めた。懺悔というよりは、諦めのような口調で。

「…わたくしは、お母様に予言をしてもらった。その予言で、アルミスになれる人が、三人にまで絞られる……。そのなかには、もちろんわたくしがいたわ。すごく喜んだ。だから、残りの二人を第二次試験で潰して、わたくしが確実にアルミスなれるよう仕向けた。三人の中の一人に、あなたがいたのよ」

「えっわたし!？」

思いもよらない言葉に、優衣は瞠目する。

……第一次試験に行っただけでも奇跡なのに、さらに奇跡でここ
でまた奇跡だ。

(やっぱりわたしって悪運が強いのか……)などと、まったく関係
無いことを考える。優衣は自分がアルミスになったのは何かの手違
いだと思っているから余計だ。

「あなたの指輪を貴族や王族が見れば、あなたが異世界の人間だっ
てことがわかる。だから、課題科目である歴史以外を出せば、あな
たが答えられる可能性は極端に低い。でもせっかく、植物問題を途
中から混ぜたのに、一問しかそれが出てこなかった。そのせいで、
なんとかあの子は落とせたけど、あなたが二位なってしまった。わ
たくしの妹は、四位という成績……!」

それとともに、見えてきた情景がある。第二次試験で、途中まで
二位だった大商人の女の子。あの子が、予言に出てきた三人のうち
一人だったのだったのか。つまりは、予言に出てこない自分の妹を
二位にさせ、自分が確実にアルミスになれるよう仕向けた。

ひっそりと唇だけで、ルークが笑った。

「――ああ。その問題集、まさかとは思いますが、これですか？」

「!」

ルークが懷から取り出したのはとある上質紙。コピー用紙にも見
えた。

「ほお」と、隣で楽しげにつぶやいたルカとは対照に、ルークは紙をペラペラとめくりながら話を続ける。

「課題科目は歴史のはずでしたから、おかしいと思っていたのですよ。貴族の力を持ってすれば問題をすりかえることも可能ですが、さすがに試験施行の一時間前では無理だったようですね。まあ一枚だけ試験に出てしまいましたか」

「あの試験官………っ！」

あの試験官は植物問題が出ようが何だろうが、すぐく事務的で動揺が無かった。たとえ金で雇ったとしても、手元に植物問題が一問しか無ければ、それだけを言うほかないだろう。もしアドリブで問題を作ってそれがバレたら水の泡だ。

「……そのあと、あなたを第三次試験で潰そうと考えたわ……」

（えっ？ まさかそこまで？）

執念深さにびっくりだ。

「あなただけを狙うと疑われるから、後半の列の乙女は全員冷水の中に体を入れさせた。どうせ、運と技量だけで選ばれたような、庶民だったから」

そうか。だから、101人の乙女になるかもしれない乙女たちも関係なく、あんな冷たい水の中に入れさせられたのか。マジで風邪引きそうだった。

「そのあと神官に頼んで、あなたを派手に泉に突き落としてやるつ

もりだったのに。あなたのような者が神官として紛れ込んでいたなんて……！」

そういえば、なんでか足を踏み外しかけてルークに助けられたな。自分の不注意だと思っていたが、まさか神官に押されていたとは。彼女は丁寧語を殴り捨て、続ける。

「…そのあと、わたくしはお母様に頼んで、「まもりいし戍石」を奪ってもらった。でも、……わたくしは、あなたを別空間に閉じ込めておくだけで良かった。お母様が「まもりいし戍石」を使って、わたくしもろとも全員を閉じ込め、騒ぎを起こさなければ。

でも、結果的には、あなたが選ばれてしまった」

（……まさか、わたしがあんな本の世界みたいなパラレルワールドに放り込まれたのって、そのせい？）

それは納得がいく。しかし、ルークも一緒にパラレルワールドに入り込んだのだが。

（んー？ ルークさんは、まさか……また別の理由？ それとも、自分から……？）

ルークが自分のことを知っているので、方法は知らないが優衣を追いかけてきたという具合なのか。果てや、また別の理由なのか。

「あとの話は、本人に聞いたほうが良さそうね」

マキは前に進み出て、フェルシアの母親である先代アルミスに近づく。

「あなたはなぜ、代々のアルミスとしての責務を果たさず、101人の乙女たちを《最聖域》に閉じ込めたの？」

事情聴取の現場を見ているみたいだ。

「わ、わたくしじゃありません！」

先代アルミスは顔を上げてそう叫んだ。その表情に邪が混ざることはなく、本心であるように見える。

「あなたがたも知っているはずですよ！ 王城にある三つの聖域のうち《最聖域》は、「戍石」で空間の最終補正、支配を行っています！ですが、「戍石」である空間を完全に支配することはできません。わたくしのような微弱な魔力で、あの空間を支配することなど到底不可能でございます！」

ルカが密かに眉根を寄せた。

「それ、ただ単に魔力を偽っているんじゃないの？」

マキは静かに言った。そうれはそうだ。魔力を感じられない我々にとって、先代アルミスの言葉を信じるしか魔力の量はわからない。彼女は口先だけで、本当は多量に魔力を持っているのではないかと、マキは疑っているのだ。

「そ、それはそうかもしれないんですが。わたくしは、別にアルミスの代を渡したくなくて、それを行ったわけでは……」

語尾の音量が徐々に小さくなる。勢いが消失したあと「なあ」と

ルカが久々に口を開いた。先代アルミスは、絶望しきった目で彼を見上げる。

「貴様、どこかで赤黒い蜘蛛に出会わなかったか？」

（はあ！？ いきなりまたそんな関連性の欠片もない言葉を？）

いまは、先代アルミスの事情聴取をしているのだ。あまりにも関連性の無い質問に、先代アルミスはもちろん優衣までも大口を開けてルカを見上げる。

「……確かに、以前赤黒い蜘蛛に腕を噛まれましたが、それが何か？」

「いや。単なる興味本意だ」

ルカは密かに、口もとに笑みをうかべた。意味ありげな笑みを見ていたのは、優衣——だけではなかった。ルークも横目で彼を見ていた。さぐるような瞳が、急に細められて視線を先代アルミスに戻す。

「——まあとりあえず、試験問題のすり替え、稚拙行為、はてや暫定アルミスへの暴行。これらすべては犯罪行為だ。親子共々、＜裁きの館＞に連行しろ。判決は裁判官が直々に下される」

マキは彼に振り返ると、小さく頷く。

「先導は私が取る。＜裁きの館＞に、連行よ」

「はっ！」

なんとも爽快なスピーディさで二人の騎士は、先代アルミスとフェルシアを捕縛した。マキは軍装を翻して扉を開け、この部屋から出て行く。

（か、かつこ良すぎるわマキちゃん——！！）

女刑事が次々と凶悪犯の捕獲に成功するドラマを思い出し、優衣は感動のあまりマキの背中を見送ってしまった。

「一件落着と行きたいところだが、次の目的地は王城だな」

「それってまさか……」

ルカは部屋から出て、外套をなびかせながらちよいちよいと指を折り曲げる。まるで小さい子を招くかのように。

「ああ。出国嫁入りまえの娘の話を、私保護者はちゃんと締めなくてはならないからな」

ルカは当たり前かのように、そう言ってみせた。

1 (前書き)

何かを食べながらこの文章は見ない方が得策です。

優衣は大きく大きく大きく、おおーきく息を吐いた。目の前にあるのは、紅茶。しかも最高級のロイヤルストレートティー。見た目からすればとても美味しそう。しかしそれは？見た目？であって本来の？味？ではない。

「の、飲まなきゃ駄目ですか……？」

はい、と笑顔で促してくれたのはルークだ。彼は今だけこの屋敷に留まり、ヴィアム王国とバロン王国の仲立ちをしている。……しかし、まさかここに来てルークの紅茶を飲むことになるとは思わなかった。

いつだったかユエが、ルークは超甘党で彼が口にするものはすべて甘いお砂糖が入っているんだと言っていたような気がする。

（すごく美味しそうなんだけど……）

……死亡フラグな気がしてならない。ルークにソファを勧められたとき、すべてが遅かった。

「どうしたのですか？ 美味しいですよ。ヴィアム王国でも有名な紅茶です」

顔が引きつっているのが自分でもわかる。この紅茶を飲んだ途端魂が抜け出そうで怖い。

「で、できれば、自分で淹れて自分で飲みたいんですけど……」

「いえいえ。私が貴女をお茶に誘ったのですから、遠慮なさらず」

遠慮したいから言ってるんだけど!? という言葉は、ルークに伝わるはずもない。優衣はとうとうルークのキラキラ笑顔に負け、おずおずと紅茶のカップに口をつけた。

(……………よし)

ルークと一緒に一蓮托生はできないだろうが、優衣は死亡フラグを覚悟して、一口、口に含ませた。

「!」

……………一言感想を述べてもよろしいですか？

優衣は押し込むように飲み込み、どうですか？と聞いてくるルークに、笑顔で答える。

「……………来世で会いましょう」

優衣はソファの中で顔を蒼白にして旅立っていった。ああ、三途の川が見える……。来世は人間じゃなくて動物が良いなあ。あつても、ゴキブリとかヤダからね！猫とか犬とか、そっち系でお願いします！ 神様あ！

優衣が気絶したその頃、ルークは静かに優衣のカップに口づけ、それを飲んでいた。

「……。そんなに甘いですかね……………」

はてさて、ルークが淹れる紅茶を普通に飲める人は、現れるのだ

ろうか……。

「こんなところで終わらせられない！」

「ああ、ユイちゃん。起きられましたね」

優衣は三途の川から引き返してきて……ソファから飛び上がった。
ルークは相変わらず、紅茶を飲んでいる。

（…本当に死ぬかと思った）

感想は、甘みが嫌悪に感じるまですごく甘かった。いや現在進行形で甘い。いまも口の中に甘味が広がっている。優衣は手で口を押さえた。どんどん顔が蒼白になっていくのがわかる。

……誰かエチケット袋持ってきて！　ぎゃあああああ。
のどもとまで汚物が登ってきて、優衣はそれを吐き出した。

「…あつ……………うえっ！」

ものすごい嫌悪感が走った。吐いた場所が布を袋にした場所で良かった。

……………えっあ……………。

「っ」

ルークは眉間にしわを作りながらも、汚物を吐いた場所を裾でくるめながら立ち上がる。そう。吐いた場所が、彼の服の上だったのだ。器状にした服に、べつとりと汚物がついていた。

「い、ごめんなさいっ！」

うわぁ高そうな服が！　とか思っている場合ではない。拳で強引に口を拭い、優衣は思いつきり頭を下げた。

「いいですから。口の中にまだ異物があって気持ち悪いでしょう？」

ルークと共に早足で脱衣所へと向かう。優衣はどこかのホテルのような洗面台に向かい合い、口の中の異物を取り除いた。ルークが浴場を仕切るカーテンの開閉の作業をし、中に入っていくのが横目で窺えた。

（よりによってルークさんの服を台無しにしちゃうなんて……………）

もう気持ち悪いとかどうとかでは無くなっていた。冷水が顔にぶつかかり、ひんやりとした水が頬を垂れていく。大きな鏡に、水でびちょびちょになった自分の顔が映っているのが見えた。

「……………あれ、そういやルークさん。服持ってきたのかな……………」

替えの服はあるだろうが、この脱衣所に持ってきたかどうかが疑問だ。

急いで脱衣所に来てたから、持ってきていないような気がする。

「——ユイちゃん。すみませんが、寝室のクローゼットにある服を取ってきてくださいませんか？」

ほらやっぱり。

「はい」

……いったいどの夫婦だよ。

優衣は脱衣所から飛び出し、まるで娘のように何の気もなく寝室に入ってクローゼットを開けた。

……こういうのを見るたびにここが異世界だと言うコトを忘れるよ……。

自動車、というのは道が整備されていないため、この世界にはない。だから馬車を見た瞬間、ここは中世ヨーロッパだと思っていた。だが、違った。

この世界の科学は、ある程度現実と同じくらい進歩している。しかしさっきの車の例のように、この世界にあって現実にはない、現実にはあってこの世界には無いものがたくさんある。たとえば、地下へ掘り進む技術。炭鉱が無いのかこの世界の地下への関心は少なく、石油というものがない。すべて電気でまかなっていた。

「……適当に、これで良いや」

黒ズボンと白シャツを掴み取り、優衣はさっそく脱衣所に戻る。

茶色い籠の中にそれを入れ、優衣はそそくさに脱衣所から出た。

「――……」

ルークは小さくため息を吐いた。まさか自分が淹れた紅茶を吐き出すとは思っていなかったから当然だ。着るのも面倒な僧服を上半身だけ脱ぎシャワーの蛇口を捻り水を出す。

すべて電気で湯を沸かしているから、温水が出てくるまで時間を有した。

「……………この左腕……」

彼女にはこれを知られたくはなかった。いや、怖かった、という

のが心情として妥当であろう。ルークは自分の左腕を見下ろす。我ながら滑稽な図であった。大きな蜘蛛が腕に巻きついたような図に見える、この呪いが。彼は左腕を流れ出る温水の中に押し込んだ。

……消えない。

洗濯はこの屋敷の使用人がやってくれるだろうから、この服を洗う必要は無い。

汚れならある程度洗剤で落ちる。が、この呪いだけはどうやっても消えなかった。

「ユイちゃん……………。私の料理を食べて吐くという行為をしたのは、貴女が初めてですよ…………」

……ユエでさえ頑張って呑みこんで、コウリは一時間起きなかったのだ。

ルークは濡れていない右手で、右耳の中にある硬いものに触れた。

「――あつ、大丈夫だった？」

優衣はルークの顔を見て――そして胸元に集中してしまった。脱衣所から出てきたルークは、確かにいつもとうってかわってラフな格好である。それは良い。自分が彼の服を汚してしまったのだから問い詰めることは出来ない。だがしかし……。

「……………どうされたのですか…………？」

「ううん。別にどうってことはないですけど…………」

（――ルークさんって、見た目はすごく美人なのに、やっぱり男の人なんだね）

実はというと、ルークは本当は女性なのではないかと疑っていたのだ。胸元を見てしまったのは、露出していたからではなく胸があるか無いかを見極めるため。いつもは簡略化した僧服を着ていたせいでわからなかったが、加減よく引き締まった肉体は女性としてではなく男性としての美がある。

「——ルークさんって、性転換したことある？」

「は————？」

ルークの目が点になった。言うまでもない。

1 (後書き)

「招待状か……」

彼の手の中にあるのは、王族の紋章付きの金の手紙だ。開封はしていない。しかし、この金の手紙から見ると、招待状ということは一瞬で察することができる。

黒上着を羽織りなおし、ルカは手紙の封を丁寧に、それも素早く切り、中身を拝見した。

内容は簡単だ————舞踏会への招待。第三王子ジェルの婚約成立のお祝いだろう。王城の二級騎士である自分が、王族と貴族を集めた舞踏会に招待されるわけがない。が——

「——宰相め、養子になるつもりは無いというのに……」

国王の実質的補佐官であり、バロン王国で一番の賢者を呼ばれる称号、それが宰相だ。あのナナフシ宰相の計らいだろう。

もちろん行く気などさらさら無かった。しかし、王族の紋章付きの手紙を送られてきては、断って何か言われるのも面倒だ。

「細胞組織を完全に偽ることは無理か……」

自嘲げに呟き、丁寧に手紙を折りたたんで廊下を歩き出す。



「ねえルークさん。これ飲んでみて」

優衣は自分でもわかるほど目を輝かせて、ルークにティーカップを手渡した。

ルークは「何ですか?」という顔で、ティーカップを眺めている。ちよっとした悪戯心だった。砂糖の入っていない紅茶を飲んだルークが、どんな反応をするか。

「っっ!」

「えっあっ?」

すごい早さだった。ルークが紅茶を口に入れ、洗面台まで走っていくまでの時間、約3秒。そしてまたこっちに帰ってくるルークさんのあの薄ら寒い笑顔。怖い。怖すぎる!

「ユイちゃん」

「は、はいい?」

ルークは逃げる暇を与えず、優衣が座るソファに手をついた。美麗な笑顔、もとい薄ら寒い笑みのまま、顔を近づけてくる。

「あれはどういう見ですか？」

「ひい」

奇妙な声を上げて優衣はおののくが、ルークの笑顔から逃げられることはない。もし悪戯心なんて言ったら、何されるかわからない。最終的には生体実験にかけられてしまう。

「ど、どどどどうしたんですか！　へ、変なものでも入っていましたか？」

目を合わせまいと視線を動かすが、彼の真っ向からの視線におどおどしてしまう。

「いえ。特に変な物は入っていませんでしたが、あまりにも……」

——苦ったのです。と。

……………。

……………。

（わ、かる、気は、する、けどさっ！）

まさか砂糖を入れなかっただけで苦いというのは、彼の味覚はどうなっているのだろうか。

「次は、甘くしてくださいね」

「は、はあ……」

一瞬だけ曇った表情をしたルークに、優衣は複雑な心境のまま頷きを見せる。

「――だって死ぬかと思いましたから……」

……本音がこぼれた！

超甘党のルークにとって、甘いものは命のように大事らしい。いやそれ以上。

「そうだ。これのお詫びだと思って、私と一緒に舞踏会に出てくれませんか？」

「丁重にもものすごく嫌と言います」

即答だった。自分でも丁重ではないと思っているが、一応つけておいた。

ルークは数回瞬きをして、遠くを見るような目で口を開く。

「…………。そういえば、貴女は私の服を汚したのですよね？」

「ぐっ」

彼の服をぐちゃぐやにしたのは優衣だ。

「私に砂糖なしの紅茶を飲ませたのですよね？」

「ぐぐっ」

彼に悪戯を仕掛けたのは優衣だ。

「行きますよね」

「はい」

ここで素直になったのも優衣だ。ルークは小さく笑み、優衣から離れる。

「舞踏会というのは、第三王子ジェル様の婚約が成立したお祝いだそうです。国王陛下から直々にお誘いを受けたので、相手役として貴女が適役だと思ひましてね」

……やっぱり断って良いかな……？

優衣は小さくそう思った。

「何でわたしがルークさんの相手役なんですか？もうちょっと相応しい相手がいるんじゃないですか」

本音はと言うとメンドくさいからなのだが、それは口が裂けても言えない。

「ああそれですか。理由は二つありますよ。私が貴女を連れて行きたいのと、会場に女性を連れて行くと厄介な事になりますからね」

（それってわたしが女に見えないって言いたいの？）

反応したのは前者ではなく後者であった。

「まあ何はともあれ、私からのお願いです。舞踏会に出てみません

か？」

懇願するような切実な表情。再び詰め寄られ、優衣はつんのめった。

「は、は、は、は」

「は？」

美しい顔が笑えるほど近くにあって、中々言葉に表せない。彼のまつげの数を数えてしまいそうになった。

「は、い」

肩の前に出し軽く結った銀髪が、優衣の頬にかかる。にこりとルークが微笑んだ。

「ありがとうございます」

なぜそんなに嬉しいそうなのか、優衣には理解できない。舞踏会とやらに一緒に行くだけなのに……。



美しい薔薇が一輪。棘抜きしないと持てたもんじゃないが、大きな紫の薔薇が執務机に飾られている。良い匂いだ。甘い甘すぎな

い香り。彼は薔薇のなかでも紫が好きであった。

「まったく、全部仕事をおしつけるとは……」

さつきから何回言った台詞だろう。数えてみれば74回なのだが、そう言いたいと思うほど無茶難題を押し付けられていた。

黒髪。きっちりアイロンのかけられた燕尾服を身に纏って、空色の瞳を持つ青年はボールペンを指で回した。執務机には大量の署名と報告書がある。

「わたしもユイさんのトコロへ行きたかったな」

惜しむように自分の唇をなぞり、ボールペンの芯を出す。サインを書くだけなのに何時間もかかるとはここは地獄か。もとい自分から望んだ職業なのだからしょうがない。伯爵家を救う手立てはこれしか無かったのだから。

ノックが響いた。誰だろう。

失礼致します、と入ってきたのは覆面姿の女官だ。

「お客様がいらしております」

コウリの留守でお客様？　しかしそこに女官がいるのだからその事実は覆せない。もともとこの王宮にお客が来ることはないのだ。国王の計らいでコウリに用がある者も、すべて王都の宮殿に集められ書類としてこちらに送られる。

お客様ということは、国王が特別に許した人物か、あるいは……。

「――この部屋にお通ししてもよろしいでしょうか」

「この部屋？　ああ。構わないが」

女官はそそくさに扉を開けてお客様を迎えに行こうとしたが、扉の前にそのお客様がいたのか驚いた表情をした。「ちょっと通してもらおうね」お客様が部屋に入ってきた。

「あつ、執事」

「って、執事じゃない！ 断じて執事じゃない！ どうしてわたしがあんなガキの世話をしなくちゃなんだいんだ！」

入ってきたのは青髪碧眼の少年だった。黒いジャケットを着ている。

「お客様っ！」 「ああ大丈夫。キミはもうお下がり」 少年は視線で女官を制し、退席を促した。女官はユエを見つめるから、ユエは「下がれ」と言う。

「キミほんとに執事じゃないの？ 燕尾服着てるのに？」

「だーかーらー、執事じゃないっ。ただの秘書兼補佐役だ！」

何故かこの少年と話すと調子を狂わされる。

「同じなんじゃない？」

……確かに。

ユエは心の中で（落ち着け。これは相手の策略だ）と自分に言い聞かせ、青髪碧眼の少年と向き直る。

「それで、おまえは誰だ？ わが王宮に何のようだ」

「ああそういや、自己紹介がまだだったね。

——ボクはワユルア。大国ヴィアム王国に不法侵入、兼、王宮へのお宅訪問。国籍アンド戸籍不明、性別不明のワユルアさ。よろしく」

しばらくの沈黙があった。居るはずの無いカラスがエコー音で鳴いている。

「不法侵入？ 国籍と戸籍不明？ あと性別不明？ それどういう意味だ？ ヴィアム王国の関所を破れると思っっているのか？ 国籍と戸籍など、国外であろうが簡単に調べられる。町外れの村人ならともかく、おまえはどう見ても村人Aには当てはまらないだろう」

ユエは頭を押さえた。おかしなお客様だ。病人の寝言なら理解できる。

「ええ？ ホントに信じてないの？ ヒドーイ。女の子には優しくするものだよ？」

「信じない…………——え、女！！？」

これは驚きだ。見た目からしてどう見ても少年にしか見えない。これで中身が女とは、どういう神経をしているのだろうか。

「ボクって、女に興味は無いよ？ まああんまり男にも興味ないけどね。でも中身はちゃんとした女だよ。まあ戸籍不明だからこれといった証拠も無いんだけど」

可愛らしい笑顔をうかべ、「さて」と少年——いや少女が、話を切り出す。

「でえ執事君」

「執事じゃない」

「まあかたいコト言わないの。——えっと、別に王子に会いに来たわけじゃないんだ。用があるのはその秘書。あっキミじゃないからね執事の………名前何？」

「だから執事じゃない！———秘・書・のユエだ」

「そうそう。だからキミじゃないってば。用があるのは秘書。執事じゃないよ」

「だーかーらー！」

「で、その秘書はドコ？ 王子が外出中でも王宮に居るよね」

ユエは少し考える振りをした。ルークはバロン王国と交渉のため外出しているが、オウリとの約束である十日間を過ぎても戻ってきていない。行方不明ならいつものことだから、そのうちフラリと帰ってくるだろう。

「居ない」

「秘書居ないの？ 執事は居るのに？」

ユエの額に怒りをあらわすシワが刻まれた。怒りマークというやつだ。

夜。舞踏会に集まった人々は王族かバイトン家のみだ。異様とも思える優衣の姿は、何やら変に目立っていた。

「あれって当代アルミスですわね？」「そうですわね。ですが、なぜこのパーティに？」という婦人方や。

「あのお方が二つの顔を持つユイ・ヒサキ様だ。なんとも可愛らしい姿をしておられる」「そうですね。太陽神の乙女・アルミスと、魔術師という面子。不思議なお方だ」

優衣は自分のドレスを眺めた。白。白のゴスロリ。うん……。

「——これって本当に似合ってます？」

優衣はルークを見上げた。彼はにこりとしながら「似合ってますよ」と言う。ルークはいつもどおり簡略化した僧服だ。

「そうかなあ」

太陽神のアルミスという肩書きにしては、顔が幼すぎるし。だいたい、まだ「暫定」なんだけど……。太陽神の乙女の証との契約って、いつごろかまだわかんないし……。

「——おっと、ちょっと失礼するよ」

「へっ」

「貴方は…」

おとがいを捕らえられ、優衣はぽかんと男を見上げる。大きくて武骨な指が輪郭を撫で上げ、背筋に寒いものが走った。

「うん。本物だ。まさか魔術師がアルミスになるとは思わなかったから、びっくりしたぜ」

優衣の視線を捕らえて放さない、猫科肉食獣を思わせる金色の目。サラリとした赤褐色の髪は短く刈られ、魔的なフェロモンを感じさせる体つきは長身。ニヤニヤと笑む（見た目）ホストな男は、隣に立つ銀髪の麗人を見やって軽く礼をとった。開いたシャツの隙間から焼けた肌が見えたが、大きな火傷の痕が見えた気がする。

「あんたと会うのはこれで二回目？ 当主」

この差は何だ。あまりにもルークの麗容と、第一王子との差が違いすぎて、超異形なツーショットだ。バイアムは小さくほくそ笑むと、ルークに近づいた。

「――あんた、＜書斎＞に居たんだろ？ 秘匿書物の部屋に、堂々と」

耳元で囁いたバイアムに、ルークはきつく目を閉じ「居たのですか」と、小さく言う。バイアムは彼から離れ、おおげさに肩をすくめた。

「俺は国王になる気何てさらさらないからね。やるなら宰相だぜ」

（ふ、二人とも何の話をしてるの…？）

会話に入れない優衣にとって、ルークの苦悩もバイアムの憫笑も意味が理解できない。しらずバイアムが続けた。

「まあともかく、だ。この件は内密にしといてやるから、秘匿書物で何を知ったか教えてくれよ」

「……。バロン王国の歴史というようなものだけです。第一王子なら秘匿書物も読めるのではないですか？」

「うーん。そういかなかったからしょうがない。読みたくても俺は中に入れさせてもらえない。親父のせいだぜ。『おまえが入ったら本が穢れるっ』とか何とか」

……正論である。

「じゃあなおチビちゃん。大きくなったらその姿を一目見てみたいね」

両手をズボンのポケットにつっこみ、バイアムは片目をつむって踵を返した。どこへ行くのであるかとも思わず、優衣はすぐルークに詰め寄る。

「——ルークさん。バイアムさんと知り合いですか？」

「え？ ええ。バロン王国の王族の方でしたら、全員面識がありますよ」

「すこ」

さも当たり前かのように言ったルークだが、それがいかにすごいことか優衣にはわかる。優衣は親戚の顔でさえうろ覚えだ。その他になると覚えていないに等しい。

「わたしなんか、横文字の名前なんて中々覚えられないから、けっこう苦労してるんだよねえ英語とか」

……国語の成績の方がヤバイだろう。

「——おまえのような小汚い者が、入ってこられる場所ではない！」

「？」

優衣はその大声に反応して会場の真ん中を見やった。大声を出しているのは太鼓腹したバイトン家の男だ。何やらこげ茶のマントのようなもので身を固めている人物が、無言で立ち尽くしている。

「何だろうね。あの人。てかどうやって入ってきたんだろう」

王城護衛騎士団の警備があるため、あのような目立つ格好では死んでも王城の中に入れないだろう。王城の警備の目をくぐり抜け、しかもこのパーティ会場まで入り込んでくるとは侮れないやつだ。

「……………」

さっきの呟きはルークに言ったつもりだったのだが、彼は無言で

騒ぎの中心へと足を進めた。唇は、楽しそうな微笑が湛えられている。

「――何か言いたそうな顔つきだな。庶民風情が、わしらのような高貴な者の視界に入るなど、言語道断！」

「う、うそ」

何をするのかと思えば、太鼓腹した男はソムリエからワインを取り上げると、今から投げつけるのを分らせるかのような素振りを見せた。あれは止めた方がいいんじゃない、と思って隣にいるはずのルークに話しかけようとするが――――彼がない。

（つかどこ！？ いったいルークさんはいずこへ！？）

立ち止まって辺り見渡してみるが、近くにルークの姿が無い。もしかしてと思って前を見れば、ルークが太鼓腹の男に近づいたその瞬間であった。

「――私の推測からするに、もしかして貴方は、そのワインを彼にかけるおつもりですか？」

落ち着いた、それも論すような響きで、ルークは太鼓腹の男に言う。太鼓腹の男はルークを見て驚いたようだったが、すぐ傲慢さを取り戻し、横柄に告げる。

「何か異論でもありますかね。あなたもわしらと同じ貴族でしょうが」

「いえいえ。そういう意味ではありません。もし彼が本物の庶民で

あったのなら、私も余計なことに首を突っ込む気などありませんので」

にっこり笑顔のルークに対し、太鼓腹の男は訝しげに眉根をひそめる。が、すぐ彼に話していても意味ないと考えたのか、ワインを振り上げた。

（危ない！）

ワインがそのマントをかぶった人物に当たる——よりも前に。ルークが、細腕であの太い贅肉のたまった腕を、受け止めた。まるでその光景は、マントをかぶった人物を守るかのよう。

「どう致しましょうか。この貴族。父上に頼んで、潰してもらいましょうか」

ルークは片手でその男の腕を掴みながら、冷淡に後ろにいる人物に話しかける。ざわめきが走ったのは、言うまでもなかった。

（ルークさん！ 何やってんの？）

明らか赤の他人。あの男を止めるのは理解できるが、なぜホームレス的なあのマントの人物を知っているのだろう。意外にルークさんは知り合いが多かったり？ などと思っていると。

「——いいや、潰さなくていいよ。相手はバイトン家。政財界にも顔が利いてるしね。それに、貴族の者たちが庶民をどう思っているか、これでよくわかったよ」

ルークを見てか、あるいは貴族の態度を見てか、彼は感嘆げにつ

ぶやき。

マントを、空中に放り投げた。

一番最初に目を引いたのは、豊かなプラチナブロンドの髪。海のような深い青の双眸。左右対称に整った顔立ちと、かすかに香る薔薇の匂い。大きな白の外套がはためき、青年の威厳と存在感を引き立てている。

「この僕————ヴィアム王国、国王継承者のコウリ・ヴォルス。バロン王国の第三王子ジェル殿下の婚約をお祝いに、ここにまかしこりました————」

（コウリ！）

金髪青眼の青年ことコウリが、会場の全員に見えるように深く礼をとった。

「ひ、ひ！」

太鼓腹の男が、情けない声を上げてワインを落とす。だってそう
だ。相手は王族……しかも大国、ヴィアム王国の国王継承者のコウ
リである。いかにバイトン家といえど、王族にはたらいだ無礼は国
境も越える。ここが、現代日本とは違う文化だ。

ルークは太鼓腹の男の腕を放し、背後にいるコウリに深い礼をと
った。

「——10日間で帰還すると申し上げたのに、それを実行できなく
て申し訳ありません。コウリ様」

確かルークは、オウリに「十日間で帰国する」と明言していたの
だ。

「…そういや、そうだったね。別にいいよ。右腕は大切にしなきゃ」

「……心より感謝いたします……」

ルークの表情は、明らかに罪悪感に満ちているものだった。そして、コウリがこっちを見やる。

「ユイ————っ！ 会いたかったよー！」

……たったいまシリアスという雰囲気音が音を立てて崩れ去った。コウリは優衣に抱きつき、ぎゅうっときつい抱擁をする。

「コウリ様。手をお緩めください。ユイちゃんの口から魂が見え隠れしてます。というより昇天してしまいます」

「ああごめんごめん。つい君の顔を見たら興奮してね。よしよし。可愛い妹に会えなくて僕は寂しかったんだ」

「撫でるなあ！」

「いげ」

思いつきりコウリの頭にチョップを叩き落した。コウリは可愛い顔で、目じりに涙を浮かべている。そんな子犬のような顔しても騙されないぞ！

ゴホンッと誰かが軽く咳払い。

「ええコウリ様。会場にいるみなさまにご説明を」

そういえばルークが言うまで忘れていた。会場のみなさんは、こちらを見て驚愕している。それはそうだろう。いきなりこの会場に、ヴィアム王国の時期国王陛下がいるのだから。いやそれより優衣に対してのコウリの行動（抱きつき行為）が驚愕だろう。

「そりゃそうだね。忘れてたよ」

コウリは失笑し、一步、前に進んだ。薔薇の香りが優衣から離れる。

「——コウリ・ヴォルス。時期国王継承者として、第三王子ジェラル殿下のお祝いに参上しました。そしてバロン王国に、多額の寄付金を奉納することを申し上げ、今後共々、我がヴィアム王国とともに繁栄していくことを心より願います——！！」

白くて大きな外套が、彼の存在を強調するかのように大きくはためいた。その姿を静かに見つめる視線が、三つある。

「はあ？ 迎えに来た！？」

「そうだよ。あの馬鹿親父が婚約の話を持ちかけてきたから、どうにか親父を黙らせようと君を側室にすることにした。本当は妹にしたいんだけど、妹だったら親父を黙らせるにはちよつと威力無いかかって。太陽神の乙女といえば、今ではヴィアムにも広がっている宗教だからね。親父も神の娘を娶るのならと言って、やっと婚約の話を打ち消してくれたんだよ」

優衣はコウリと一緒にダンスをしていた。ステップとか知らない優衣だが、なんとかコウリの動きでカバーされている。コウリは「ユイはもともと資質があるね」と言っていたが、さっきから何回コウリの足を踏んだだろう。その度に見えるコウリの苦い笑顔が怖い。

（あれ……でも何でルカは、わたしに乙女候補に出ろってムチャぶりしてきたんだろ……。わたしが出なかったらアルミスだって違う人だし、コウリの婚約の話が打ち消されることも無かっただろうし……）

それが全て計算のうちだったとは優衣は知る由も無い。またコウリの婚約を打ち消すためだとも。

「――すぐにヴィアム王国に帰れるけど、その前に一緒にハネムーンに行かないかな」

「ぶっ！？」

優衣の足がコウリの足に当たり、危うくこける所だった。そんなことよりいま衝撃的な単語を聞いた気がする。うん聞き間違い聞き間違い。こんな年で耳鼻科なんて行きたくないんだけどなあ。

「ハネムーンだよ。新婚旅行いっとかないと、僕の親父ぜったいうるさいからね。一ヶ月に渡って船の上で過ごすんだ。いいよ。僕だってまだ乗ったことの無い最新型の豪華客船だ」

にこりと王子スマイルで笑いかけてくれる。約束というものもあるし、一緒に行くこと自体は反対ではないのだが。

「なぜ し・ん・こ・ん・りょ・こ・う!？」

「そういう形で行かないと親父が納得しないからね。僕としては妹とのラブラブ家族旅行なんだけど」

「その?ラブラブ?は要らないと思うよ」

ラブラブだけ強調して言ったつもりだが、コウリは「そういうことなんだよ」と見事にスルーしてくれた。

「で、一緒に行ってくれる? 家族旅行」

真摯な瞳。優衣はその瞳に負けて、小さく頷いた。そこまで言うんだっただけ……。

「ありがとう。実はさ、その船に婚約者、まあ今じゃ「元」なんだけど、その人が乗るから、付きまとわれるとイロイロ面倒なんだよね」

前言撤回してもいいですか？

「あっ」

「ほら、よそ見しない。僕だけを見て」

彼の足につまづいてしまった。

「――僕だけを見て。そしたらきっと成功する。僕らは兄妹だろう？」

「そんな兄妹って…」

「偽りでも良いよ。僕が言いたいだけなんだから」
にこりと、切なくも幸せそうにコウリが笑んだ。

「ほんとに、ありがとう」

……「前言撤回」を撤回してもいいですか？

しばらくして曲が終わった。終わってから思うのは、コウリの足の心配。

（足、腫れてないかな……）

何十回踏んだか、自分でもわからない。それを痛いと零さないコウリも中々のやり手だ。

「……よし。宰相に挨拶に行こう」

「えっ？ 何で？」

宰相といえ、骨と皮しか無さそうな人だったような気がする。

「……うちの秘書がお世話になったようだからね」

意味ありげな視線を投げ、コウリは優衣の手首を引っ張って歩き出した。宰相が会場を窺うかのように端っこに佇んでいる。バルコニーに出るか出ないか、くらいの場所だ。

いつも国王の隣に居るイメージがあるが今回は一人である。

「これはこれは、コウリ殿下ならびユイ嬢。パーティーは如何なものかな」

太い白眉のせいで目が隠れ、気の良さそうな男がコウリと優衣を見て軽い礼を取った。

「はい。大変楽しませしております」

「それはそれは良かった。して、ご用件は」

「実は、最近うちの秘書がお世話になっているので、そのお礼と申つて挨拶を」

コウリは若干嬉しそうであった。

「いいえ。そんな挨拶じゃなんて滅相も無い」

「本当に感謝しているんです」

「…そうじゃ、ついでと言っては何だか、うちの息子を紹介してもらっても宜しいじゃろうか」

（息子？）

コウリの反応など待っていないのか、宰相はバルコニーに出てそこに居る人物に声をかけた。壁に体を預けて腕組をし、その場から動かない青年だ。空に浮かぶ月と同じような蒼の瞳が、ゆっくりと開けられた。きッ、と宰相の顔が引き絞られる。

「こっちへ来るのじゃ」

無言で彼がついて行く。

「――……」

（？ 息子って、ルカのこと？ 親子？ じゃない気がするけど…）

入ってきたのは珍しくも正装に身を包んだルカであった。無表情なのに目は嫌悪感を隠した輝きを宿している。いつもは右耳に付けているはずのピアスが、今日は無いのに気付いた。

「王城護衛騎士団、二級騎士主席のルカじゃ。見た目はいかにも無愛想じゃが、腕は確かなもの」

ルカは胸に手をあて軽い礼をした。

「――宰相が言ったとおり、王城護衛騎士団の二級騎士主席を務め

させていたでいる。申し訳ないが、これで失礼する——」

（短っ！ 挨拶みじかつ！）

何も言うコトが無いのか、ルカは優衣の横を通り過ぎていく。何故か一瞬だけ彼の体が揺れた。

「……彼は、確かユイの後見人だったね」

「は？ そ、そうじゃが、それが何か……？」

コウリはルカの背中を見送ってから、独り言のようにつぶやいた。

「……聞くけど、彼は本当に君の息子？」

完全に疑問系であった。優衣も確かに、と思う。

（まず、性格が似てないもん。宰相さんは、見た目どおり穏やかそうなのに、ルカってば性格無茶苦茶悪いもん。ちよっとは、優しくしてくれてもいいのに……）

遺伝というのは当てにならないな、と、優衣は宰相を見上げる。

「……いえ、息子というのは比喻でして、遠縁の子ですじゃ。養子として引き入れたいと願ったものじゃが、彼は頑として受け入れてくれなかった。わしが勝手に息子と呼んでいるだけですじゃよ」

（やっぱりね！）

コウリはふうんと声を漏らした。「どうりで細胞組織が合致しなかったわけだ」と、意味不明な独り言を言っている。

「――じゃあ、また後ほどかがいます。行くよユイ」

また引っ張られる。今日は引っ張られてばかりだ。

（あれ、そういや、ルークさんどこ行った……？）

気がつけば、ルークは会場から姿を消していた。



「ああ居たいた。探したぜ」

ルカは静かに振り返った。静かにバイアムを見定める目は鋭い光を宿している。

ここはパーティ会場からすぐ上の階のバルコニーであった。ここから見渡せるのは箱庭である。薔薇園だ。派手好きな先代国王が好んだ、赤や白や黒やら、バラバラに植えられている。

上から眺めても決して良い眺めとはいえない。絵の具で言えば適当にかき混ぜたような感じだ。

しかし不思議なのが、不快感を感じさせない色使いか…。

「尾行するのに手間取った。しょっちゅう女性に声掛けられるものだから。モてる男はツライね」

バイアムはくずれた襟元を締めながら、欄干に身を預けているルカに近寄る。

今日は新月であるから、空に月は無かった。

「——んで、何でこんなどこにいるんだよ。あんた、宰相のお墨付きだろ？」

バイアムは同じようにバルコニーから異質の薔薇園を見渡す。何も変わったところはない。

すぐにルカが離れるように歩き出した。変わり番子という風に廊下に入っていく。その背中を追ったバイアムが官能的に唇を歪めた。

「そそるねえ」

「……気色の悪いことを抜け抜けと言うな」

立ち止まらずルカがバイアムに視線を投げる。

「いやいやいや。男を抱くほど俺もイかれた精神は持ち合わせてないよ。ただ、何かひっかかるんだよね」

「——それは——」と、バイアムが言おうとした瞬間だった。

「「「そこにいましたの————」」」×10

「「え？」」

見事にルカとバイアムの声が重なった。目を点にして、二人は顔を見合わせる。今まさにルカが通ろうとした廊下から聞こえてきたのだ。

しかもドタバタガーシャーン「あんたのようなブスがバイアム様の相手をできると思って？」「あんたこそ邪魔よこのブスっ」や「わたしのルカ様はどこー？」「誰がわたしのですって!？」という効果音つきで。

「——バイアム」と、ルカが真剣な眼差しで彼の名前を呼んだ。

「おとりさくせん 囚作戦だ——」

ルカは言いざまにバルコニーの欄干に足をかけ、空高く跳躍した。取り残された……いや囚にされたバイアムは、啞然とした顔のあと「ちょ、ちょっと待ってっ！ そりゃないだろ！」と叫ぶ。そのころルカは箱庭に着地して逃走をはかった後であり、すべてが遅かった。

ルークの姿は見えなかったが、それをコウリに聞いてみたところ「ああ大丈夫。いつもの事だから」と何だか意味ありげな笑顔でスルーされた。行方不明になるのはいつものことらしい。

いま優衣とコウリは王城の敷地である庭園を歩き回っていた。

「ユエは？」

「え？ ああユエね。僕の仕事をやってくれてる。全部押し付けちゃったけどユエなら二日で何とかなるかな。まあルークなら一日で終わらせると思うけど」

「へ、へえ、大変そうだね……」

多分いまごろユエは、コウリがやるはずだった書類に悪戦苦闘していることだろう。きっと書類を片付けながらグチグチと愚痴をこぼしているに違いない。誰にかっていえばコウリにだ。向こうで絶対いまクシャミしたな。

「へえ。この街はこの時間帯になると真っ暗なんだね。深夜営業もしてない」

（…24時間営業の店入ったことある？）

田舎に來た都会者の台詞に優衣は率直な感想で周りを見渡した。ここから見える限り街は真っ暗である。この時間帯はすでに店が閉

められているので当然だ。なおこの庭園には照明という物は無いのでここも薄暗い。月明かりで何とか見える程度だ。

「ねえ」

「ん？」

しばらく間があいてから、コウリが話しかけてきた。

「手、繋いでもいい？」

「手!？」

有無を言わず、コウリが優衣の指と絡ませてくる。恋人同士の繋ぎ方ではなく、ただ手を繋ぐという動作に忠実なやり方だ。

「あと今日、君の家に泊まっても良い？」

「#*+@%\$———!?!?!?」

優衣は思いつき吹き出した。当たり前の反応である。そういう意味ではなく、もっと正当な意味で。

「居候人いすぎっ! しかもあそこ家じゃないし! 私物じゃないし!」

「ああそういえば、あそこって(仮)孤児院だったよね？」

「ま、まあたしかに、正当な孤児院じゃないけど。王子が泊まって良い場所じゃないような…」

「カタイこと言わない。ね？ いいでしょ」

「良いのか、本当に……」



「……何か、また増えてるな……」

休憩所、というのか、ソファがたくさん並んでいる場所には、いつもとは違う顔があった。

ルカは疲れた顔で額を押さえた。黒外套を脱ぎソファに掛ける。いつもは彼一人のはずなのに、優衣にべったりな隣の国の王子やら、それを見守る秘書やら、玩具で遊ぶ子どもやら、その子どもをあやしなながらもコウリたちを見て顔を赤らませる使用人やら。

「――あつ、おかえり。これ食べたら？ 美味しいよ。ルークさんのだけ甘いけど」

優衣は憔悴した顔で帰ってきたルカに詰め寄り、クッキーを見せた。

「私はいらん。勝手に食べてろよ」と、ルカは眉も動かさず優衣の横を通り過ぎた。

「ええ？ 美味しいのに」

ルカは一人用のソファに座り、一息つく。

「――で、なぜこんなに子どもがいるんだ？」

「ああ僕が呼んだんだよ。みんなでクッキーを食べないかってね」

コウリは使用人たちが作ってくれた大量のクッキーを、みんなで食べないかと言っていたのだ。仕切りの無い隣の部屋には、年関係なく子どもたちが遊びまわっている。いつもは違う部屋で遊んでいるから、この休憩所は応接室として役を担っているので、ルカの目には大変珍しく映った。

「…。子どもが好きなんだな」

「子どもは素直だからね。可愛げがある。ねーユイー？」

優衣は話を振られ複雑な面持ちで沈黙した。コウリは多分褒めているのだろうが、絶賛思春期な自分にとって複雑だ。

「……ああそうそう。僕ここに泊まるから」

「……………それ、本当に言っているのか」

「うん。僕は本気のマジで言ってる」

ずずずと優衣が飲んだ紅茶がエコーに聞こえた。
ルカが立ち上がる。黒外套を掴んでいるところを見ると、部屋に

戻るつもりなのかもしれない。

「――ご勝手に」

「……あ、行っちゃった」

優衣はクッキーを一つ食べ、呆然とつぶやいた。

「――ねえユイ。ちょっとルカ殿にこれを渡してきてくれないかな」

「ん？ 何で？」

（てかルカが出て行く前に渡したら良かったのに）

コウリから渡されたのは綺麗に折りたたまれた紙である。ルークが静かにそれを見定める中で、優衣はコウリを見上げる。

「お願いするよ」

「べ、別にいいけど」

なんのために？ とはあまり思わず、優衣はソファから立ち上がった。

「なか見ちゃ駄目だよ」

「そ、そんなずるいことしないよ！」

ムキになってルカの部屋に向かう優衣を微笑ましく眺めながら「さて」と、コウリは自分の秘書に視線を向けた。使用人たちには「

ちょっと話をするから」と言ってこの場から立ち去らせる。

「ユイには離れてもらった」

「君とは久しぶりに話をしたかった」

「君も僕に、話さなければならぬことがたくさんあるだろう？」

———
ねえルーク？



ノックを数回しても、返事は無かった。てか部屋ここで合ってるよね？ 扉とかどの部屋も同じだからわけ分かんなくなる。

「失礼しまーす」

部屋を覗いても特に人の気配なし。やっぱいないのかな……と後ろに振り向いて。

「び、びっくりした!! いきなり後ろに立たないでよね…っ!」

「それはこっちの台詞だぞ。なぜここにいる」

大の大人……しかも男の人に背後を取られて驚かない人がいるだろうか。

「はいこれ。コウリから」

優衣はルカに紙を渡した。ルカはそれをしげしげと眺め、顎に手を添える。

文章が少なかったのかすぐに紙を折りたたむと、黒い手袋のしわを伸ばしながらルカは言った。

「確かに受け取った、と、コウリ殿に伝えてくれ」

「わたしは配達屋じゃない…」

彼は軽い笑みを浮かべて優衣の頭をくしゃりと撫でる。黒い手袋の感触が、くすぐったいような、変な気分だ。

ルカは扉を開け中に入ろうとするが、自分が立ち止まっているのを見て中に入るのを止めた。

「どうした」

扉に手を置きながらルカは優衣と視線を合わせる。覆いかぶさるようなその仕草に、優衣の視線がある一点に集中した。首元……である。

「……あれ……」

細い銀鎖がシャツの隙間から見えたのだ。いつもは首飾りなど付けていないのに、なぜか今日はある。いつもは紫のピアスをしているのにそれが無いことと、何か関係があるのだろうか。だいたいなぜ耳飾りや首飾りなど付けているのだろう。ここが重要だ。

「その銀の鎖、最初からつけてた？」

「……。いや、今日が初めてさ。…………よく気付いたな」と、ルカが渋面ながらも言う。

「さっきだけどね。——てか前から思ってたんだけど、何でピアスとかつけてるの？ オシャレ？」

「…………そういう感じなら、買わない。簡単に言うと、つけさせられているんだ。自分に」

「は？ どういう意味？」

優衣は深く考えていた。腕組してうつむく自分の姿は、やたら考え〇ヒトに似ているだろう。

（自分につけさせられているって、意味不明。国語に関しては理解力ゼロなんだから、勘弁してよ……）

「見つかったらまずいから、王城に行く時は外している」

優衣は「誰に？」と問い返した。推理することなど到底不可能だし。

ルカは半ば苦笑気味で「当ててみろよ」と言ってきた。

「……まさか盗品？」

素直な疑問だった。素直すぎる気もするが。

「そんなわけないだろ。貰い物だ」

「うーん。てかピアス、人に見られてあなたに何の損があるの？
見られたくないんだったら、外しちゃえばいいじゃない」

いつもセットで付けている黒い手袋と紫のピアス。どちらも肌身
離さず彼が付けているものだ。

「落ち着くんだ。付けてると」

「へえ。で、誰から貰ったの？ ついでに誰に見つかったらヤバイ
の？」

「……。宰相」

「えっ。どっち！？ いまの答えどっち！？」

もし宰相がルカにピアスをあげたのだとしたら、などと考えてし
まう。

「なにを考えてるんだ、馬鹿。――選りすぐりの職人から紫玉しきよくを用
いて作った耳飾りで、せっかくだから使ってくれないかと言ってき
たんだ。宰相には色々世話になっているから、仕方なく……」

「それで、誰に見つかったらヤバイの？」

「……………。母親」

「あの会場にお母さん居たの！？ マジ！？ もっと注目しておくべきだった！ ショック！」

口が滑ってしまったのかルカは驚いた顔になっていた。
なお優衣は、アルミスの事件の一件で？母？という単語を聞いてもトラウマにならなくなった。すごい成長である。

「…何故注目するんだ？」

意外にも不思議そうな顔をするルカに、優衣は「だってそうでしょ！？」と勢い込んだ顔で言う。

「どれだけ性格の悪い女の人か見てみたいもの！！」

……………口が滑ってしまったのは仕方ないことである。

5 (後書き)

お早いことに第三章完結です。さっさと第四章に行きたかったので
す！

1 (前書き)

引用、参考資料 飛鳥？

いまわたしは、多分一生働いても乗れないであろう大きな船の中にいる。

全長は約400メートルと東〇タワーよりも高く、船の中は豪華絢爛という四字熟語そのもの。船の甲板から見下ろす海の波は想像を遙かに超える超迫力で、一番最初は「探検だ!」とはりきっていた優衣でも、夕方になると疲れてきた。この船で一ヶ月を過ごす。まだ一日目なのにもう帰りたくなってきた。

「しかし、この船に乗っているのが三カ国の世界貴族? 平々凡々なのはわたし一人?」

優衣は夕焼けを見つめながら甲板を歩いていた。木の床が延々と続いている。水辺線上にある夕焼けが綺麗だが、何とまあこの人の少なさ。船が広すぎて六千人の船客定員など蟻んこみたいだ。乗組員を合わせても八千人程しかない。

「……うーん。そろそろ戻らないと」

優衣の周りには誰もいない。みんなが探しているかもしれないから戻らないと。そう思っていることと歩いていると、後ろから誰かが自分を追い越し、肩がぶつかった。

「い、ごめん」

「……………」

謝るがぶつかった人物は何も言わない。そのまま通り過ぎるかと思ったが、自分から二歩程度離れた場所で振り返った。夕焼けの光で少女の瞳が赤く光っている。

「あ、あの……」

髪型はおさげ。服装はワンピース。顔立ちは普通だが、妙に寒気が走るような雰囲気を持っている。

「……………」

喋らない。あるいは喋れないのか、目つきも悪い。
年頃は同じはずなのに。

「あなたは誰、ですか？」

やっぱり喋れないのだろうか。しかしなぜずっと自分を見つめているのだろうか。

(……なんか、怖い……)

少女がひっそりと唇だけで笑う。赤い瞳が血のように輝いて、更に恐怖心を駆り立てた。

優衣は走り出した。速く速く。少しでも少女から離れるように。

「――走れば危ないというのを理解しているのかい」

「っわ！」

足が地面についてないと気付いたのはそれから二秒後だった。そろそろスカイデッキの中央にさしかかった部分で誰かとぶつかったのだ。

(ぎゃっ！)

「あ、あああ、ああありがとうございます」

イケメン。

その言葉が唐突頭の中で湧き起った。左目が白い髪の毛のせいで隠れ、大きな丸眼鏡の奥から三白眼みアメジストな瞳が覗く。いっそジャ○ーズに入ってますか？というようなイケメンぶりの男だ。

(この世界のイケメン初めて見た…)

イケメン男子は優衣を降ろすと、小さく笑んで甲板の方に行った。彼が去っていくのを見送り、優衣はさきほどの少女のことを思い出した。

怖くなったから、また走り出す。彼らのところへ。

人々の憩いの場であるスカイデッキ。中央に人工的植樹された木の道と噴水があり、この時間帯ヒトは多くない。歩いていると、目の前でひとの気配がした。

「――ねえキミ。ボクさ、ヒト探してるんだけど。白髪で、メガネかけた人。知らない？」

「わ！」

いきなり優衣の目の前を立ちふさがってきたのは、見る目麗しいイケメン男子であった。

青髪碧眼。すらりとした肢体は少年らしく、高めのソプラノ声を聞けば女の子のよう。

（本日二回目のイケメン！ 今日はどうした！？）

「見かけたら教えて」

そう言って青髪碧眼の少年はそこから立ち去ろうとした。しかしさっきの「白髪」という言葉に反応して、優衣は彼を呼び止める。多分さっきの人だろうか。

「あのさっき、その人が甲板の方に行きましたよ」

少年はこちらに振り返り、にこりと笑んだ。

「ありがと。これから色々関わりがあると思うから、ボクはワユルア・モヴィチ。よろしく、ユイ」

「えっあ、どうも」

少年——ワユルアと言ったか、その少年が探し人を追って甲板の方に向かう。

（あれ、……あの人、なんでわたしの名前知ってんだろ…）

やっぱり、暫定アルミスっていう名前が広く知れ渡ってるからかな…。

優衣は再び歩き出す。エレベーターのボタンを押して中に入った

のと、少年が甲板で探し人を見つけたのはほぼ同時であった。



「いたいた。探したよ」

ワユルアは甲板の先頭に立つ白髪の青年に近づいた。頂上に立つの男のはずなのに、どこかかわいげのある男だ。それはワユルアも知ってる。以前はあのクリームたっぷりのケーキを食べて療養中になったぐらいだ。そのとき大爆笑をしていた記憶がある。…まあそのとき、兄にこってり絞られたが。

「どうした？　ワユルア君。我^{わたし}は海を眺めているだけだよ」

「ふふっ。いい気なもんだねえ。せっかく客船に潜入したのに、何もせず海を眺めているだけなんて。」

面白くない。いっそ派手にしちゃおうよ」

「争いごとは好きではないのだ」

「言うねー。争いごとを起こした黒幕のくせに」

ワウルアが言うと、白髪青年はちろりと睨んできた。

「あなたこそ言ってくれる。中央コンピューターにハッキングをかけてくれて」

「……。それ、ボクじゃないよ」

白髪青年は「何と」と目を見開いた。

この少女が悪戯好きだということは知っている。ちよくちよくコンピューターの情報を盗んでくれるのだ。それだけ技術者として凄いいいことだが、その度にセキュリティをチェックしなければならぬから大変である。

「それはどういふことだい？」

「ボクもね、何回かハッキングを試してみたんだよ。でもね、どうしてもセキュリティが破れなかった。それを誰かに先を越されて、腹立ってんだよね」

ワウルアは腰に巻いたウエストポーチからタブレットを取り出した。黒塗りの機器を彼に渡す。

「これがハッキング時流出の特殊暗号。こんなもん流れちゃ、いくらセキュリティを強化しても破られるよ。個人情報がぎっしりメモられてんだから」

しげしげと白髪に眼鏡の青年がそれを眺めた。

「……。あの時、発信源は割り出せなかったが、ハッキングの処理はエフエムが行ってくれた。ハッキングなんて、あなたぐらいしか

できないと思っていたのだよ」

「やっぱり原因は不明かぁ。中央コンピューターをハッキングするなんて、いったいどんな方法を使ったんだろうね。もしかして内部の人間？」

彼は少し考える素振りのあと「それはありえない」と言った。

「まあそうだろうね。いくら内部の人間であっても、特殊暗号を解析できるのは皇族くらいだし。まあボクは例外だけど、ハッキングできるほどボクのコンピューターはすごくないし、指も器用じゃないしね」

さて、と締めくくる。ワユルアはある男の姿を思い浮かべながら、言った。

「――この船の上、ヤツがどこにいるのか、じっくり探索しようね。皇太子殿下」

「……サイルと呼べと言ったのだが」

サイルは小さく言い、笑った。真っ赤なヤツを探すため、彼らはこの船に侵入してきたのだ。

「街から姿を消した、六番目の赤蜘蛛――」
あかぐも

彼らが思い浮かべるのは、とある実験の失敗により出現するようになった巨大な蜘蛛。六体目はかなりの大物だ。ビットキャップ『永久の眠り』が効かないかもしれない。

もし効かないとすれば、世界は滅亡の危機に直面するであろう――

—

1 (後書き)

第四章は長くなるので豪華客船編と、もうひとつ用意させていただきます。戦闘描写は上手く書けるかどうか分かりませんが、精一杯頑張ります。

ユイーという呼び声で優衣は振り返った。この声はまさしく優衣を豪華客船に連れ込んだ元凶・ヴィアム王国の王子である。

「コウリ。どうしたの？ そんなに慌てて」

「別に慌ててなんか無いよ。ただ、ちょっとユイの顔を見たいなあって思ってる」

客室は10デッキから13デッキ。優衣は10デッキだがコウリは11デッキである。ともにSロイヤルスイートと超豪華な部屋。個室だがもったいないほど広い。

ルームキーは優衣が持っているが、アイカギというやつはコウリも持っている……。いきなり入ってきたのだ、こいつは。

「な、なに？」

いま部屋の中に船員は居ない。つまりコウリと二人きりというわけだ。

真ん中にある小さなテーブルに一人用と二人用のソファ。カーテン越しからは鮮やかなスカイブルーの海と空が見える。

本棚や置物。ツインベット、リビング、ダイニング、バルコニー、バスタブ、シャワールーム。

いっぱいある部屋のうちリビングのソファにコウリは座った。何

をしまおうかと思ってしまふ本棚たちを眺めながら、遠くを見る目でコウリは言う。

「来てくれて、ありがとう」

「は———?」

いったい何を言い出すのかと思えば、いきなりお礼の言葉だった。

「ど、どうしたのいきなり。まさか、頭でも打った?」

「頭は打ってないよ。ただ、そう思っただけ」

優衣は心配になってコウリに近寄った。だっていきなり「病気です」発言なんて困る。

シリアスな雰囲気だと思って油断した優衣の腕を掴み、コウリは彼女を引き寄せた。

「うげっ」

「家族旅行がしたかったんだ!」

すりすりと、自分を猫だと思っているのか顔を摺り寄せてくる彼。

「やあめえてえ」

「止めない。ペットにしちやいたいくらい」

「ひ、ひえ?」

プラチナブロンドの髪が軽やかに揺れた。次の瞬間、ぎゅうと音が鳴るまで抱きしめられた。頬に当たっているのは彼の胸板だけで、圧迫される。

「く、苦しいよ、コウリ……」

「――いっそ、閉じ込めてしまおうか」

「へ？」

手が緩んだと思ったら、真上で官能的なため息がこぼれた。見上げると、南極のような青い瞳が小刻みに揺れている。艶めいた瞳。綺麗だと、思うよりも早く。

「か、監禁は犯罪だよ！ 駄目だよそんなこと！」

優衣はまったく、別の事を口走っていた。色気のへったくれのないその台詞に、コウリは再び、息をこぼす。茨のついた薔薇の、吐息を。

「僕の妹は、どんな時でも謙虚だね。普通の女性なら、喜んで賛同するのに」

「いやいやいや！ だって監禁って、生きてるけど死んでるようなものでしょ？ あれ、生きてる…？ でも死んでる？ あれ、あれ？」

意味の分からない言葉に自分で混乱していると、コウリは薄く笑った。

「なんてこと言ってるんだろうね、僕。最低だよ」

「い、いや、別に、そこまで悪く言っていないよ？　ただ、監禁は駄目だって言っただけだし」

「大丈夫だよ。君を閉じ込めることはしない。傍に居て欲しいんだ」

「コウリ……」

視線と視線が絡まる。二人の鼓動だけが聞こえた。

（あれ……なに落ち着いてんだろ…）

自分で気付く。彼の腕の中で、自分は雛の用に落ち着いているのだ。それがいかに恥ずかしいことか、段々と理解し始めて。

「——って、騙されるか——っ！」

「ユ、ユイ！？　いきなりどうしたの！？」

優衣は勢いをつけてコウリから飛んで離れた。いや、比喻ではない。本当に飛んだのだ。いや、跳んだ？

「危なくそのまま雰囲気を持っていかれるところだった」

「ちよ、どこ行くのユイ！？」

「どっかつ。付いて来ないでね。子どもじゃないんだから！」

コウリの悲鳴のような声も無視して、優衣はばたんと扉を閉めた。

自分の部屋番号「1022」を見やっってから、優衣はエレベーターに向かう。

「ああもう。何かお腹空いてきちゃった。こうなりや、あそこ行くしかないでしょ！」

優衣はガッツポーズをしながら、部屋から出て数十歩程度のエレベーターに向かった。上に向かう矢印ボタンを連打する。ムシヤクシヤしているからしょうがない。

「これからここで一ヶ月過ごすとか、絶対無理……！」

優衣は10デッキに来るエレベーターの動きを見ながら、大きく息を吐いた。



良い匂いがここからでも漂ってきた。優衣は扉の前に立ちノックを数回する。しばらくしてから上着を脱いだ黒銀髪の青年がこちらを見て目を丸くした。

「どうしたんですか。ユイさんが一人で来られるなんて珍しい」

相変わらず料理を作っているらしい。彼の部屋だけはキッチンが

ついているのだ。それより、久しぶりにユエの顔を見たような気がしてならない。英国紳士風の格好を見れば彼が執事だと思ってしまうだろう。なぜ執事服を着ているのに自分が執事ではないと断言するのかわからないが、優衣は遠慮がちにユエの部屋に入っていた。

「ちょっとね。」

——ああやっぱり部屋は変わらないね。それよりさ、どうしてみんな同じ部屋にしなかったの？」

優衣はソファに座り、すぐそこでクリームを泡立てるユエを見上げた。まるで職人だな。

「……ユイさん。あなたは、同じ部屋が良かったんですか？」

泡立てながらジト目するな！

「いやね、わたしが一緒じゃなくて、あなたたちのことよ。だってコウリとかって家族みたいなもんでしょ？　なのに何で同じ部屋じゃ——」

「だ、誰があんな変態妄想狂と一緒に一ヶ月も過ごさなきゃならないんですか！！　絶対嫌ですよ、自分ッ！」

「えっ？　そ、そこまで？」

彼の声が大きくなるに連れて、クリームを泡立てる手の動きが徐々に早くなっていく。

「ええ！　クソ餓鬼はクソ餓鬼で、いきなり銃で撃ってくるわ大切な書類をどこかに隠すわ、とっつっても迷惑しているんです！　変

態妄想狂と一緒になんてもう死にたいくらいですよ!!」

「あっ、クリームが……」

泡立ちを通り越して、もはや膨張しているクリームに気付いていないのか、ユエが早口でまくしたてる。

「ルークはルークで、いつ実験の材料にされるか冷や冷やさせられるんですよ!？」 寝首をかかれたら堪ったもんじゃありません!」

(ユエの腹黒っぷりも相変わらずだけど、そんなことよりクリームクリーム! なんかデカくなってる!)

ユエがクリームの存在に気付いたのは、クリームが空気と化しているほど泡立てた後だった。

「クリームを泡立てすぎた!」

「手伝おうか?」

「良いです良いです。ユイさんは座っててください」

ユエはクリームの後始末を始め、また新しくクリームを泡立て始めた。根性あるな…。

「なに作ってんの?」

「……ケーキ。ルークに先に作らせる前にわたしが作っておこうと思っただけです……」

確かに。ルークに作らせるとどれだけ甘いか身をもって体験した優衣だ。

（ユエだったらむっちゃ美味しそうだなあ）

よだれが垂れそうになるのを抑える。

「いいなあ料理ができて…。こっちなんか全然だよ。ほんとに実技教科は体育以外最悪だし」

「ええそうなんですか？ 意外ですね」

ユエはスポンジケーキにクリームを塗りながら問いかけた。おとお美味しそー！

「そうだよ。家庭科とか、何回黒焦げにしたか…」

「慣れれば大丈夫ですよ。ユイさんも、やればできる子ですから」

おまえは親か、と優衣が顔で言っていたことに気付かず、ユエはケーキの完成（？）により「できた」と顔を綻ばせた。

「？ でもイチゴとかトッピングしてないよ？」

「飾りつけは後です。材料が切れているのをさっき知りました」

「へ、へえ。そうなんだ」

ユエが優衣の隣のソファに座った。すとな、という軽い音が近くで聞こえる。

「やっと二人きりになれた……」

「……。ああそういえば、最近会ってなかったね」

まったく違う意味だとは思ってもせず、優衣はのんきにそんなことを口にする。そんなとき、顎をくいっと指で持ち上げられた。

「ど、どうしたの？」

「話が、あるんです」

覗きこむような仕草でユエは優衣に近づいた。近い気がする至近距離で、ユエは意外にも真剣な口調だ。

「ルークの事なんですけど。アイツ、最近変な言動とかありませんでしたか」

「はあ？　変な言動？」

言いながらも、優衣は色々な場面を思い出していた。

血と鉄さびた匂い。熱を持つ左腕。しきりに右耳を押さえる行動。よく行方不明なる。アルミスの試験に潜入した理由。すごい甘党。実験好き。何でも解剖する。すごいもの作る。

「特に何も…」

「ルークの留守中に少年——じゃなくて、女性がお訪ねになられたんです。」

——ていうか、今ユイさん、完全に隠しましたよね？　何かあつ

たんですか？」

「え？ と、特に、無いよ……？」

実は彼に口止めされているのだ。その理由は謎だが、笑顔だったから素直に頷いてしまった。

「教えてください」

「えっ？ な、何で？」

「……怪しいですよ、アイツ」

息を吐き、ユエは何を思ったのか、優衣から少し離れた。
優しい、柔和な表情を見せ、「やっぱりいいです」と言う。

「あ、わかった」

「え？ 何がわかったんですか？」

ユエの瞳に不安が走った。

「ルークさんの味覚のことでしょう？」

ずこつ、と、ユエの手から力が抜ける。確かにルークの味覚は怪しいと言えば怪しいが、そういう意味ではない。どうやら心配する必要など無かったようだ。

「どう？ 当たってる？」

優衣は自信満々と言った表情だ。無論悪意など無い。

「……まあ、そういうわけですかねえ」

「へ？ ど、どういう意味？」

ユエは意味ありげに笑んだ。

あのあと、適当に話してオチを作った優衣は、ユエの部屋を出た。

「――なるほど。そういう訳ですか」

「どうして出会った瞬間ひとりで納得するかな。わたしまだ何にも話してないんですけど」

銀髪の麗人は艶笑を浮かべてぽんっと本を閉じた。

巨大図書館。世界中の本がずらりと数十万冊と並び、船の構造に沿った扇形の形をしている。貸し借りは自由であり、カード無しで利用できるから便利だ。

（ルークさんの行動ってこういう時だけ分かりやすくて助かる）

ルークⅡ本or実験というイメージがあったのだ。正直非常に助かる。

彼はくすくす笑いながら「独り言ですよ」と注釈を入れた。

「それより、どうなされたのですか？　このような所でお会いできるとは思いもしませんでしたね」

「…わたしが一方的に來たら確実に会うと思うよ。絶対」

優衣は小さく言うが、ルークは軽く笑って本を棚にしまった。本の表紙には、日本語で「ヴィアム王国・大神殿跡地について」と書かれている。

「なにやってたんですか？」

「いえ。ただ単に調べ物をしていただけですよ」

ルークは小さく笑い、また新たに本を手に取った。

「何の本？」

いったいどんな本だろうか。想像してみる。

……何故か知らないが、怪しい闇医術書とか解剖学とかが唐突脳内に出現した。

「！？ 『言語学論』！？ いやああ！ 無理！ わたしに見せないでくださいっ！」

全然違った。国語的なものは見るだけでも鳥肌が立つのに、論文となると更に無理だ。

「………………。…」

ルークは静かに本を元あった場所にしまった。さきほど読んでいた本を見ながら、小さくつぶやく。

「……ホントに語学が嫌いなのですね…」

心底、驚いたような声音のあと、彼は小さく笑う。まるで作ったような笑顔で、優衣に近づいた。

「ユイちゃん。…ちょっとお耳を拝借しますね」

「は、い？」

口を開いた優衣に言葉を挟ませず、ルークは優衣の耳にくちびるを寄せた。

「あまり歩き回らないでいただけますか？ 特にこの船の上では、安易に行動されると監視が行き届かなくなるので」

ぞくぞくぞくつと、背筋に悪寒が走った。

どうしてかはわからない。だけど、頭の中で”危険”という単語が、警報を鳴らしている。足がすくんで動けない。

「……。迷子になると、私達がへとへとになるまで探し続けま
すからね」

(えっ)

さっきまで感じていた、悪寒や、恐怖が、一瞬で消えうせた。優衣と視線を合わせたルークは、微笑をたたえている。

「お願いですから、誰かと行動してくださいね。二人以上で。
変な輩に出会われるのではないかと心配しますので」

「…何その学校帰りの担任みたいな台詞…」

まるで担任の先生だ。いや、ある意味保健の先生の方が似合ったり……。

「本当のことですよ。この広い船内で、貴女が迷子にでもなられたら、結構大変なですからね」

何か言おうとした優衣よりかはやく、ルークが手を握った。
瞬間、バチッと電気のようなものが走った気がしたが、瞬間で忘れてしまった。

「二人以上と、言っておきましたよね」

「えっ？ えええええ！？」

子どもが見たら喜ぶだろうが、自分にとっては恐怖にも近い彼の笑顔に、優衣は自分の予感が当たっていないことを祈る。

「ど、どこ行くんですか！？」

「？ 期待しておられるので？」

「い、いや。そうじゃなくて！」

だいたい、ここに来たのはルークの味覚の秘密を確かめるのであるって、特別他の理由など無いのだ。

「安心してください。解剖はしなくてすよ。ただ……見つけなければならぬものがありますよ」

（『解剖はしないですよ』って、ここ突っ込むべき？）

ルークが自分の手を引っ張るのを他人の手のように見ながら、優衣は小さくつぶやく。

「手、冷たい……………」

彼の手は、まるで氷のように冷たかった。血の通っていない、死人のような。



自分の手から、彼の手が離れていくのを、優衣はぼんやりと見つめていただけであった。

そこに白刃のきらめきがあったことも、ルークが小さく舌打ちしたことも気付かずに。

「わっ！」

人気の無い5デッキの中央部分。オフィス等の部屋がたくさんあるこのデッキは、業務用にしか使われない。だから、人も少ないが

「――抜くなよ。当主――」

官能的な声とともに、首元から娼婦の残り香が微かに漂ってくる。ルークは反射的に抜きかけた短刀を止め、静めるように瞬きを一回。

「貴方とは、よく会いますね……—もしかして尾行でもされていますか」

Baron王国の第一王子であり大の女好きであるバイアムが、自身の赤褐色の髪をくるくると弄んだ。

「いいや。今のは偶然。—それより、今の何？　すごい反射神経だね。それとも、そこに暫定アルミス様がおられるから……か——？」

優衣は反射的に腕を押さえた。

太陽の刻印は今だ消えず、発光こそしていないが、無性に気になる時がある。

自分は名ばかりのアルミスだと思っている。しかしまた、この名があるからこそ、自分はコウリ達と再会できたのだ。だから、感謝はしている。

（まだ暫定なんだし、もしかしたら本物が現れるかもしれないし……）

その間にも、ルーク話を続けた。

「……貴方が、気配も無く私達に近づいたからですよ。警戒しませんがありません」

バイアムは素直に「勘がいいね」と率直に言った。

「武人じゃないが、俺も結構親父にしごかれてるんだ。俺には三歳くらい離れた弟が居たから、修行を今も続けてるんだぜ」

（？ 何かその話、どこかで身に覚えがあるような……）

確か、第二王子は今も行方不明、という話だったような気がする。

「そんな俺を、女みたいなあんたが気付くとは、肝を冷やされるね」

話の終わりが見え始めたからかルークが「通らせてもらってもよろしいでしょうか」と低い声で言った。案外簡単に「良いよ」と言ったバイアムが、片方の壁にもたれかかって彼らを通す。

いったいどこへ行くのか、と、優衣は問おうとして。

「——つとその前に、当主が持つてる物を教えてくれたらな」

どんっと、ルークが壁に叩きつけられる音が、やけに大きく優衣の耳に響いた。一本の腕だけでルークの首を押さえ、軽い拘束状態だ。

「な、何やってんの！？」

いきなり、それも無抵抗な人を押さえつけるなど、信じられない。

「…あんたには関係ないっつの」

「なっ！！ 何よそれ！」

「——ユイちゃん。大丈夫ですから」

ルークと目が合った。

「とりあえず、放していただけますか。そんなにお話したいのなら、どこかで」

温暖な性格からか、ルークは怒りを見せることも無く、静かにそう言った。

「いいぜ」

バイアムが拘束を解くの見やれば、優衣はルークに「わたしも行った方が…」と相談してみた。

しかしルークは、ゆるゆると首を振る。

「時間は取りません。すぐに終わるので、自室かどこかで待っていてください」

「ああ。時間はとらせないつもりだ」

口端が軽く歪ませ、バイアムも言った。挑戦的で、猫のような金色の目が、小さく細められる。

いったいどうしてか、と問う時間も無く、二人は歩き去っていた。

3 (後書き)

(超余談で私事です)

わたしの頭の中では、男性陣が現代世界で教師をしているとなると…。

ルカ	国語教師
ユエ	社会教師
ルーク	保健 or 理科教師
コウリ	数学教師
バイアム	体育教師

うん。リアルに良い。

（こ、ここドコ？）

優衣は辺りを見渡した。ぶらぶらと歩いていると、立ち入り禁止と書かれた看板を見つけたのだ。まるで誰かが通った後のように看板が横に引っ掛けられ、細工の無い鉄の扉だけが優衣の目の前にあった。

「ここって4デッキだよね？」

どうやら奥まで来てしまったようだ。一般人（っていっても貴族だけ）が入れる場所はここまで。あとは専門のクルー達しか入れないだろう。

「で、でも、立ち入り禁止って、……」

そして優衣は気づいた。扉のドアノブが、若干下がっていることに。まさか、と思いつつも、そんなわけない、と思い直しながらも、ドアノブに手をかける。

「あ……………」

思わず声が零れ出た。鍵の掛かっていなかったのだ。立ち入り禁止の看板をつけておきながら、鍵を掛けていない何て無用心。

ただの興味本位だった。この中が機関室だということを知ってい

なかったら、入ることは無かっただろうが。

「ええ何コレ!？」

想像していたものとは大きく違った。優衣の想像では、いっぱいの機械に囲まれた煩い部屋、である。

しかしどうだ。目の前にあるのは、水の入った透明の丸い管（水槽）に、あまり大きく無い石が浮いているという奇妙な図。その装置が一個ではなく、まるで道のようにそれが向こう側まで連なっているのだだ。もしかすればこの大きな部屋すべてが、これに埋め尽くされているのかもしれない。

（そういや、クルーってどこにいるんだろうね。何か一回も見かけてないけど）

関係者以外立ち入り禁止。人の気配は無い。

これはもう中へお進みくださいと言っているようなものだ。

「それにしても、何だろうこの、石みたいなもの。なんか、電気みたいなものが出てるけど……」

（そういや、この世界に石油なんて無いから、どうやって船を動かしてんだろ、って思ってたけど……）

この、無数の管の中にある石。その石から発生する多量の放電。

「この石で電気を作って、船を動かしてるってこと……?」

部屋いっぱいに設置された水の管と石を見れば、納得がいく。永遠に続きそうなこの部屋も終わりを迎え、もうひとつ、さらに強固

な鉄の扉が目の前にあった。

（……鉄って、確か西ヴィアムで大量生産されてるんだっけ。製法は知らないけど、火山無いのにすごいなあ。宝石もそこで作ってるって言うし）

思いながら、ハンドルのような扉を開ける装置に手をかける。時計回しだと思って回してみるが、硬すぎてびくともしなかった。また、押しても引いても、この扉は開けられない。

（やっぱ一般人じゃ無理だね。この先にはそれほど重要なものがあるんだろうし……）

はあと息を吐いた。どうせ自分みたいな無知無能がこの先に行けるわけない……。

帰ろうと後ろを振り返る。

「———電光石アクサレン」

カッン、カッン、カッン。長靴の音とともに、冷たくも耳に心地よい声が、優衣の耳を打った。

「西ヴィアムで極秘の製法で作り出され、その多量な電気生産量に、ヴィアム王国は多額の金でそれを買い占めた。その電光石アクサレンを用いて、実験、かつ———試運転されたのが、この船という訳さ」

（な、何でいっつも変なトコロでこの人と会うかな、自分!!?）

暗褐色の髪と蒼い瞳を持つ青年——ルカが、黒外套をはためか

せながらこちらに近づいてきた。あだいたい、立ち入り禁止のところで知人と会う方が、おかしい。

「どいてろよ。この扉は、貴様の力じゃ開けられないさ」

「そ、そりゃ力は無いけど」

黒い手袋の皺を伸ばしながら、ルカがハンドルに手を掛ける。こちらを横目で見たルカが「そういう意味ではない」と皮肉げに笑った。

「見てろよ」

ルカが回し始めたのは、ハンドルではなくハンドルに取り付けられた小さなダイヤルだった。金庫に取り付けられるやつではなく、四桁の数字を選ばなければ開けられないような、そっちのダイヤル。ルカはダイヤルを迷うことなく「1213」に合わせた。

「反時計回りに回し」

ゆっくり反時計回りに回し「ダイヤルを再度合わせる」という宣言どおり、またダイヤルを弄り始めた。「1212」と合わせると、ゆっくり扉を押し始めた。

音も立てず開いていく鉄の扉に、優衣はしばし呆然とする。

「な、何であなたが扉の開け方知ってるの？　しかもなんで立ち入り禁止の場所に？」

「まず、…私より先に、この場所に入ったのはどこのどいつさ」

「うっ。た、確かに」

正論をついてくるルカにたじろく。どういうわけか、扉を開ききった後に「表だろうが裏だろうが、五感が良いんだ」と小さく答えた。

「はあ？ 意味わかんない」

優衣の質問には答えず、ルカがさきさき前に進んだ。

そこには、今までより大きい電光石が、それよりも数倍も丸くて大きな管（水槽）に浮かんでいた。大きいとは言っても、岩という表現には達しない。強いて言えば、人間の子どもくらいの大きさだろうか。

「4デッキの船首バウと3デッキ船尾アフト。二つがこの船の動力源となっている。つまりだ。もしこの装置を壊した場合」

ルカが腰から銀剣を引き抜いて水槽に矛先を当てた。

「――この船、完全に停止するぞ」

もし、大陸と接岸していないこの状況で、船が動かなくなったらどうなるか考えて、優衣は内心ぞつとする。

「な、なに縁起でもない……」

彼は銀剣を鞘に納め「各国の貴族・王族も集まっている。何が起きてもおかしく無い」とつぶやく。

彼は、コウリから渡された手紙を思い出していた。

彼女^{優衣}に見せれば、完全に読めてしまうであろう古代ロヴィア語の字で書かれた、その手紙の内容。

『ユイの護衛をしてほしい。一緒に船に乗ってくれないか』

どうして側近の秘書ではなく、バロン王国の騎士の身分である自分にそれを頼んだのか、容易に察することができた。

（やはりコウリ殿も気付いているのか。今だ王城にバレていないとなると、コウリ殿に借りを返さねば、な）

ルカが急に考えふけた顔になったので、優衣はゆっくり彼に近づいた。

「あのさー、船が完全に停止するとか。あなた意味不明なコト連発しすぎじゃない？ 今の今まで、あなたの言葉で理解できたことなんか一つも……——」

どうしたの？ と、問いかける。彼が見つめる先——床に、何かあるのだろうか。

そこを見るが、紅紫の斑模様^{マダラ}が床に点々と付着しているだけだ。

……こんなの最初からあった？

「ふうん。伝承通り、やはり蜘蛛^{クモ}は紅い毒素を撒くのか」

あでやかな笑みを浮かべて、ルカは「行くぞ」と呼びかけ歩き出す。それはまるで、もう調べ終わったかのように。

（……………この色、何か気持ち悪い……）

床に点々と付着したような紅紫の斑模様、吐き気に似たものを覚えながらも、優衣はルカを追いかける。

ちようど、優衣達がこの部屋から出て、鉄の扉を閉めたころだ。

さきほど、優衣とルカが立っていた所には、紫の斑模様は生えず。それ以外の所は、紅紫の斑模様が繁殖していった。

毒々しい紅紫が部屋を覆い——やがて、電光石アクサレンのある水槽まで到達する。

紅に包まれたのなか、電光石だけが弱弱しく輝く。

ピキい……………

水槽に、わずかな亀裂が走った——

この水槽に亀裂ができたことは、まだこの時誰も知らない。

クルー
チーフ・エンジニア乗組員や機関長……………そして、ついさっき部屋から出て行った、優衣とルカでさえも。

「へ？ 仮面舞踏会？」

優衣はどういうことかと首を傾げた。この話を持ちかけてきたのは、もちろんコウリである。

ルークを待とうとしていたのだが、自室でうじうじしていたコウリを心配になり、話をしていたらこんな話題をふっかけられた。

「そうだよ。せっかく旅行に来たんだから、参加しないとね」

仮面舞踏会という言葉聞いた瞬間、またメンドイもの着るの？ というのが頭の中に湧き起ってしまう。

「わ、わたしに参加しろと？」

「そうだよ。企画者はこの僕だからね」

また王子スマイルで強引に話を進めようとしてくれるから、コウリは要注意だ。しかし、昔は憧れていた台詞を、平々凡々な優衣がしみじみ思うことになるとは……考えられない。

（パーティに飽きた）

ソファに体をダイブさせる。ぼふんと跳ねた体を仰向けにさせ、目を閉じた。

「――大丈夫だよ。今回は、私服オツケー。それに、ユイは制服の方が似合うからね」

「せ、制服？　で、でも、いま制服なんて」

優衣が着ているのは花柄のワンピースに腰ベルトという服装だ。制服なんて、いったいいつの話だろう。ここ何週間も制服を着ていない。

「大丈夫。ほらここに」

「えええええええ！？　何であんたが制服持ってんの！？　あなた本当に変態！？」

コウリがとり出したのは、ブレザーの制服であり、確かに優衣の物だ。

「まあまあ。制服でオツケーなんだから、気にしない」

「否定しないんだ…」

「で、どうする？　ほんとに仮面舞踏会に出ない？　別に出ないんだっただらそれで良いよ。強要はしない」

意外にあっさりと来た。良いくらいだ。こっちは舞踏会に飽きているのだから。

「――その代わり、明日一日、オウリを頼むよ」

「それって強要って言うんじゃない！？　二択しか無いし！」

オウリはコウリとは異なる人格で、瞳はいつもルビーのように赤い。

比較的オウリの方が扱いやすいが、たまに銃を乱射してくるし、オウリはただの知り合いみたいな関係である。

（そういや、今まで一番、喋ったことが無い人なような気がする…。コウリと一緒にの人、なんだけど）

例えば、部屋に二人きりで入るとしよう。

コウリはコウリで何されるかわかったもんじゃないが、会話が途切れることはないであろう。

しかしオウリであれば、ぷつぷつと会話が途切れてしまうに違いない。

関西で沈黙とは負けを意味するぐらいだ。

「行くよ。仮面舞踏会」

ホント？　ありえないくらい眩しい笑顔を浮かべ、コウリが言った。

「うん」

（オウリと気まずい無言の時間を過ごすくらいだったら、ね……）

もしそうになったら逃げ出すに決まっている。

「じゃあ、今から行こう。もう夜だ。始まっている」

「えっ！？　今から！？　明後日とかじゃないの！？　んな急な」

コウリは優衣を部屋から引っぱり出し、廊下に飛び出した。

「それに、わたし、ルークさ……」

「いいのいいの。どうでも良いんだよ。早く行こう」

ルークに、自室で待て、と言われたのだが、コウリは早く行きたいようだ。会場はスカイデッキ。優衣が赤い瞳の少女を見た、あの甲板で行われる。

「――絶対、ルークだけには渡さない。渡さないよ……！」

(…………っ?)

コウリがつぶやいた内容をエレベーターの音がかき消した。



制服に着替えた優衣と、仮面をつけたコウリが、スカイデッキに着いた。今日は月の無い新月だ。この場を照らすのはライトしかない。

「って、ただたんみんな仮面つけて、楽しくお喋りしているだけじゃん！ 舞踏会っていうから、またダンスかと思ったよ！」

優衣は思いつきり脱力した。

そして————視界の端で、それに気付く。

(……………あの子…………)

赤い瞳で、一人佇むおさげの少女。

その雰囲気気付くことなく——否、本当に見えていないかのように通り過ぎていく人々。

ゆっくりと、少女の顔が上がり、視線が合った。

————ミツケタ。

ぞくり、と、優衣の背中が粟立つ。無意識で、コウリの服の袖を掴んでいた。

やっぱり……、あの子、何か怖い……っ

一步、後ろへ下がる。でも人々が邪魔して、思うように動けない。

「……………なるほどね。どうり変な気配がするわけだ。狙いは————僕の方かな」

(えっ……?)

コウリが仮面を捨てて自虐的に笑う。その笑いの次の瞬間、優衣は宙に浮いていた。



「居たよ。あそこ。あれがユイっていう子。ね。ほんとに居たですよ、正真正銘、本物の『太陽神の乙女』」

青髪碧眼の少年——ではなく少女が、同じように仮面をつける白髪の青年に話しかけた。

「ああそのようだ。だけど今はヤツを探すのが最優先だよ。暫定アルミスのユイ嬢は、あとで———すればいいのだ」

そして二人は、異変に気付く。ユイという少女とコウリ殿下が見つめている先にいる、赤い瞳をもつ少女が、不気味な声を上げていることに。

「ふーん。わかった。それより、あそこにいる赤い目を持った女の子。エネルギー反応が赤蜘蛛と似てるよ」

ワユルアは仮面をつけない少女を見つめてから、ウエストポーチ

から黒いタブレットを取り出した。

「……しかし、あの少女は人間のようだが…」

そうつぶやいたサイルの視線の先で、ユイという少女がコウリ殿下に抱きかかえられるのが見えた。

「!！」

赤い瞳を持つ少女が、戦闘形態となったのは、またちょうどそのときである。



オオオオオオオオっ！

赤い瞳の少女が、野生の獣のような声を立て始めた。

それに気付いた紳士や婦人方が、少女に見つめる中、コウリは優衣を横抱きにして視線とは逆方向に走っていた。

「ユイ。ごめんね。怖い思いさせて。

——君だけは守るよ」

コウリの金髪が揺れ、集団からある程度離れ、また憩いの場との

中点で立ち止まった。

(え……?)

瞬間、赤い瞳の少女の体が、いびつに変形していくのが、何故か気配で察知できた。

服を破り、触手が伸び——目が、体が、大きくなっていく。

婦人が気絶し、紳士が腰を抜かし——あたりが、混乱する。

「何……あれ……」

横抱きという体勢から元に戻った優衣は、大集団が我先にと逃げ出そうとする悲鳴も遠く聞きながら、甲板の船首の部分にいる、ライトの光で照らされた、何か不気味な”物体”をしっかりと見つめた。全長数十メートルという赤黒い蜘蛛。何十本もある赤黒い触手から毒々しい液素が垂れ、落ちた部分が一瞬で腐敗する。

たった、1滴足らずの液体で。

「予言通りだ。赤黒い蜘蛛。まさか人間に化けていたなんてね」

コウリが苦々しくも呟いた瞬間、優衣の頭の中で何かがはじけた。

『貴様、どこかで赤黒い蜘蛛に出会わなかったか?』

ルカが、先代アルミスに言っていた言葉。赤黒い蜘蛛、という名称は、目の前にいるあの巨大な赤蜘蛛のことではないのか。

(でも、そのあと、先代アルミスは、腕を噛まれたって言ってたんだし、……もしあんな大きなものに噛まれたら、死ぬよね……)

やっぱり、ただの偶然なのだろうか。

ドンッ……！

「これは、……船上じゃ、逃げられないかな……」

コウリのつぶやきに気付いて赤蜘蛛を見やれば、赤い触手が邪魔のものを掃うように、紳士や婦人を薙ぎ払っていく。紅紫の液体が薙ぎ払われた者に付着し、彼らは断末魔のような悲鳴を上げる。ジュジュッと獣が焼ける匂いが微かに漂った。

自分の足と手が震えている。心臓の鼓動も早い。

「大丈夫だ。普通の生き物だったら一分、鉄、木造等は一秒、……人間だったら、三十分は生^持きれる……」

「さ、さんじゅ、ぷん？」

短い。短過ぎる。そんな時間で、今も増え続ける毒の患者を手当てするのは不可能だ。まず第一に、あの巨大な赤蜘蛛をどうやって倒すかだって、問題なのに。

「人間は生まれながらにして、抗体を持っているからね。

——でも、いま説明する暇は無いみたいだ——ッ！」

赤蜘蛛が、狂喜するような咆哮を上げた。

赤蜘蛛が、来る――――

「――火炎放射、発射ッ!!」

高めのソプラノ声がとともに、熱気が優衣の頬を撫で上げた。その名の通り炎が放射され、赤蜘蛛の背中を焼く。しかし赤蜘蛛の行動が止まっただけで、外傷は見られない。

「やっぱり蜘蛛には炎でしょッ」

青髪碧眼でソプラノ声を持つ、美少年に見える少女は、使えなくなった火炎放射器を背後にある海に投げ捨てた。

傍にある床に置かれた巨大なバックから、宙に浮く丸い球体を取り出し――――いや球体自ら這い出し、アンテナのようなものが伸びる。

「な、なんで急に、炎が……?」

赤蜘蛛の背後から打ち出された炎が、まさか青髪碧眼ワユルアの少女のも

のだとは気付かない優衣は、状況を飲み込むことができない。

コウリに支えてもらって辛うじて立っているのに、必死に足を動かして、やっと一歩進む。

「誰かは知らないけど、ありがたいよ。正体不明の相手——それも蜘蛛でも、魔術くらい効くだろうね——ッ？」

「えっ、まさか——」

世界で三人。たったそれだけの人間の一人であり、また一度も魔術を使ったところを見たことがないコウリ。

コウリは地面に手を押し付け、方陣を発動させた。

「———《ザ・魔術イーストフィクション》———！」

紫光しんくうと共に現れ、徐々に大きくなる方陣に、優衣は食い入るように見つめる。

（これ……アルミスの試験のときに見た、天上に彫ってあったものと、同じ……？）

中心に大きな太陽。傍に小さな月。そして、人間。これと同じものを、優衣は、見た———

（でも、何で）

光が、いっそう強くなる。そして効いているのか、赤蜘蛛は動かない。

「形状は波。」

形成は半固体」方陣の円周からゆらゆらと揺れる波が出来始める。

「形式は手動

範囲は全域」揺れる波が真上に昇り、赤蜘蛛を取り囲む。

「――のち、――――展開――――ッ！！」

コウリによる発動の合図により、揺れる大波へと変化し、半固体となって赤蜘蛛を包み込む。

それはまるで蚕の繭のように……やがて――――爆発する。

…ドオオオオオオオオオンッ！！！！

魔術による爆発を目の当たりにしたのは、何も優衣だけではない。赤蜘蛛の背後―――そう、優衣とコウリからは見えない死角に位置には、彼らも居た。

「へえ。ほんとに持ってたんだねー。シェルバインと同じ魔力の持ち主」

ワユルアが楽しそうにつぶやいて、乾いた唇を舐める。そしてまた、隣に立っていたサイルが、眼鏡を奥で眼球を光らせた。

「予想を遥かに超える質量と力量。これは、シェルバイン高位魔術師が黙ってい

ない。

寮内の魔術師^{ガウス}たちが、騒ぎを起こしそうだよ」

球体型電子機器の横に立つワルアに視線を送り「データーは？」と、さも当然かのように聞いてみる。

「バッチリ記録したよ。まあ、これほどの魔力があっても、第六^化赤蜘蛛^{け物}に致命傷を与えることはできないみたいだけど。やっぱ上手くいかないよねー、やっぱ『永久^{ビットキャップ}の眠り』じゃないと無理かー」

再び、第六^{シックス・レッド・ラウ}赤蜘蛛に視線を投げる。

「——た、おした、の…？」

夜の闇に目を凝らして赤蜘蛛を見た。優衣はまだ足が震えているが、必死で地面に踏ん張りを利かせている。

「……………消えない？」

コウリは目を見開いた。

衝撃の事実だ。魔術こそ高貴な力で——術者の血を根源として使用する術^{わざ}。

多くの負担を要するがために、神に似たその力は、自然に影響を与えるほど強力なものだ。

まして、先祖返りのコウリの力で、赤蜘蛛だけ正確に仕留められ

るよう、方陣まで用意した。

しかし、———赤蜘蛛が姿を消すことはなかった。

「——理を歪めても、あの化け物は消せないのか？ そんな生き物、この世に存在するのかな……」

コウリから、笑みが消える。赤蜘蛛の体から流れ出る紅い液体が、甲板を腐らせていくのを、ただ呆然と見つめるしか、——。

「だからって、妹^{ユイ}を傷つけるものを———放っておけるものか——ッ」

今こそ、一年間の修行の成果を。今度こそ、成功させる。

（僕の妹。僕だけの妹。僕は見た。君が、何度も僕に笑いかけてくれたのを）

遙か幼き頃、母親を失った悲しみの果て、コウリは引きこもるようになった。

そんなとき、衰弱しきって死にそうになったとき、温かな夢を見た。

彼女が、笑いかけてくれる。そんな、当然のような夢を。

そしてどうだ。魔術を使える人間を召喚できないかと、つい何ヶ月か前に行ったら、——夢で笑いかけてくれた彼女が、目の前にいたのだ。

（やっぱり、あれは夢じゃなかったんだ。あの笑顔で、僕は、強くなると決心した）

何度も魔力を暴走させ、我を失い——挙句、時期国王継承者としては無能な王子、と、言われるようになっていた、あの時の自分。彼女の笑顔に励まされ、誰の手も借りず、独自の修行で、魔力を練りこむ。

（蜘蛛を葬り去る。存在を作るのと、消すのは、時空を歪める——）

彼女の存在を完璧にする、という最終目標において、蜘蛛の存在を消すのは——彼にとって通過点に過ぎない。

「オウリ……僕に力を………」

力を込め、コウリは再びさつきと同じ……いやそれ以上の輝きを持った方陣を、蜘蛛のしたに設置した。

今まで経験上、これは最高位の《魔術式》だと思っている。ので、一人で行う限度は、一回。

ツータンブ
『発動詠唱』、のち——展開。

——そ・ん・ざ・い・を・け・す・？

「！！！」

ぐにゃんと、方陣が意図的ではない波を見せた。

真っ暗なのに——夜なのに、蜘蛛の紅い目が、やけにはつきり見える。

憎悪と愉悦の混じった、目——

「はっ！ しまっ——！！」

「コウリっ!!」

方陣を残したまま赤蜘蛛が突進し、触手を伸ばしてきたので、優衣はとっさにコウリの腕を両手で掴んだ。

そして触手が、あの紅紫の液体とともに、コウリの腕に巻きつく。

コウリが殺されるっ！ 服が腐る匂いと音に、一層の不安感が募った。

「つく!!」

コウリは引っ張られないよう体勢を変えながら、余った片方の手で触手を掴む。

手に炎であぶられたような衝撃が走るが、気にしている場合ではない。

「大丈夫だよ。ユイ」

なぜ今、こんな風に微笑むことができるのだろうか。

もしかしたら死ぬかもしれない、この状況で。

なぜ今、こんな寂しそうに――――

「あっ！」

一瞬だった。触手が一気に二人を引き込み、空高く空中に放り投げる。

重力のせいかな、それとも風圧のせいかな、ほとんど目が開けられない。

……死ぬかもしれない。そんな悲観的な考えが頭をよぎった。

地面に落下して死ぬか、赤蜘蛛の毒素に当たって死ぬか、それ以外の方法で死ぬか。どのみち、無力な自分が助かる可能性は低い。

コウリの稀少希な魔術でも効かなかったのだから、この船上で全員、死ぬ――

なぜか、ふいに落下感覚が無くなった。

「僕が、僕だけが――君を救うから」

コウリが空中で優衣を引き寄せ、やわらかく笑む。王子らしい、とろけるような笑みであるが――

「な、何を…？」

優衣にとってその笑みは、空中で停止しているというこの状況よりも、恐怖を感じさせるものであった。

ない。

いけない。

それをしてはいけない！

「ま、……………っ。コウリ――っ」

コウリは両手を勢いよく広げた。

両手の爪の先から、細い銀の糸が零れ落ち、束となって編み出される。

右手から出でた糸は優衣に絡み、彼女を離れた場所に着地させ。左手から出でた糸は、真下にいる巨大な蜘蛛に絡みつく。

（ま、魔術は効かないはずなのに……………、……………!?!）

なぜ自分が、コウリから離されたのか、次の瞬間で理解できた。
そして、後悔した。

「コウリい——————ッッッ!」

糸がわずかに赤蜘蛛を持ち上げ、彼が再び重力に従って落ちていく。

なお、落下する場所は、甲板という場所ではない。

————コウリと赤蜘蛛が落ちていったのは、波がうねり屍が沈む、暗い海だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0776x/>

イーストタンプ

2011年12月26日22時58分発行